

怖する餘り、彼れの用ひた酒杯中には、一角の牙の一片を入れて、呑んだものである。牙は、象牙よりは堅實であつて、よく磨くことが出来るから、諸種の用途がある。イスラエル人は、これで、狩獵用の矢を造り、又小屋を構設する所の棒を造つたものである。油は鯨油よりも、質が佳良である。一角は、常に鰐、鵜、其他の扁平魚、牡蠣等の軟體動物を食するのである。

(三) 海豚科 (Delphinidae)

頭は小さく、吻は屢々延長する。兩顎には、一樣なる圓錐形の齒を有して、脱落することはない。鼻孔は二個あれども、吻頂に於て合して一個となりて、半月形を呈する。脊鰭は背の中央に位すれども、中には之を有せざるものがある。性活潑にして群居を好む。

(一) 眞海豚 *Delphinus longirostris*, Gray.

英に「ドルフィン」(Dolphin) といはる。口吻は鋭く尖り、齒は上下兩顎に、各五十六個あつて、齒頭は頗る鋭い。前肢は狭くして尖り、脊鰭は著るしく後方に屈曲する。背部は藍黒色にして、腹部は白く、體長は一丈乃至一丈六七尺に達する。本邦に於ては、相模、安房、駿河、四國、九州等に産し、常に大群をなして游泳し、時に灣内河川に入り來ることがある。其性質活潑にして、戯れ廻はり、波の内に出没跳躍する。殊に汽船等に追従する習

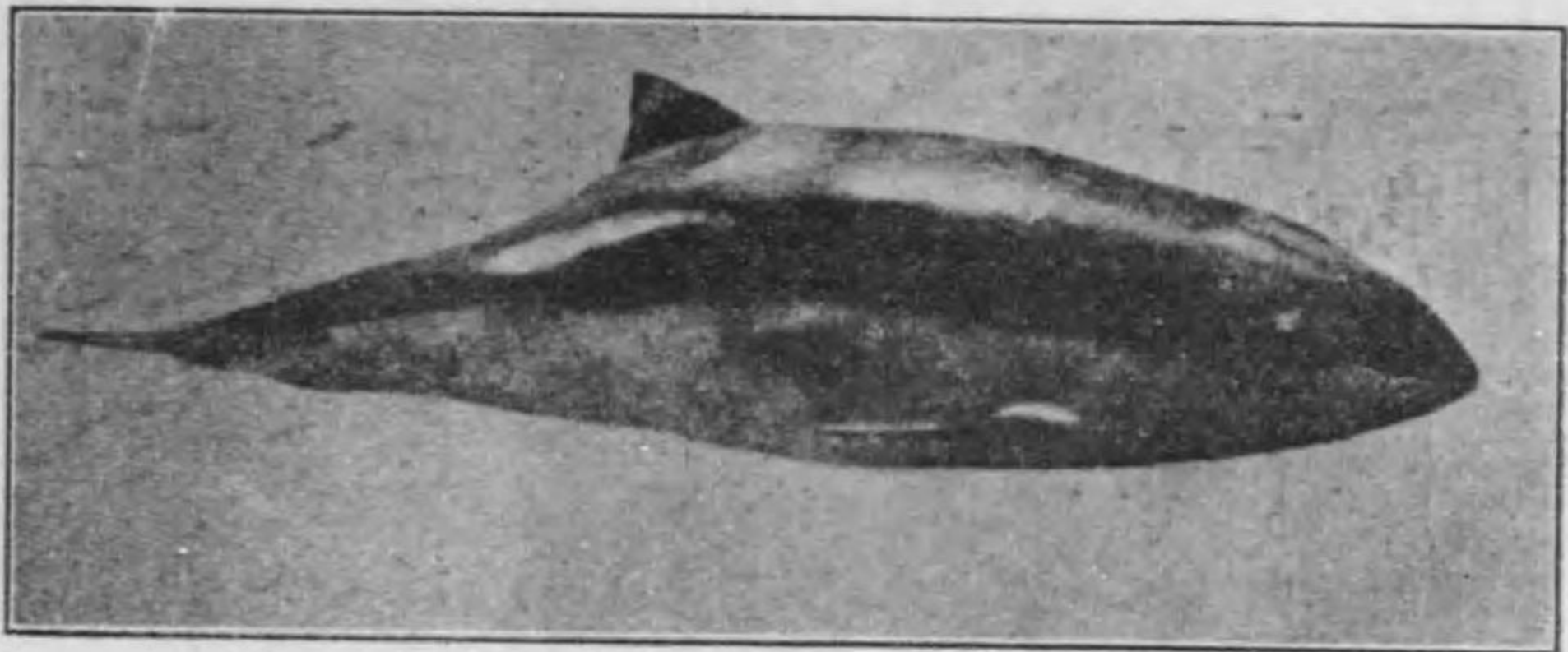
性がある。魚類には、大なる破壊者にして、また軟體動物及び甲殻類を食する。肉は食用とすれども、美味でない。油は機械油となし、革は靴を製するに用ひらる。理學界(第七卷)に、海豚の利用と題して、次の如き記事がある。

「海豚は、我が國近海の何れにも來遊し、常に大群を爲して小魚類を貪食し、時に沿岸に來るを以て、之を灣内に逐ひ込みて、捕獲すれども、生のまゝ、一頭一圓二三十錢に過ぎざるが故に、未だ盛に捕獲するに至らず。然れども、之が漁獲後の處置如何によりては、大に其價值を高むべしとて、石川縣地方に於て、試験せられたる結果につきて、吉岡哲太郎氏が、水産研究誌上に報告せられたる所を略載せん。

石川縣能登地方に於ける眞海豚(俗言ラッペン、イルカ)の漁期は、七八九の三月にして、一ヶ月平均七八千頭に上り、一頭平均重量二十四貫五百匁位なるが、試験事項として、

- 一 剥皮を丁寧にして、成るべく皮の坪數を廣くする事。
- 二 生皮より、肉及び脂肪層を、勉めて多く削り取り、其重量を減じ、運搬の便を計る事。但脂肪層より、脂肪を採集し、又脂肪層を薄くして、用鹽量を減ずる事。

三 海豚油及び腦油の利用。



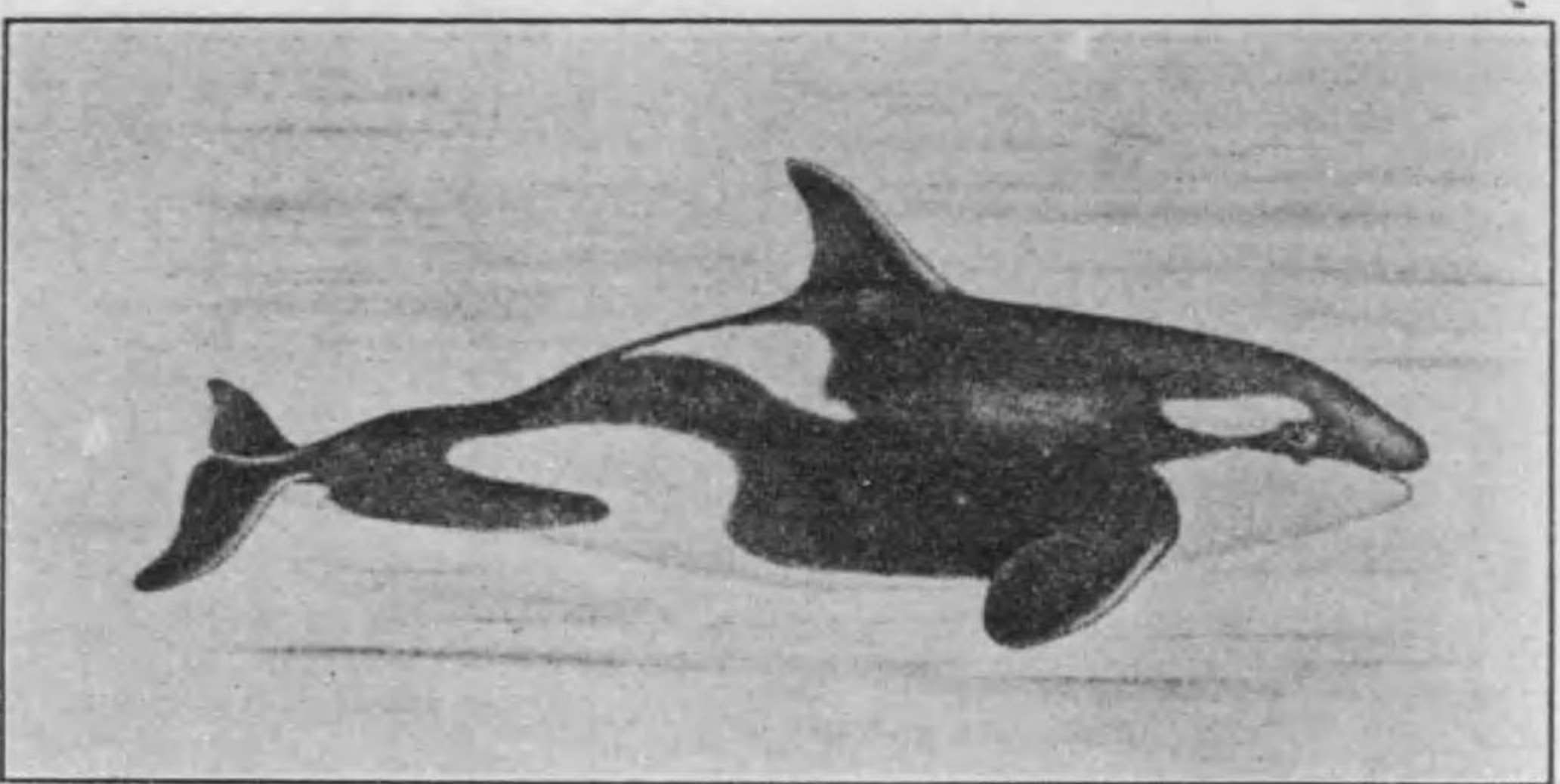
かるいみすれ 圖十四百第
(From New Illustrated Natural History of the World)

- 四 海豚鹽干肉(タレ)を製する事。
- 五 鯨其の他の部分より膠を採製する事。
- 六 各種の肥料製造。
- 七 筋の用途。
- 八 残肉及血等より、養魚餌料を製する事。

以上の試験に於て、好成績を得ば、優に一頭五圓位に價格を高め、全國より産する頭數を二萬とするも、年々十萬圓の産額に上るべし。當に此の點に於て有利なるのみならず、魚族蕃殖上にも得る所少からざるべし。

〔二〕 ねずみいるか *Phocaena communis*, Less.

英に「ハーボア、ポルボイス」(*Harbour Porpoise*) 又「コンモン、ポルボイス」(*Common Porpoise*) といはる。北太平洋及び北太平洋に廣く分布し、北海の英國沿岸地方に、最も普通である。我邦にては、眞海豚を漁するとき、稀れに捕獲せらるゝといふことである。體長は、平均五尺乃至七尺であつて、體の上面は青黒色で、下面は輝ける銀白色である。口吻は短く、且



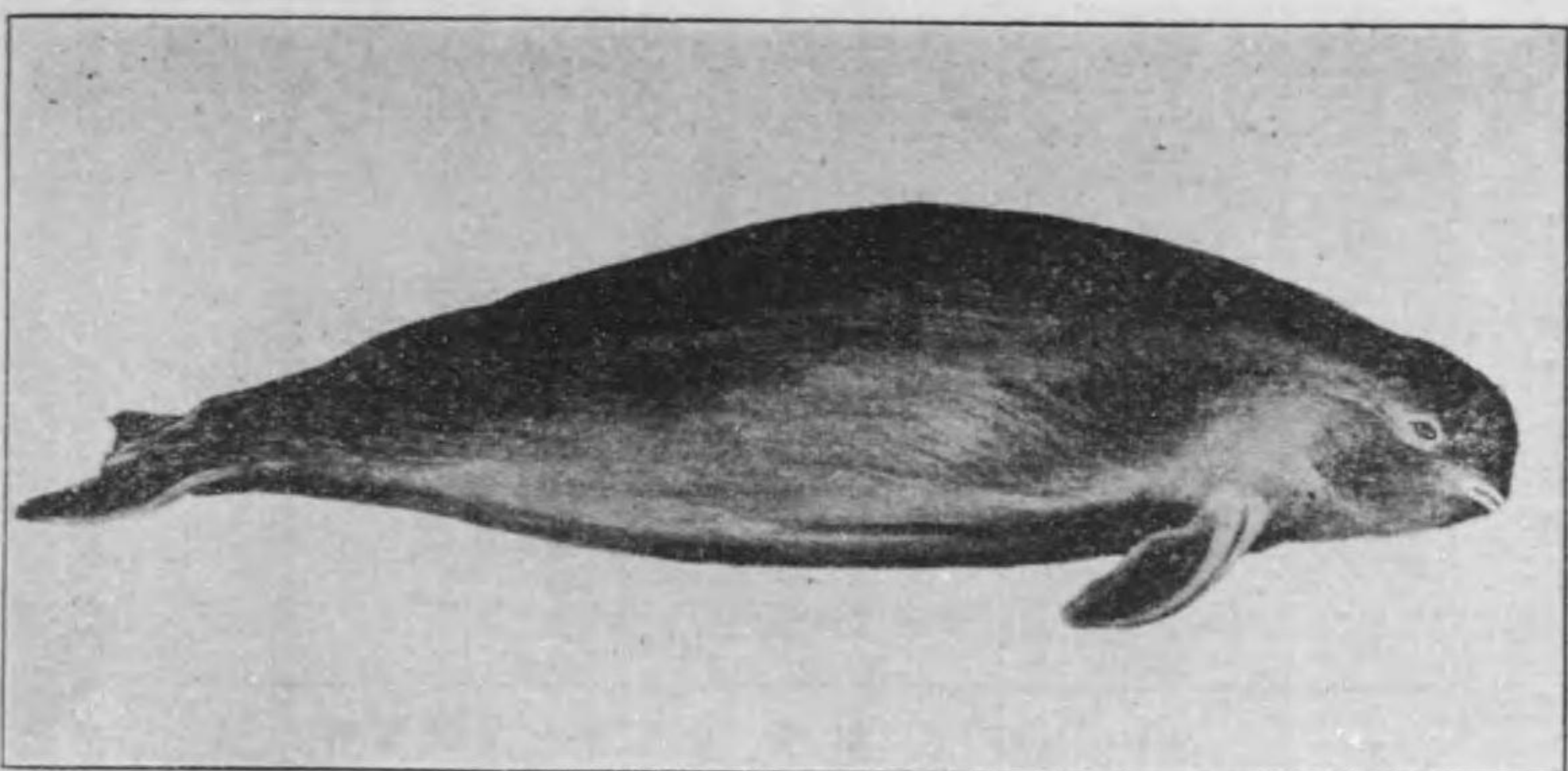
(After True) た ま か さ 圖一十四百第

つ一様に圓味を帯びて嘴状をなさない。魚類を食食すること多くして、鯀、小鯀等を食し、時には鯨類の如き大魚も食ふのである。この肉と油とは、食用となり、革は眞海豚の皮の如く、水濕を弾くを以つて、種々の用途がある。

〔三〕 逆戟鯨 又しやち又たかまつ

Orca gladiator

英に「グランブス」(*Grampus*) 又「キラー、ホエール」(*Killer Whale*) と稱する。その分布は、地球上到る處に亘り、北はグリーンランドより、南は濠太利亞に及んで居る。時々海豚の如く、河を上り來ることがある。體長は二丈以上に超ゆるものが多い。脊鰭は直立して、倒戟の如しである。故にさかまたの名がある。その性質狂暴にして、齒は極めて鋭く、魚類及び鯨族の大敵にして、海豚の一種なる「ベルガ」(*Beluga*) (*Delphinapterus leucas*) の如きは、脆くも



（圖物動産水要重本日大）リメナス 圖二十四百第

この獸の爲めに殺されるのである。又六疋位のさかまたの群は、グリーンランド鯨を攻撃し、鯨の身體不隨なるに至れば、忽ち、その舌に喰ひ付くのである。逆戟鯨の肉は、臭氣ありて食用とはならない。然し齒は、硬くして義齒として宜しいといふことである。

〔四〕巨頭鯨又ごごういるか又

ごんごう又ぼうずいるか

Globicephalus sieboldii, Gray.

英にパイロット・ホエール（Pilot Whale）といはる頭は特に巨大にして、眼縁に白色部を有し、背面は黒く、腹面は白い。體長は二丈有餘に達する。體には脂油を多く含み、その性質上等なれども、肉は喰ふに堪へずである。

〔五〕すなめり又なめうを又でごん
又でごんごう

Neomeris phocaenoides, Gray.

英に「ネオメリス」(Neomeris)と稱する。

體長は一丈三四尺ありて、背部は黒く、顎は嘴狀でない。頭は圓く、眼は小さい。多くは個々游泳して群をなさない。而して大海には少く、港灣等に多い。油を採る外用途はあまりないのである。

第三亞目 海牛類 (Sirenia)

〔一〕儒艮科 (Manatidae)

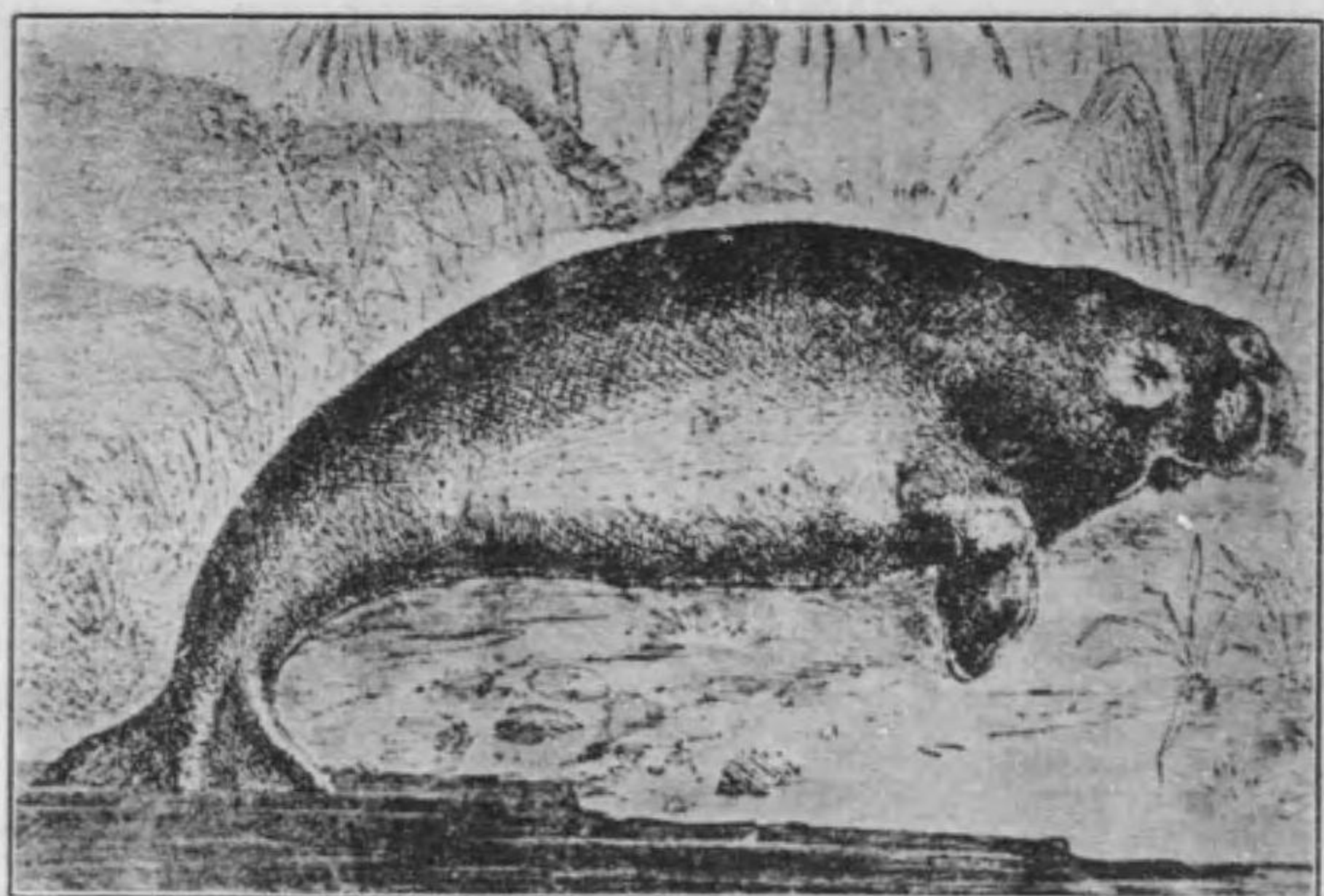
鼻孔は、頭部の遙か前方に位する。

〔一〕儒艮 (Dugong) 又ざん (琉球方言)

又ざんのいを (琉球方言)

Halicore dugong, Illiger.

本邦にては、八重山群島附近に多く棲息するが、其他、紅海、印度洋、濠太利亞の沿岸に棲息する。形状海豚に似て、身の長け八尺以上に達する。頭は圓く、鼻孔は小さく、左右相並んで、頭部の前端に近く位



良 儒 圖三十四百第

し、前方に向ひて開き、これには肉唇を有する。口は小さく、口邊には柔軟なる毛を生じ、唇厚く、目は最も小さく、耳殻はない。皮膚は極めて滑らかにして、短毛を疎生する。背面は灰色に、腹側面は白色である。肩は左右に張り、牝は胸部に、圓く膨れたる二個の乳房を有し、琉球にては、三四月頃稚兒を伴ひて游泳するが、兒に哺乳する際には、前肢にて



第四百四十四圖 海牛

兒を抱き、兒の頭と自分の頭とを、共に水上に出す僻がある。故に遠く之を望めば、恰も人間の游泳するが如く見ゆる。そこで、人魚といふ魚身人面の獸を、想像せしめたことであらう。彼の徳川時代の博物家小野蘭山先生の魚譜には、れいゝと、魚身人面の幽靈的怪物の繪畫が、載せられてある。

上顎には、長大なる門歯が、二枚あつて、その左右兩側には、臼歯が三枚宛ある。前肢は、鰭状をなせども、後肢なく、尾鰭は水平に擴がつて居る。常に群居して、海藻及びアマモ類の如き海藻を食する。琉球にては、その肉を食用とする。毛皮及び油は、種々の用に供せらる。

〔一〕 海牛 *Manatus*

英に「マナチイ」(*Manatee*)と稱する。體は儒艮より肥大し、且つ頭は

儒艮よりも稍伸直にして、尾鰭は圓い。牝がその子を、前肢の間に抱へて、哺乳すること、は儒艮と同様である。これには次の種類がある。

〔一〕 亞米利加海牛 (*American Manatee*) *Manatus Australis*, Tils.

メキシコ灣及び南米東部の淺海に産する。體長は普通八尺位で、皮膚は暗褐色である。海藻其他の海藻を食する。

〔二〕 亞弗利加海牛 (*African Manatee*) *Manatus senegalensis*, Desm.

亞弗利加の西部海岸に産する。

第七目 齧齒類 (*Rodentia*)

此類は、堅硬なる植物質を食するを以つて、その齒の構造は、大に特色を有して居る。顎は頭の大きさに比して、重々しく大きく、以つて門歯を支へるに充分である。門歯は、通常上下兩顎に、各二枚宛を有し、その前面にのみ、珐瑯質を有する。又齒質は、齒の後面よりは、前面の方が堅硬なるを以つて、堅き物を噛むに當りて、齒の後面は、漸々に減損し來りて、鑿狀を呈する。而して門歯は、絶へず成長して、消耗せる部分を補ふのである。犬齒を缺き、門齒と臼齒との間には、廣き隙間を有する。臼齒は、その咀嚼面に、珐瑯質の横行せる褶襞を有し、鼠の如く雜食するものに限りて、結節狀の突起を有する。大白齒の

数は概ね^三なれども、小白歯の数は一樣でない。或は全く之を缺くものがある。食物を咀嚼する時には、下顎は縦の方向に於て前後に動き、臼歯の褶襞状の部と符合するやうになり、且つ下顎は後退するとき、遙かに後方に引かるゝを以つて、門歯は上下相對して、摩擦することはないのである。

歩行するや、必らず蹠を着けて歩き、指趾は自在に動き、その末端には、鉤状の爪を有する。然しながら、稀に曲れる扁爪を有するものもあり、又蹄状の爪を有するものもある。

齧齒類は、種類頗る多くして、現存せる哺乳類の約三分の一近くもある。而して亞細亞、亞弗利加、歐羅巴、亞米利加等、地球上到る處に棲息し、大多數のものは、小形であるが、その繁殖力は、極めて盛んであつて、多くのものは、農圃山林の害獣である。

(一) 兔科 (Leporidae)

長き耳を有し、後肢は長く、有力で、尾は短い。齒式は $\frac{2.0.4}{1.0.3}$ である。

(一) 飼兔 *Lepus cuniculus*, L.

英に「ラビット」(Rabbit) といはる。門齒の数は、上顎に四本、下顎に二本ある。上顎にある門齒は、中央のもの大なれども、その左右にあるものは小形である。臼歯は、上顎の兩

側には六本宛、下顎の兩側には五本宛ある。唇は厚く、上唇は、その中央に於て裂け、所謂兔唇を呈し、最もよく動くのである。口の周圍には、長き剛毛がある。耳は大きくして、自由自在に動き、眼も大きくして、顔面の側面に位し、赤色若くは黒色である。鼻孔は斜に吻端に開き、且つ自在に動く。頭に次いで短き頸部を有し、尾は短小にして上向する。前肢は後肢よりも遙かに小さく、五指を有すれども、拇指は極めて短く、且つ毛に被はれて隠れて居る。後肢は、その長さ殆んど前肢の倍位ありて、これには四趾を有し、その中央にある二趾は、甚だ長げれども、兩側にある趾は短小である。前後肢共に、趾には爪を有し、且つ毛を密毛する。

飼兔は、一年六回も分娩し、一回の産兒は、三乃至七八疋に及ぶのである。交尾の期間は、七日乃至十日位も繼續し、胎兒は交尾後三十一日目にして生まる。子は生後十二日にして眼を開き、三十日乃至四十日にして乳を離れ、百二十日乃至百五十日を経れば、親兔となるのである。乳房は、牝の腹面の左右に、四對乃至五對ある。トーマス、ベナント氏の計算する所に據れば、茲に一番の飼兔があつて、年に一回子を産み、毎回八子を分娩し、且つ順次斯くの如き割合にて繁殖するものと假定せば、四ヶ年間に百二拾七萬四千八百四十頭の兔となる勘定である。

兎の蓄殖の爲めに、非常に困難せる例は、古來少くはない。昔羅馬帝國の時代に、パレアリック群島に、兎が非常に繁殖して、耕地を荒し、山林を害し、非常に損害を及ぼしたる爲め、住民は時のアーガスタス帝に向て、軍隊の派遣を求め、之を驅除したといふ事である。近き例を云へば、濠太利亞州の兎にして、濠州には、もと兎は居らざりしが、今より二百二十數年前に、歐州より、飼兎と山棲野兎 (Mountain Hare) (*Lepus timidus*) を輸入し、之を各地に移殖したりしに、氣候の相應せると、食物の數多なると、且つ又兎を殺す鳥獸の居らざりし爲めに、非常に繁殖して、遂には山林牧場を荒し、牧羊業や農業に、大損害を來たさしめたのである。地主耕作者は、太く之を苦んで、罾ワナを造り、或は毒殺をなし、又は牝を目掛けて屠殺し、其他、鳥カこれらの微菌を兎に移して、傳染させ、或は又兎が來つて水を飲む所を、網を以て覆ふなど、種々工夫を運らし、費用を擲ちて撲滅を試みたれども、僅かに一時其數を減したるのみにして、十分の効驗を見ることが出来なかつた。ニューサウスウエールズのみにて、千八百八十三年より、千八百九十年迄、七ヶ年間の費用は、實に八十萬三千五百七十四磅に達し、一ヶ年間に、二千五百二十八萬頭を殺したといふことである。然し、今は大ひに、その驅除法も整頓し、且つ兎の肉を罐詰にするとか、毛皮を利用する道も開らけて以來、自然に之を捕獲すること多くなり、又兎同

志の生存競争が烈しくなり、幾分か自然の平均を得て、もと程兎の害が烈しくないやうになつたと、いふことである。

飼兎の祖先は、地中海附近、亞弗利加等に蕃殖せしものにして、歐羅巴人によりて、西班牙に輸入せられ、それより歐州は勿論、支那本邦にまでも渡來したものである。これには幾多の品種がある。今その主要なるもの一二を左に説述する。

(一) アンゴラ飼兎 (Angola Rabbit)

原産地は小亞細亞のアンゴラにして、長き絹狀の毛を有する。

(二) 和蘭飼兎 (Dutch Rabbit)

愛翫用種にして、體は極めて小さい。毛色は黒色、褐色、黄色、灰色等にして、頸には必ず白輪を有する。

(三) ロツプ、イーヤド飼兎 (Lop-eared Rabbit)

耳は非常に長く、一尺五寸乃至一尺八寸に達し、且つ垂下する。體色は褐色、黄色、灰色等である。

(四) 支那飼兎

通常本邦にて飼養するもので、體色は灰色をなし、頭部は褐色にして、頸頂の毛は長

く、眼は紅くある。

〔五〕 パタゴニヤ飼兎 (Patagonia Rabbit)

體は大にして、一貫四百匁乃至二貫匁の體重を有する。耳は大にして半ば垂下する。愛翫用及び肉用種である。

〔六〕 白耳義飼兎 (Belgian Rabbit)

白耳義の原産にして、體稍大きく、美なる銀灰色である。即ち所謂佛國胡麻兎である。飼養するによい種類である。

飼兎は、愛翫用として飼養せらるゝのみならず、肉は脂肪分少く、味淡泊にして、食用に供せらる。純白長毛種の毛を紡績して、羅紗を織るに用ひ、毛皮は、洋服の袖口、襟頭、外套の裏、頸巻、中折帽子、敷物等を製するに用ひらる。口鬚は筆を製するに使用する。また飼兎は、病原菌培養の實驗材料として、醫學上に多く使用せられ、糞は作物の肥料として賞用せらるゝのである。

〔一〕 野兎 *Lepus brachyurus*, Temm.

英に「ハレーヤ」(HARE)と稱する種類に屬する。北海道には産せざれども、本邦の山野に

棲息する。毛色は茶褐色にして、少しく灰色を混する。嘗つて捕獲したる一標品を檢せしに、體長は一尺七寸ありて、これに對して、耳殼の高さは、三寸七分あつた。この耳殼は自由に動かすことを得るもので、その聽力は最も鋭るごとく、物に驚くときは耳を聳て、尾を立て、忽ちその穴の中へ跳び込むのである。後肢と前肢との長さは、九と五との比である。斯く後肢が長きを以て、山や丘陵の斜面を駆け登ることは、極めて巧妙に、且つ迅速であるが、之に反して下ることは、最も拙劣である。尾は最も短く、一寸位にして、上に向いて居る。四肢共に、蹠には密毛を密生して、恰も毛布を付けたるが如しである。されば、山村の婦女は、後肢の膝關節より、肢を切り去りて、之をば化粧用の刷子にして、白粉を塗るに用ひるのである。

體は、左右兩側より、壓抑せられたるが如き形をなし、頸は短く、頭の上頂部は、凸圓狀をなし、前方は幅廣く、眼は甚だ大い。四肢にある爪は、少しく曲りて、長三角形をなし、且つ尖つて居る。體毛の中で、長い毛は、その基部に於て、甚だ細く、先端に至つて太く曲つて居る。又長毛の間には、短き細毛を混する。四肢にある毛は、長けれども、耳毛は短く、口の周圍には、長き剛毛二十數本、眼の上には五六本の剛毛を生ずる。而して尾の毛は、柔軟にして、綿の如しである。

野兔はその食物を探りに出づるや、棲み慣れたる處を、遠く離るゝことは稀れである。晝間は大概穴の中に隠れ、曉方若くは夜間出て、食を索むるのである。兔の敵には、鷺鷹、鴉の如き猛禽類若くは鼬、鼠科、狐の如き食肉獸がある。嗅覺と聽覺とは、極めて鋭敏にして、よく危険を知りて、所謂脱兔の如く逃走するのである。

野兔は常に山野に棲息し、その食物は、植物質に限らるゝを以つて、森林及び耕地を害することが少くないのである。即ち大根、胡蘿蔔、蕎麥、豆、小麥等の作物を荒し、竹藪に出で、筍の嫩芽を食ひ、その他松杉等の樹皮を剝ぎ、その芽を傷つくるのみならず、造林の爲めに、栽植せられたる幼松の如きは、その幹の太さが、吾人の拇指位に過ぎざる頃には、容易に咬断せらるゝことが普通である。その肉は食用に供せられ、後肢の膝關節より以下を用ひて、前にも述べたるが如く、山間の婦女が、化粧用の刷子に用ひるのみならず、又提灯張りの刷子として用ひる地方もある。

〔三〕 越後兔又白兔 *Lepus variabilis*, Pall.

英に「アルペン・ヘーヤ」(Alpine Hare)といはる。本州の北部即ち越後、加賀、仙臺及び北海道等に産し、またスエーデン、ノルウエー、アルプス山等の如き山地にも棲息する。夏季の毛色は褐色なれども、冬季に至れば、耳の小部分を除き、全身白色を呈するので、有名である。

兔に關する傳説

左の記事は、臺灣日々新聞(明治三十一年一月一日)紙上に、白兔山人の「兔に就て」の記事より、抄録したものである。これ、當時任に臺灣にありし、亡兄秋山省二の、特に著者の許に送り來りしものにして、今や余に取つては、亡兄を追想する一紀念物となつたのである。

○兔と神さま 兔と云ふ動物は、不思議に、神様と縁故を有て居る。日本では、神代の時に、大國主神が稻羽の素菟を療したと云ふ事が、神話に残つて、古事記にも見えて居る。現に、今でも、因幡國高草郡内海村の海邊に、白兔社と云ふ神様が祭つてある。夫れが即ち神代の遺跡で、今は高草郡に屬して居るが、氣多郡と竝んで、氣多崎の内である。支那では、韓愈の毛穎傳に、其先明視。佐禹治東方土。養萬物有功。因封於卯地。死爲十二神とある通り、古來十二支の中に數へて、神の部類に入れてある。

○兔と月 月と兔は、昔から極めて密接な關係があつて、月の中で、兔が餅を搗くと云ふ事は、何處の國でも、一樣に古來云ひ傳へて居る。其れは、月の中に、丁度兔が杵を持つて居る様な形が見えるので、云ひ出した事でもあらうが、此傳説は、恐くは支那から來たのであらうと想はれる。即ち毛穎傳に「明視八世孫諱當殷時居中山得神仙之術竊婦娥騎蟾蜍入月中」とあり。又典略と云ふ書に「兔者明月之精」とあり。其他陸佃が「兔者吐也、

明月之精視月而生。故曰明視などの關係から、云ひ出した事で、支那でも、兎が月の中で、薬を搗くと云ふ事を、昔から云つて居る。即ち歐陽修の詩に「天冥々兮雨濛々。白兎搗藥姮娥宮。玉關金鎖夜不閉。竄入滌山千萬重」と云ふのがある。夫れから、尙月と兎の關係に就いては、我國では、例の俗諺に「兎兮兎兮、何見て走る、十五夜お月さん、見て走るビョン〜」と云ふ有名なものがある。支那にも、秦少游の放兎行に「兎兮兎兮聽我言、月中仙子最汝怜。不如亟返月中宿。休顧高岩併岳麓」と云ふのがあつて、實に其調子が、能く似通つて居る。其外にも、支那では、兎に就いて一種の傳説がある。夫れは、兎は他の獸類と異つて、鳥と同じく、八竅である。开して、雄が無いので、月を望んで、孕むもので、子を生む時は、又口から生むのだと云つて、現に格物篇にも、無雄望月而孕とある。王充論衡にも、同じく口から生むことが、眞面目に書いてある。又臺灣でも、土人に聞くと、矢張同じく「兎望月中桃」と云ふ一種の俚説があるさうです。夫れで、支那では、古來月の異名を、玉兎と云つて、日の金鳥と併せて、月日の事を、直ちに兎鳥と書いて、一般に通用して居るのである。

○兎の名と兎の字 兎の名に就いて、和訓栞と云ふ書に、うは其本名にして、さぎは兎を、梵に舍迦と云へるによりて、合せ稱するなるべしとある。兎に角、兎の名を單にうと稱ぶのは、現に卯年と云ふのでも知られる事であるが、梵語を合せ稱したと云ふ説は、

直ちに受取り難い、うと單稱する様になつたのは、恐くば卯の漢音から、轉訛したものであるまいか。萬葉集東歌に、をさぎと讀んだのがある。現に今日でも兎をさぎと稱ぶ地方がある。をさぎうさぎ杯と云ふのは、上古からの事であらうと思はれる。兎の字は又楚と書く。而して現今は一般に兎と書くけれども、誤りであつて、免と書くのが、正しいのである。韻會に歐陽氏曰免從免字加一點俗作兎非とあり。免に一點を加ふる、即ち兎字の正しいのは、現在玉篇其他の字引を見ても、兎の字の出で居るものは、殆んど絶無であつて、多くは免の字である。然るに近來、世人多くは兎字を用ひ、現に活字にも兎の字の外は、之を用はず。免の字は、字母にも見當らぬ有様である。想ふに免の字は、免の字と誤り易い所から、何時しか一般に兎の字を用ふるやうになつたのであらう。

○兎の吸物 徳川幕府では、お正月の元日に、兎の吸物を嘉例として用ひた。三河風土記に、上野住人徳川左京亮有親の子息親氏は、去る頃、扇谷の軍の時、父子共に圍を破り、本國上州徳川に歸り、暫し蟄居して、世の有様を窺ひ居たるが、永享十一年三月上旬、有親父子共に徳川を遁出で、信州に趣く、爰に小笠原清宗が三男、林藤助光政と云者あり。持氏在世の時、數年近習し勤仕しけるが、讒言の爲めに所領を沒收せられ、浪々として名字を改め、林と號し、信州の山家に蟄居せり。有親父子、鎌倉に在りし時、睦まじかりけ

れば、十二月の下旬藤助を尋ねて彼こに至りしに、光政大に喜悅して、之を饗せんと欲すれども、一物なし。二十九日自ら雪を分けて狩し、兎一疋を獲たり。翌十二年正月朔日、有親父子に、雜糞を獻じ、且兎の吸物を進む。是よりして、兎の吸物を以て、徳川家の嘉例となす。云々とあり。即ち是の例に原いたものであらう。且つ古來、兎は、一疋二疋と云はず、一羽二羽と云つて、穢を忌むにも、卵や魚類と同一にしてあつたのである。

〔二〕 豚鼠科 (Caviidae)

白齒は^ニである。四肢の蹠は裸出し、前肢には四指、後肢には三趾を有する。

〔一〕 豚鼠 又 天竺鼠 *Cavia cobaya*, Schreb.

英に「ギネア・ピッグ」(Guinea Pig)といはる。ギネア・ベルーブラジルの原産にして、よく人の飼養するものである。耳と四肢とは短く、尾はない。毛色は、個體に因つて變化があるが、概して白色、赤色及び黒色にして、これに、大さと形状とが異なる。種々の斑紋がある。生れて十ヶ月も経つと、子を産むやうになり、一産に六乃至十子を分娩する。生まれた子は、既に立派なる齒を具ふるを以て、僅に二日を経れば、自分で穀粒を嚼ることが出来る。

〔二〕 アペリア *Cavia aperca*, L.

體軀の大きさは、鼠より大きくない。牝は多産にして、子は産まるゝや、略完全に發育し居りて、唯大きさが親より小さい位に過ぎない。ブラジル及びバラグアイに産するのである。

〔三〕 パカ *(Paca) Caelogenys paca*, L.

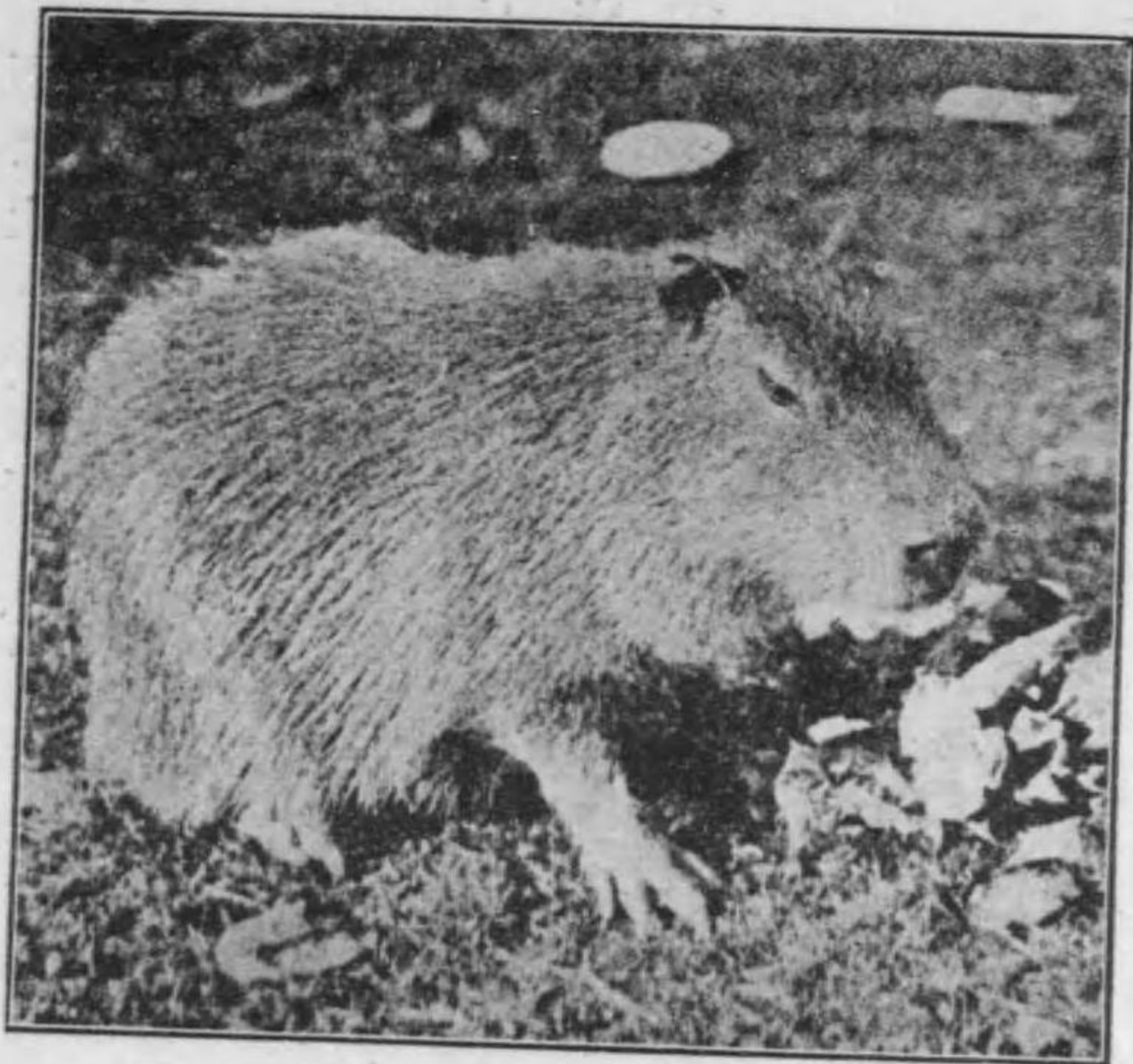
頭は大きく、頬囊を有する。四肢は稍短く、後肢は前肢よりは少しく長い。而して指趾には、穴を掘るに適する爪を有する。ブラジル、ギネア、バラグアイに産するのである。

〔四〕 アゴウチ *(Agouti) Dasyprocta aguti*, L.

體の大きさは、兎位あつて、體の後部の毛は、長くして橙黄色に富めども、他の體部の毛は、短く粗くして、光澤を帯び、色は橄欖褐色である。四肢は長くして細い。耳は充分に發育しない。物に恐怖し、又は忿怒するときは、體に生ずる短毛の先端をば、直立せしむるのである。ブラジル、バラグアイ、やガイアナ及び西印度に産し、甘蔗畑に大害を與ふるといふことである。

〔五〕 カピバラ *(Capybara) Hydrochaerus capybara*, Erxl.

ガイアナに多く産する。齧齒類中の最大なるものにして、長さは四尺、肩に於ける高さは一尺五寸で、體重は約百封度^{ポンド}に達するのである。體の大きさ、豚の剛毛に似たる粗毛



ラバピカ 圖三十四百第
(After Protheroe)

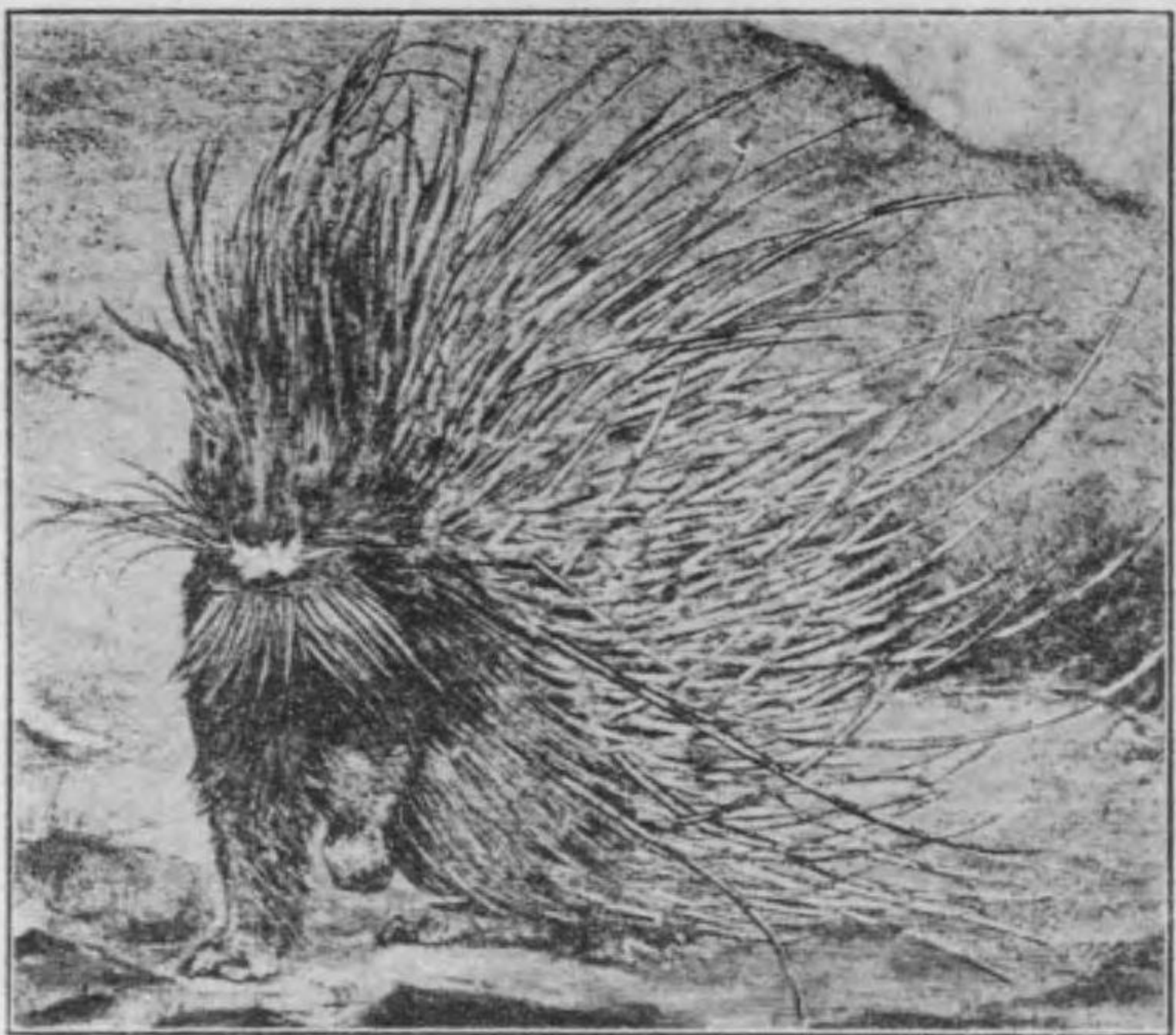
蹄狀の趾及びその無細工の態度は、如何にもよく豚に似て居る。而して四肢は稍長くして、趾には半ば蹠を具へ、よく水中に游泳するを以て、屢々「ウヲター、ホッグ」(Water Hog) (水豚)と呼ばれて居る。頭は大きく、耳は短く、圓く、口吻は鈍く、尾は之を缺いて居る。毛皮は、薄黒い帶黒灰色にして、又幾分か黄色を帯んで居る。この獸は常に小群をなして、河畔に棲息し、植物を食する。又「カービンチオ」(Carpincho)の名がある。肉は麝香臭ひけれども、食品として佳いと云はれて居る。この獸の敵は「ヂャグラー」であつて、彼れの爲めに、盛んに殺戮せらるゝのである。

(三) 豪猪科 (Hystriidae)

鼻は短く、且つ鈍い。而して背部には棘毛を具へて居る。

(一) 豪猪 (Hystrix cristata, L.)

英に「ポルキユバイン」(Porcupine)といはる。これは大釘を有する豚の義である。南部歐羅巴及び亞弗利加の北部と西部とに産する。體の大きさは三尺半に達するものがある。上顎には強健なる門齒を具へ、眼は小さく、耳は短く、鼻端には長い強い髯を有する。



圖四十四百第

背部、臀部、腿部には、五吋乃至十吋の長さをも有し、且つ黒と白の斑輪がある棘毛を密生する。一たび敵の攻撃を受くるときは、この棘毛を直立して、敵にその先端を向け、體をば栗の毬の如くに圓めて、敵の攻撃を防ぐのである。棘毛の外に、頭と背とには、それよりも長い屈撓する所の棘毛を有する。是等の毛は、皮膚に嵌入すること弛るきを以て、一たび敵を打つときは、その傷所に入り込む。殊に長き棘毛の先端には、倒さになれる鉤を有するを以て、皮膚より之を脱き出すのは、仲々容易なことでない。之が爲めに、豹や虎で

も負傷して大に苦しみ、従つて食物を搜索する勇氣もなくなる程であつて、遂に餓死することがあるといはれて居る。

前肢には四指、後肢には五趾を有し、各指(趾)には短爪を具へて居る。晝間は深く穴に隠れて出でず、夜間出で、徘徊し、樹根、樹皮、果實を食する。牝は一年に三四子を産み、子は生れたる時より、棘毛を具へて居る。棘毛は釣魚用の浮子、筆管等として使用せられ、肉は食用となるのである。

〔一〕 加奈陀豪猪 (Canadian Porcupine) *Erethizon dorsatus*, L.

英に又「カウコウ」(Cawquaw) 又「ウルソ」(Urson) と呼ばれて居る。北米に産し、常に松林に棲み、樹根の下に穴居する。而して樹木に攀縁すること巧みにして、主に樹皮を食ひ、一樹の頂上より根に至るまでの皮を剥ぎ取るを以て、山林に取つては、恐るべき害獣である。一冬に一疋の獸は、約百本の樹木を破壊する程である。敵より攻撃せらるゝ時は、四肢をば體下に引き寄せ、短き鋭尖なる棘毛を有する尾を以つて、烈しく打撃するのである。肉は稍柔軟なる豚肉に似たりといふことである。

〔二〕 ブラジル木登豪猪 (Brazilian Tree Porcupine) 又尾捲豪猪 (Prehensile-tailed Porcupine) *Cercolabes prehensilis*, L.

又「クエンド」(Kunudu) (Coendo) と呼ばれるグイヤナ、ブラジル、メキシコの森林に棲息

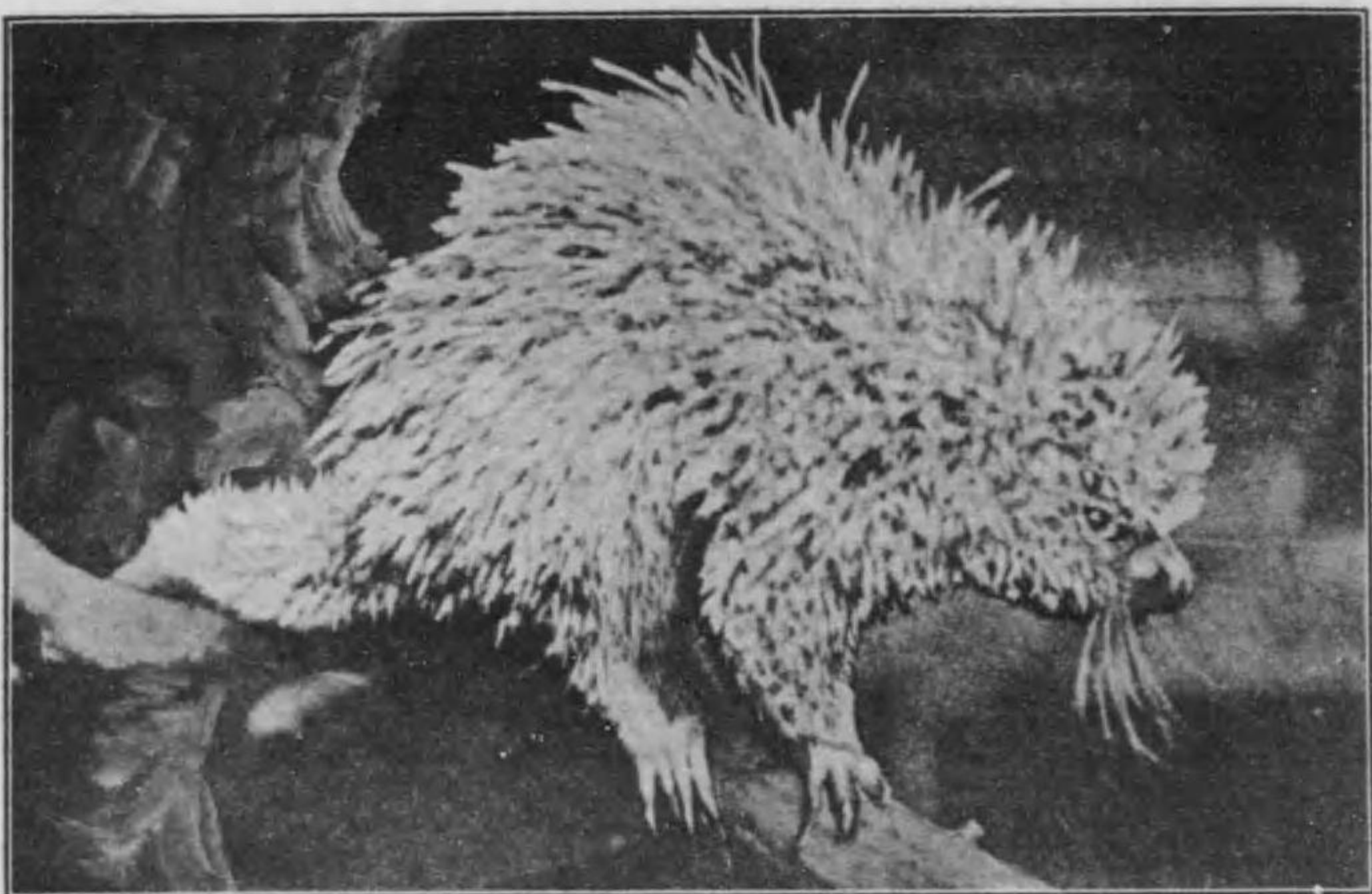
し、體長は約二尺位、尾は一尺五寸位の長さありて、屈撓に富み、之を用ひて、樹木より降るに使用する。また四肢には、曲爪を具へ、樹木に攀縁するに適する。

〔四〕 チンチラ科 (Chinchillidae)

〔一〕 チンチラ (Chinchilla)

Chinchilla lanigera

南米チリ及びペルーの山地に、大群をなして穴居する。體軀は小さく、栗鼠の尾の如く、長毛を叢生せる中庸大の尾を合せて、全長が僅に、一尺二三寸に過ぎない。耳は圓く、且つ廣く擴がり、上唇には長い鬚を有する。後肢には五趾がある。毛皮は柔軟にして、絹状をなし、脊の毛は奇麗な灰色であつて、腹面は帯灰白色で



猪豪登木ルシラブ 圖五十五百第 (After Protheroe)

ある。この毛皮を得んが爲めに、年々捕獲せらるゝもの夥しけれども、生産力強くして、年中蕃殖し居るを以て、未だ以つて絶滅せんとする心配はないそうである。

〔二〕 ビスカッチア (Viscacha) (Viskatscha)
Lagostomus trichodactylus Brookes.

外貌は「マーモット」(Marmot) によく似て居る。甚だ肥大せる頭には、黒い剛い頬鬚を有し、尾は中庸大にして、刷子状に叢生せる毛を有する。前肢には四指、後肢には三趾を有し、且つ後肢は前肢よりも長く、その爪も強壯である。南米に産し、丘陵地よりは、寧ろ草原に小群をなして穴居する。而して主に植物の根を食し、耕地に破壊を興ふるのである。肉は南部アルヘンチナの土人に因つて、食用として用ひられ、毛皮は賣買せらるれども、チンチラの毛皮よりは劣つて居る。



第四百五十五圖 跳鼠

〔五〕 跳鼠科 (Dipodidae)
後肢は「カンガルー」の如く、甚だ長く、尾も亦長くして、跳躍するに適するのである。

〔一〕 跳鼠 (假りに名づく) *Dipus aegyptius*, Hempr. Ehrnh.

英に「ジェルボア」(Jerboa) と稱する。外貌は「カンガルー」によく似て居る。歐州の南東部、亞刺比亞、中央亞細亞、印度、セイロン島に産する。形貌は美麗なる活潑な小獣にして、普通の鼠よりは大きい。然しながら、長い後肢と、非常に長い尾で、直立せる有様を見る。と、實際の大きさよりは、より大きく見ゆるのである。毛色は少しく黄色を帯びたる淡い焦茶色にして、腹部は白味を帯びて居る。頭は大きく、眼は卓越し、耳は廣い。前肢は甚だ短く、四指ありて穴を穿つに適する。後肢の長さは、前肢の五六倍もある。跳躍するに用ゆるは、主として後肢であつて、前肢は、その際胸部に密接せるに過ぎない。而して尾は體の平均を支持するに有効である。一跳躍して、三碼位は跳べるのである。屬名「チプス」は「二足の義である。古人は、前肢は全く歩行に不必要なりと考へたのである。然しこの獣は歩行するときは、常に四肢を使用するさうである。

跳鼠は群をなして乾燥せる砂地に穴居し、夜出で、徘徊する。

〔二〕 ケープ跳兔 (Cape Jumping Hare) *Pedetes caffer*, Ill.

南亞弗利加に産する。耳は短く、後肢は伸長する。充分に跳躍するとき、二丈又は三丈の高さを跳ぶことが出来る。

色鼠よりも小さく、頭と胴との長さは、五寸乃至五寸五分、尾は頭と胴との長さよりも長く、凡そ七寸に達する。耳殻は大にして圓く、前方に折り返へすときは、眼に達する。毛色は背部灰黒色にして、體下は灰色である。常に壁間又は屋根裏に棲息する。

此種が、中央亞細亞より起りたるは、十一世紀と十二世紀との間頃であつて、それが歐羅巴及び亞米利加大陸に擴がり、十三世紀の中頃には、歐羅巴各地の到る處の家に、この鼠を見ざる所なしといふ有様であつて、爾來十八世紀の末頃まで、非常なる勢を以つて擴り、遂に人間の到る處として、この鼠を見ざる處はないといふ有様となつたのである。本邦の内地にては、クマネズミの方が、褐色鼠よりは割合に多く棲んで居る。

〔三〕 埃及鼠 *Mus alexandrinus*, Geoffroy.

これはクマネズミに酷似し、學者に因りては、クマネズミの一變種と認むる人さへある。毛色は背部は褐色を交へ、腹部は灰白色に淡紅色を帯びて居る。尾は割合に長く、後足は割合に小さい。この種は、北部亞弗利加が原産地であつて、印度、バルマより本邦にも棲息する。

〔四〕 鼯鼠 *Mus speciosus*, Temm.

英に「コンモン・マウス」(Common Mouse)といはる體は小さく、頭と胴との長さは、一寸八分許、尾の長さも亦これに同じく、毛色は褐色である。

〔五〕 赤鼠 *Mus molossinus*, Temm.

頭と胴との長さは、三寸許、尾の長さは、一寸八分位あつて、尾毛は甚だ短く、且つ疎生する。體の毛色は、帯赤灰白色であるが、尾毛は褐色である。これは至て稀れな種類である。

〔六〕 はたけねずみ又田鼠 *Mus tanezumii*, Temm.

英に「フィールド・ラット」(Field Rat)と稱する。體長は三寸五分許で、尾は二寸位ある。耳殻は橢圓狀にして長く、且つ毛がない。體毛は短く、背部及び頭頂までは、鳶色に暗褐色を帯び、體の側面は鳶色に灰白色を交へ、體下は鳶色に白味が掛つて居る。常に沼澤の附近、河川の沿岸、或は稻田に棲息し、米穀を喰ふを以て、田畔に甚だ多いのである。

〔七〕 山鼠又野鼠 *Mus argentens*, Temm.

下總、伊豆等の山地に棲息し、體形は鼯鼠に似て居る。耳殻は大きく、且つ裸である。體毛は畧褐色にして、四肢は純白色である。體長は三寸、尾は一寸許にして、これには毛が多く密生する。

〔八〕 かやねずみ *Mus minutus*, Pall.

英「ハーベストマウス (Harvest Mouse)」と稱する。この種は本邦には稀れなれども、西
 比利亚より、欧州及び英國に亘りて、多く産する。體長は二寸許、尾の長さも亦二寸許に
 して、耳は短く、頭は狭く、體軀は細く、眼はあまり突出しない。毛色は欧州産のものにて
 は、帶赤褐色にして、體の下面は白く、その境界はよく判然として居る。本邦産のものは、
 波江元吉氏の記述する所に據れば、背部は黄褐色に、腹側は橙色を呈し、腹面の白色と
 相照應して、境界が著しい。然し毛根は全體に鼠色である。

夏季に至れば、相並べる禾本類の穂を、幾多も集めて足場となし、其處に巢を造る。巢
 は球状をなし、大きさは「クリツケット」球位で、全部略一様なる乾草より成り、巢の隙間よ
 り、その内部が透き通る位、弛るく出来て居る。巢は内部より編むものと見へて、少しも
 穴らしく見ゆるものはない。而して鼠が巢より外部へ出づるのは、弛るい巢の隙間か
 ら、出るのである。而して巢を造る際には、多分牝牡相共に働くのであらう。巢の中には
 五疋乃至九疋の幼兒を産む。冬季は、穀物や枯草の堆積裡に隠くれ、その中へ穴を造り
 て棲んで居る。この鼠は、農作物に大害を加ふるのである。

〔九〕 高麗鼠ねずみ又南京鼠ねずみ

小形なる鼠にして、頭と胴との長さは、二寸有餘、尾は一寸六分位にして、毛色には灰

色なると、白色なるとがある。元來支那の産にして、籠中に入れて車を回轉させたり、其
 他色々の藝をする。この鼠は「ムス、ムスクリヌス」(Mus musculus)の一變種と考へられて
 居る。

鼠の習性及び人生との關係

山野に棲む鼠は、別として、人家に棲む鼠は、家屋の壁間、屋根裏、家屋の土臺、溝渠等に
 棲息し、夏季に、多くは屋根裏を去りて、土臺下に巢を構へるものが多いといふこと
 ある。殊に倉庫の下底の地中は、彼れの最も好んで棲息する所にして、四方に通路を穿
 ち、相往來するに便にして居る。

鼠は性質鋭敏にして、猜疑心深く、且つ飢餓に迫るときは、同類相咬み、頗る殘忍なれ
 ども、また智慧にも富んで居る。鼠が常に同類相咬み相喰ふは、他の動物に多く見ざる
 所である。夜間天井裏にて、馳驅叫喚するは、多くは同類の喰ひ合ひであつて、その復讐
 心も、亦大に強いのである。

鼠の智慧ある一例として、西入某の記する所を見ると、毎夜就眠の後、ホト／＼と窗
 の扉を叩くものがあるが、開けて見ると、誰れも居らぬ。不審に思つて調べて見たれば、
 鼠が主人の既に眠つたか、どうかを知らん爲めに、數頭のもものが、交る／＼尾にて扉を

叩くのであつたことを發見したといふ。又或女子は肉にて燐バスターを塗りて、之れを鼠の出入する所に置いて、毒殺しようと思つたが、肉は毎晩全く無くなつて居るのに、鼠の死體が一向見えぬに怪しみながら、猶毒殺の企てを續け居るうち、或日附近の水道貯水池の落口に於て、鼠が肉片を洗つて居るのを發見し、鼠の用心堅固と、知慮の周密とに感服したといふ。又一女子は、ゼリーを口の小さき壺に入れ、豚膀胱を以て、其口を塞ぎ、儲藏し置いた。すると、鼠は先づ膀胱に小孔を穿ちて、其孔より尾を挿し入れ、ゼリーを附けては引出して、之を嘗め、間もなく、尾端の達するだけは、尾に附けて嘗め盡したといふことである。

鼠は、最も油を好むが、嘗て或人が、其の智慧を驗せんとして、種油に燈心を入れて、その兩端に火を點じ、さて寢床に入りて窺ひ居りしに、やがて一二匹の鼠が出で來りて、尾を油中にさし入れて、燈心を推し、先づ一方の火を消し、次に他方の火を消さんとするとき、俄に起きて吐つたので、鼠はあわて、逃げ去つた。又鼠が鶏卵を取るには、一疋が先づ鶏卵を抱いて仰臥すれば、他の鼠が其頭を咬へて引き、或は其尻を押しして運び去ることは、既に人の知る所である。鼠が清潔を好むことは、餘り知らぬ様だが、是は實際猫に劣らず、朝々唾液を手に塗りて、面を拭ふのみならず、食事の後も、必ず拭ひ、其の他

暇さへあれば、擦りみがあるのである。鼠は亦人に馴れるもので、一定の場所に、一定の食物を與へ置けば、毎日來りて之を食し、漸く馴れて人を恐れざるに至るものである。

鼠の水泳力は、驅鼠に關して、注意せねばならぬことである。神奈川縣檢疫部では、相當の用意をなし、三疋の鼠を港内に放つて試験したるに、十一分にて稍々弱り、十五分乃至十七分にて、力を減じ、二十分乃至三十分で、力盡きて斃れた。即ちその游泳時間は、二十分乃至三十分にして、其の距離は五百十尺乃至六百三十尺で、一分時間の速力は、二十五尺、二といふ成績を得た。而して三鼠の中、二鼠は蘇生し、一鼠蘇生するに先立ち、他鼠に咬殺されたが、右の距離は、直線に測つたので、實際は迂餘屈曲したれば、數割乃至二倍も、延長すべきものである。且つ右は、目的物が無くして、泳いだのだが、若し目的物があつて、任意に泳ぐときは、猶それ以上に及ぶものと、想はねばならぬ。されば鼠の遮斷等の場合に於て、溝等を利用するときは、此距離に注意を要するのである。疫鼠遮斷の場合に於て、亞鉛板を以て、取圍むことが通例であるが、然らば亞鉛板は幾尺あらば、能く鼠を禁錮するに足るか、是亦數回の検査を経た。先づ柵形の亞鉛壁を三重に設け、中央第一區は、一間四方で、高さ一尺八寸、其の次ぎの第二區は、二間四方で、高二尺二寸、一番とどの第三區は、三間四方で、高三尺二寸、其の間各三尺を隔つるといふ構造に

して、是に五疋の鼠を放つて試験をした。第一區に入れて見ると、各鼠は先づ一隅に集合したが、直に亞鉛壁に攀ち、一尺八寸の高さを越えて、第二區に入つたもの四疋で、僅か一疋丈が、取遣されたのである。次に第二區では、四疋の内二疋は遺つて、二疋は能く二尺二寸の高さを越えて第三區に移つた。第三區は三尺二寸の亞鉛壁である。此に到つて、二鼠ともに元氣よく、亞鉛板を攀ちて、二尺八寸の處に至り、泥土の粘着した跡に縋つて、更に攀ちんとするのを拂ひ落したが、斯くの如きもの、甲は二回、乙は三回に及んだ。されば場合に依つては、無論之をば越へたに相違ない。此試験の結果、遮斷壁は高さ三尺以上で、且つ釘孔乃至泥土の附着等の如き、假りにも、鼠の足溜りとなるものを有せざる、滑澤の亞鉛板に限るといふことが、證せられたが、それも、全く平地の場合で、若し土地の傾斜があるか、乃至壁外に近く建設物がある等の場合に於ては、更に其れに對する防禦策を講せねばならぬ。又右の鼠は、孰れも二週間以上飼養したるもので、比較的狹隘に慣れ、飛躍力を減じたやうに思はるれば、普通の鼠は、猶これ以上の踰越力ありと察せねばならぬ。鼠の横に飛ぶ力は、四尺二寸で、彼等はよく地を掘つて進むのである。又鼠は直立せる亞鉛板の断面、即ち及狀をなす所を、よく二三間も走り涉ることが出来る。

鼠は穀類肉類を始め、植物の根枝、皮葉等殆んど食はざる所なく、甚しく甘味と鹽味を嫌ふの外、からし、蕃椒（ごうりし）の如きも、之を食ひ、鮮魚生肉は多く好まざれども、他に美味なければ、之れをも食ふ。魚類蝦等の焼いたものは、最も好んで食ひ、油類は殊に大好物である。尙ほその異味を貪る極端の場合に就いては、次ぎのやうな恐しい話が傳へられてある。カッセル氏の記する所によると、或時巴里に、程遠らぬ村落の屠場で、一日三十五頭の馬を屠つて、貯へて置いたが、翌朝になつて見ると、全く骨のみに變つて居つた。驚ろいて取調べたら、夥しき鼠が集つて喰ひ盡した事が解つたといふ。巴里の一屠殺場では、僅か四週間に、一萬六千匹の鼠を撲殺したことがある。又神奈川で、老婆の屍骸を喰ひたることがある。夫は故老の直話だが、今から六十餘年前、神奈川新町と、浦島町とは、今日の如く連接し居らず、人家離れた荒濱で、其所に馬捨場があつた。或時その馬捨場に、老婆の屍骸が流れ着たが、それに五六百の鼠が簇つて、肉を喰つて居つた。然るに、土地のものが、役人に届けて、その死屍を埋葬した後にも、尙多くの鼠が、其上に纏はり付いて、逐へども去らず、已を得ず、其旨を代官に訴へると、代官は詮議の末、その屍體を再び突き流せといふことで、屍體を掘出して海に押し流したが、鼠は依然附纏ひて、屍體に縋つて泳いで行つたそうだ。聞くだに身の毛のよだつやうな話である。一體

に、鼠は水を飲まぬ方で、就中甘鼠は、全く飲料を取らぬ。是れ皆な食物中の水分に依つて、充分に水の供給を得るからである。

三七六

鼠の嗜好品の實驗は、随分困難の試驗であつた。其れは十鼠十色といふ鹽梅で、例へば神奈川子安邊の鼠は、蕎麥を好んで食ふが、元居留地の鼠は、之を食はぬ。又一方はバター、チーズを好むが、一方は之を嫌ふといふ有様で、何鼠にも通じて、甘いといふものを發見することの出来ぬからである。併し數多の試驗に於て、略ぼ左の傾向を有することを發見した。但しその試驗法は、常食の外に、二品又はそれ以上を與へて、嗜好の有無及び分量を検し、後更に嗜好品を與へて、試みたのであるが、その成績に依れば、燒麩の混和物が、最好物で、次が煎りたる落花生、次が水分ある大根、にんじん、蕪菁、甘藷、蕎麥等で、油は植物性の油を好み、魚肉は焼いたのを好む。従つて鼠の多く棲む場所は、米商、雜穀商、乾物商、菓子商、綿商、豆腐商、飲食店、殊に蕎麥屋、八百屋、麩屋、醬油屋等で、又床屋も其内に入る。次に鼠の少い場所は、石炭問屋、鍛冶屋、武力屋、石屋、左官屋、陶器商、金物商、硝子店、石油、藥品、材木、木具商店等で、清酒店、醱釀造所にも少いのである。古書には、鼠巴豆を食して非常に肥満し、年を延ばすと書いてあるが、その實否を試験したるに、第一回九疋に巴豆五粒づゝを與へ、二十四時間放置中、只一疋だけ一粒半を食し、第二回

は、十疋の内二疋は二粒づゝを食し、一疋は僅に皮を剥ぎ、其他は口を附けなかつた。しつて見れば、鼠は巴豆を好まない。僅に食したものは、全く飢餓の餘りに出でたるものと思はれる。猶鼠の好まざるものゝ試験を進めた。三才圖會にも、鼠は性蒟蒻を恐れ、生蒟蒻を用ゐて、水にて煉りて、鼠穴を塞げば、則ち出でずとあり、俗間亦同様の説が傳はつて居る。そこで之を試験したが、其の法は、乾蒟蒻根の粗粉二十瓦を煮て、燒米粉同量にて煉り、團子となし、十疋の鼠に一個づゝを與へて、二十四時間の後検査したるに、十分の一を食せるもの二疋、五分の一を食せるもの一疋、三分の一を食せるもの二疋、二分の一を食せるもの二疋、十分の一以下を食せるもの一疋で、其他二疋は食はず、一疋は全く食べて斃死したが、併し此斃死は果して中毒の爲めか否か、不明であつた。第二回には、新らしき生蒟蒻芋を厚さ三分、方一寸に切りたるもの一片づゝを與へ、十一疋を試験した。今度は二十七時間後検査したるに、内七疋は僅に食し、一疋は十分の一、一疋は十分の三以上を食し、二疋は全く不食であつた。されは鼠は蒟蒻を好まざるも、全く食はざるに非ず、鼠退治の方法、全く無効なることが分つた。(神奈川縣検査部
實驗報告に據る)

布海苔と昆布も、鼠が嫌ふとの傳説あり。是も實驗したるに、第一回は布海苔一寸四方づゝを與へて、三十時間後の検査に、十一疋中一疋僅に食し、他は全く食せざるを知

り、第二回は一寸五分四方宛を與へた所か二十四時間の後、七疋が悉く食せざるを發見した。依つて鼠は餓うることも、布海苔を食せざるを確かめた。併し他品に混和したならば、如何ならん。更に一週間の後、布海苔を煮て糊となし、糟を除き、蒸甘薯、蕎麥粉と煉り交せたるを、廿四時間與へたるに、十二疋の中一疋は全部を食べた。その他二分一、三分一、若くは五分一を食せるもの、各一疋であつた。又燒米粉と交せたるものは、九疋の中二疋は全食し、二疋は食はず、五疋は僅に食つた結果を得たが、昆布は全く食はなかつた。次に蕃椒末〇五瓦を蕎麥粉、燒米粉四瓦に和し、二十四時間與へたるに、七疋の中全く食して無事なるもの一疋、殆んど全食して死したるもの一疋、殘る五疋は、十分一乃至三分一を食して、孰れも無事なるの成績を得た。(神奈川縣檢疫部調査報告)

鼠はコールターを嫌ふとの説あり。依つて實驗した。其の法、一函を中分して二區となし、その隔壁に小孔を穿ち、甲區にコールターを塗りたる板と、食物を置き、乙區に藁を敷いて置いた。然るに鼠は、先づ藁の中に在つたが、空腹となれば、甲區に至りてコールターの傍なる食物を食し、終れば乙區に歸りて、藁の中に入るの例であつた。随つて鼠はコールターを好みはせざれど、餓うれば毫も厭はざることを確かめられたのである。鼠の餓死する時間を知ること、亦重要な事項である。さて神奈川縣檢疫部で、實

驗の結果は如何といふに、第一回試驗は六月で、其の際飲食ともに與へず、囚置したるに、三疋のものは七十時四十分、六十八時、七十二時半といふ順序で斃れた。第二回はやはり同月に施行し、單に水のみ與へたるに、三疋のものは六十九時、七十二時、七十三時といふ順序で斃れた。第三回は二月の寒中で試みた。水のみ與へて四疋を試驗したるに、二十六時乃至四十五時間にて斃れた。第四回も同月で、三疋の試験に、二十七時乃至四十三時間にて斃れたが、是れは一は寒氣の爲めだと思はれる。第五回は四月春暖の候に、藁を與へて二疋を試験したるに、七十二時間と三時間とで斃れた。即ち鼠は適當の溫度に於ては、平均七十時間にして餓死することが知れる。然れども是は函内飼養の鼠のことなれば、自由生活の鼠に在りては、多少の相違はあらうと思はれる。

鼠について著しきことは、その繁殖力の盛んなことである。物の譬へにも、鼠算の如く殖えるといふは、全く鼠の蕃殖力の盛んなことを表はしたものである。先年大阪府の依囑に依つて、第三高等學校にて調査せられたる所に據ると、鼠は交尾後二十一日にて分娩し、生後十日にて眼を開く。百日にて交尾をなし、一回毎に平均家鼠は十四匹内外、蕃鼠は五六匹、田鼠は最も少なく、二三匹を分娩し、分娩後七日を経れば、忽ち春情を發して交尾し、敢て時期を嫌はない。分娩度數は不定なれども、三四回か、多きは十二回

位に及ぶことがある。生後一ケ年を経たるものは、老鼠にして、交尾期は遅く、産兒も漸次減少して、二年末になれば、僅に一二匹を分娩する。されば一ケ年以上のものは、繁殖に不適當にして、二ケ年後に至れば、多くは老衰して斃死するといふ。而して家鼠及び田鼠の生存期は、三ケ年以内である。

醫學博士宮島幹之助氏に據れば、家鼠の受胎期間は、大概三週間より三十日位である。一年に三度乃至五度位子を産むが、殊に溝鼠は、子を澤山に産む。色々取調べた結果、日本では、平均五乃至六匹位を産む。最も多い場合には、二十三疋まで産んだことがある。普通の鼠の乳房は、十個であるが、溝鼠のは六對である。又野鼠は、一回に四疋乃至七匹位を産むが、一年間に數回も産むのと、且つ受胎日数が短く、又子供の發育が早いので、その蕃殖力は非常に強いのである。家鼠の方は、一年間に、一疋の親から百疋の子が生れ出る割合であるが、野鼠は、一層これよりも多く、百九十八疋位生れるのである。而して牝牡一對の鼠が、四年目になると、家鼠では百七十六萬三千四百といふ數になり、野鼠の方は、一億千六百八十二萬七千九百二十といふ數になるといふことである。兎に角、以上述べたるが如く、鼠は非常に夥しく子を産む。生れた子は、間もなく親となり、又子を産み、その子は又親となりて次第に蕃殖する。されば鼠は吾人の力を以て

しては、到底その大蕃殖をば、制限すること能はざるかの如くに、想像せらるゝも、決して左様ではない。鼠は二三年後には老衰する外に、オウソウ猫、オウ鼬、オウ鼠、オウ貂、オウ狐狸、オウアライシヤウの如き敵がある。又盛んに驅除すれば、之を減少せしめることが出来る。現に明治三十五年に築山揆一氏の報告に據るも、前年大阪市にて、二十四萬頭餘の捕鼠を行ひて、大に其數を減じ、又臺南市にても、驅除法を勵行して、著しく鼠族の數を減じたといふことである。

鼠が人生に對する關係は、全然害の方面である。第一衛生上の害を云へば、ペスト病は、鼠の蚤より吾人に傳染する。又鼠は糞尿や咯痰を嘗めるを以て、諸種の傳染病を媒介する恐れがある。又鼠に咬まれると一種の熱病に罹ることがある。第二には經濟上の損害であつて、食物、被服、家具、什器、農作物、養蠶、家禽、貨物等に大損害を與ふことは、事更らに述ぶる必要がない位である。宮島醫學博士の計算に據れば、本邦に於ては、毎年約八千八百萬圓の損害をば、鼠より受くるのである。即ち先づ米を喰ふものとして、一疋の鼠は、幾日にして一升の米を食ひ盡すかを測定したのである。所が二十七日かゝつて、食ひ盡した。斯る例より計算すると、鼠一日の食料は、極く低く見積つても、五厘以下には下らぬ。次に日本全國の鼠の數は、人口と大約同じものとして、測定すると、實

に八千八百萬圓の損害となるのである(鼠の記事に關しては、波江元吉氏著、鼠族調査第一
報、神奈川縣検査部調査材料、宮島博士講演の「鼠
ふ所頗る多い」)

三八二

鼠の古事に關して嘗つて讀賣新聞紙上に、井上頼國氏の談話なりとして「史上の鼠」
といふ有益なる記事があつたから、左に之を轉載する。

『古事記に、大國主命が根の國で、秦蓋鳴命の爲めに大厄難に遭ひ、業に焼死なうと
した時、鼠がお助け申したと云ふことがある。而して根に棲むと云ふところから、ねす
みと名づけられたものであらう。根の國は幽冥であるから、鼠は幽冥に形を現はして、
此の世へ來たものとされてゐる。日本の歴史に記されたところでは、日本書紀孝徳天
皇の卷に、

元年十二月、天皇、都を難波長柄豊碕に遷したまふ、老人等相謂ひて曰く、春より夏に
至り、鼠難波に向ふ、都を遷すの兆なりと。

三年、淳足柵を造り、柵戸を置く。老人等相謂ひて曰く、數年、鼠東に向つて行く、此れ柵
を造るの兆乎。

とあるが、是れは越後の沼垂に關を設けた時のことで、柵戸とは番所である、同じ天皇
の記事中に、

五年正月、夜、鼠倭都に向つて遷る。

同年、遷りて倭の河邊の行宮に居る、老者語りて曰く、鼠倭の都に向ふ、遷都の兆なり
と。

それから天智天皇の記事中に、
五年、是の冬、京都の鼠、近江に向つて移る。

そして天智天皇は、近江國志賀の地をトして、都したまふた。斯の如く、未前に鼠の移る
のを以て、遷都を知り、居を移すことを知つたと云ふくらゐで、今日でも、猶ほ俗間に老
人の語として、鼠が騒がなくなつたから、火の元を氣を附けろとか、鼠が居なくなると、
其の家は火事になるとか、移轉すとか云ふやうなことを云つてゐる。古から云ひ傳へ
られたものであらう。斯うして考へて見ると、鼠は根の國から來たものであると云ふ
ことに通ずるやうにも思はれる。果して然るや否やは知らぬが、兎に角、世間で、大黒様
と稱へてゐるのは、大國主神のことで、大國主神には、必ず鼠が附いてゐるのも、強ち根
據なきことではないことが解るであらう。』

〔七〕 もぐらねずみ科 (Arvicolidae)

この科に屬するものは、英に「ボールス」(Voles)と稱する。常に地下若くは水邊に棲み、

作物の根を害し、また穀粒を食ふのである。頭は短大にして、鼻は少しく長く、耳殻は小さく、眼も亦小形である。尾は短くして、長さものでも、體長の三分の二を超ゆることはない。四肢は短い。齒式は門齒₁、臼齒₃であつて、齒は直ちに顎より出で、齒根がない。又臼齒の咀嚼面には、菱形をなせる隆起を有する。

〔一〕 もぐらねずみ又のらね又はたねずみ

Arvicora latanezumi

體長は三寸内外である。頭は短く、鼻端は廣く、眼と耳とは小さく、且つ耳は多くは體毛中に隠れて居る。上顎にある門齒は、大にして、三角柱状をなし、帯紅黄色の珫瑯質を有する。毛色は背部褐色にして、處々に黒斑を有し、腹部は黒灰色である。尾は短小にして、全面に毛を密生し、その先端は恰も切斷せられたるが如しである。四肢も亦短小にして、後肢は前肢よりも長くはない。

常に高燥なる田圃に棲息し、地下數寸の所に、縦横の隧道を穿ち、その一部には葉枝葉、莖根等を以て、直徑一尺餘もある橢圓形の巢を造り、巢の中には常に牝牡雙棲し、數多の幼兒を養育する。また巢の傍には、直徑五六寸もある室を設け、稻、麥、大豆、桑、其他の莖などを咬斷せるものを堆積して、冬季間の食料に供し、大に田圃を害するのである。

先年茨城、新潟の諸縣に發生して、大に農作物を害したのである。

被害多き所にては、地表に穿がれたる穴の數は、一反歩につき、約五百より千の多きに達する。之を驅除するには、亞硫酸三々乃至五々をば、蕎麥粉又は麥粉一升に混じ、(尙之れに唐辛粉少許を加ふればよい)水を入れて、之をば適當の固さに煉り、これより凡そ五百粒位の團子を製し、鼠の穴を索めて、一粒宛その入口に置けば、驅除の効を奏するのである。又メレスニウス、スキイ氏菌即ち鼠チブス菌をば、蕎麥粉及び小麥粉に混

圖九十四百第 短尾はたねずみ (After Protheroe)

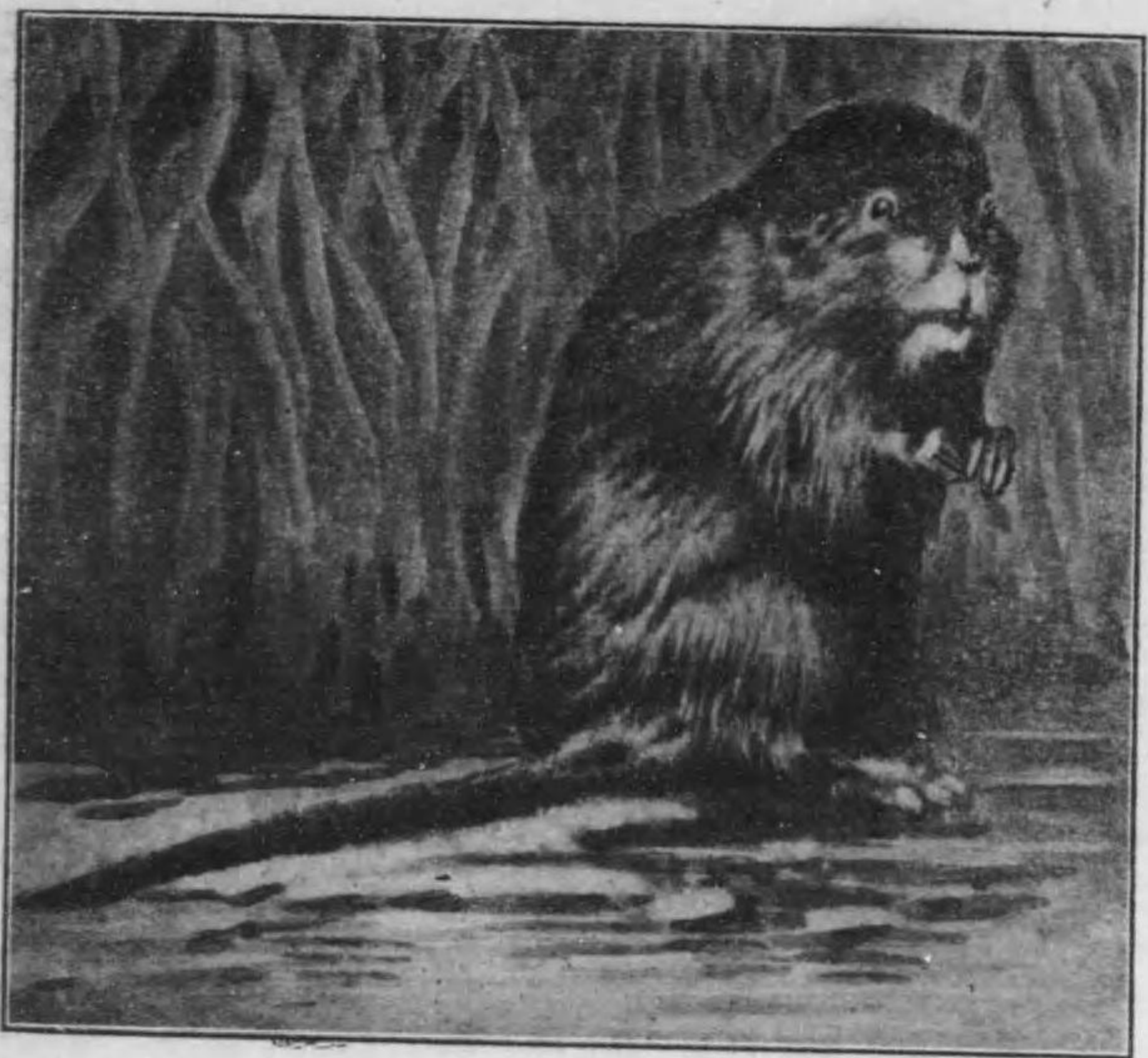


内外普通動物誌

じて、被害地に散布し置く時は、之を食ひたる鼠は、チブスに罹りて死し、その死骸は、また他の同類のものに喰はれ、爲めに、病毒は全巢内に蔓延して、忽ち之を絶滅し得るのである。この鼠チブス菌は、人體及び家畜等には、全く危険の虞がないと云れて居る。尤も人が誤つて、この菌の混せる食物をば、多量に食した場合には、腹痛、下痢を起し、殊に消化器に異常あるもの、及び小兒にありては、危害を及ぼす虞があるとは、大日本農會報(二百九)の報する所である。

〔二〕 短尾はたねずみ (Short-tailed Field)

Mouse) Arvicola argeus, L.



英に又「フィールド、ヴォール」(Field Vole)といふ頭と胴と尾との全長は、四寸二分位で、その中、尾は一寸三分もある。體の上部は、帯赤褐色にして、胸と腹部とは灰色である。この鼠はその性よく水濕の地を好み、高原にはあまり棲んで居ない。樹木農作物に非常なる損害を與ふるものである。

〔三〕 水もぐらねずみ (Water Vole) Arvicola amphibius, L.

前種よりも大きく、體長は七寸五分許で、この外に三寸七八分の尾を有する。上體部は灰色を混んせる栗色にして、體の下部は、これよりも淡色である。常に水邊に穴居し、水生植物、根、種子、皮等を食する。

〔四〕 ムスクナツシユ (Musquash) Fiber Zibethicus, L.

英に又「ムスク、ラット」(麝香鼠の義である。然し食蟲類に麝香鼠の和名を) 又「オングトラ」(Ondatra)といはる。外觀は、前種を大きくした様なものである。體長は約一尺にして、尾には鱗片を有し、その長さは八寸四分位である。背部の毛は、暗褐色にして、頸、肋、脚は赤色を帯び、腹部は灰白色である。後肢にはよく發達せる蹠を有し、常に小群をなして水邊に棲息する。肉には強き麝香臭を有すれども、北米のインヂアンは之を賞用する。又毛皮は種々の用途に供せられて、貴重せられて居る。

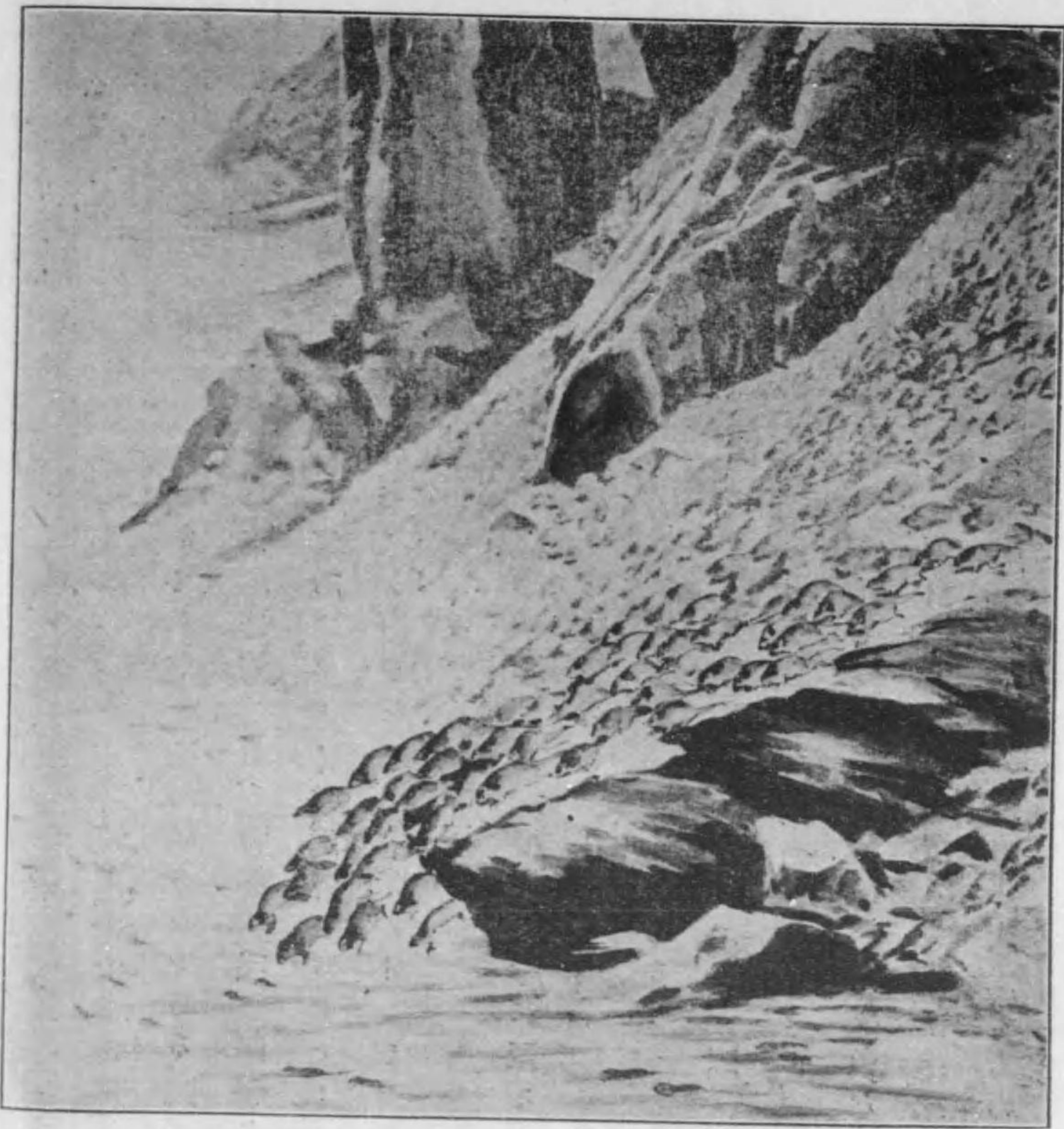
この獸は、以前は、北米の太西洋沿岸より、太平洋沿岸に至るまでの地方と、北は極地より、南はテキサス州に至るまでに、分布したれども、現今にては、人跡稀れなる地方の外は、棲息しないのである。

〔五〕 旅鼠 (假稱) Myodes lemmus, L.

英に「レミング」(Lemming)といふ體長は四寸六分許で、尾は五分位ある。背面は帯褐黒色なれども、腹面に至つて、帯黄白色となつて居る。東西兩半球の北地に棲息し、歐洲産のものは、他の地方に産するものよりは、少し大きい。而し



鼠 旅 圖一十五百第



第五百二十圖 旅鼠の自滅

三八八
 てスカンヂナウイ
 アに於ては、殊によ
 く蕃殖して居る。常
 に植物質を食とし、
 冬季に於て、その棲
 息地が、積雪を以つ
 て被はるゝ時には、
 雪を掻き分けて、雪
 下に生ずる地衣植
 物を探り索むるの
 である。
 この獸の蕃殖力
 は、實に旺盛なるも
 のにして、幾年かの
 間を置いて、幾千萬

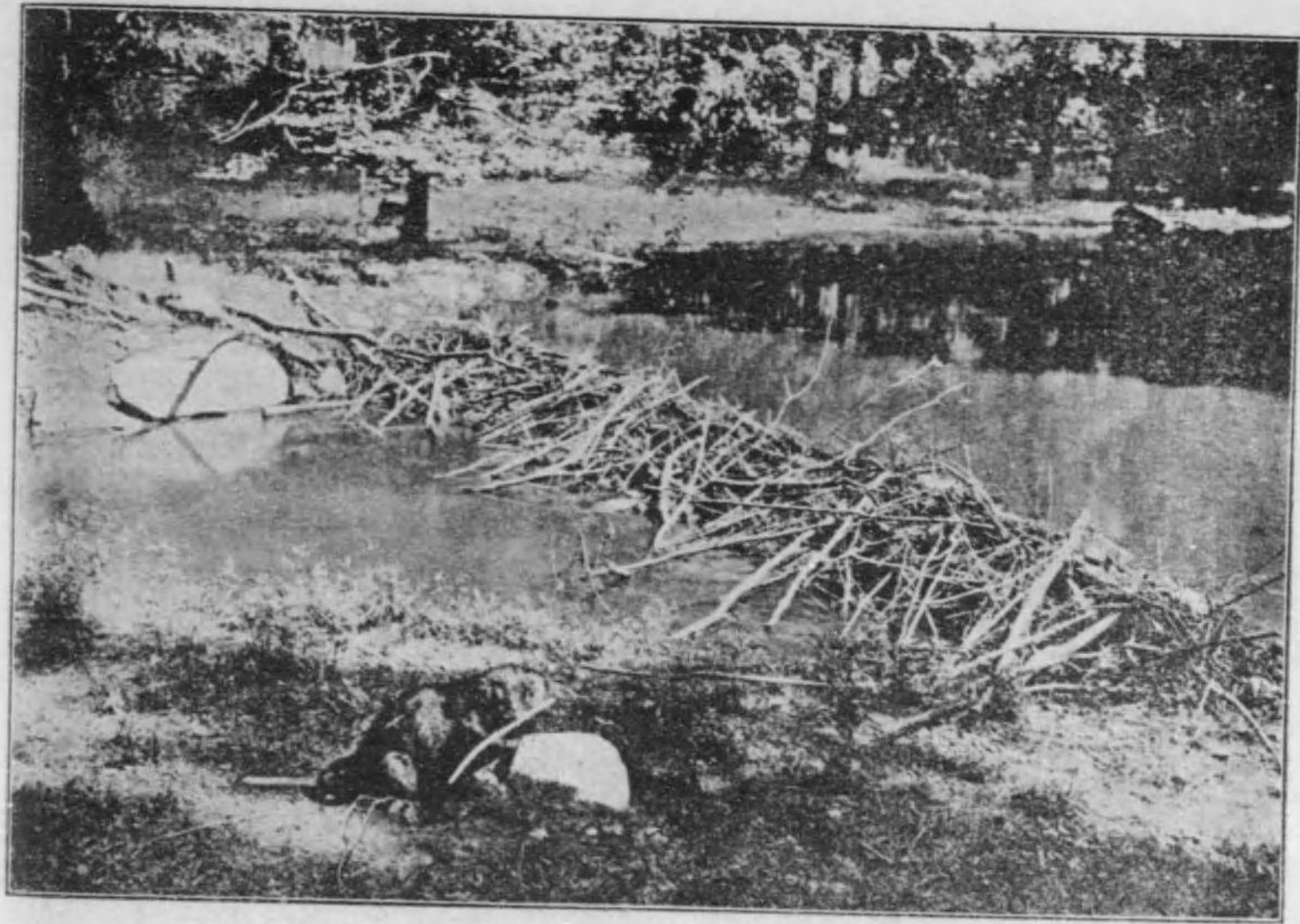
ども、數知れざる彼等の大軍は、冬季の近づく以前に、大移住を試み、一直線に行進する。唯險阻なる絶壁の聳ゆる所は、止むを得ず、その進路を変更すれども、然らざる處では、川を渡り、湖水を横ざりて前進する。彼等の通過する地方は、これが爲めに作物を荒らされ、非常なる破壊を蒙るのである。而してこの際、食肉鳥類及び食肉獸の爲めに捕食せらるゝこと夥しと雖も、その生存せるものは、斯ることは避易せずして、海岸に達するまで、益々旅行を繼續する。而してこの旅行は、夜間に行はるゝものにして、往々二三年の長きに至ることがある。彼等が、一度び海中に跳び込むときは、流石向ふ見すの鼠軍も、怒濤の洗ふ所となりて、無殘の最後を遂ぐるのである。

〔八〕 海狸科 (Castoridae)

臼齒はまである。尾は扁平にして鱗片を有し、游泳するに用ひらる。牡の陰部に開孔する二個の腺囊よりは、海狸香なるものを分泌し、麝香及び龍腦香と同じく、興奮劑として、醫藥に使用せられて居る。

〔一〕 海狸 *Castor fiber, L.*

英に「ビート」(Beaver)と稱する。齧齒類中の最大なるものゝ一つにして、以前は歐州のウエールス地方より、ウラル山にかけて、普通に見られたのであるが、今では歐羅巴



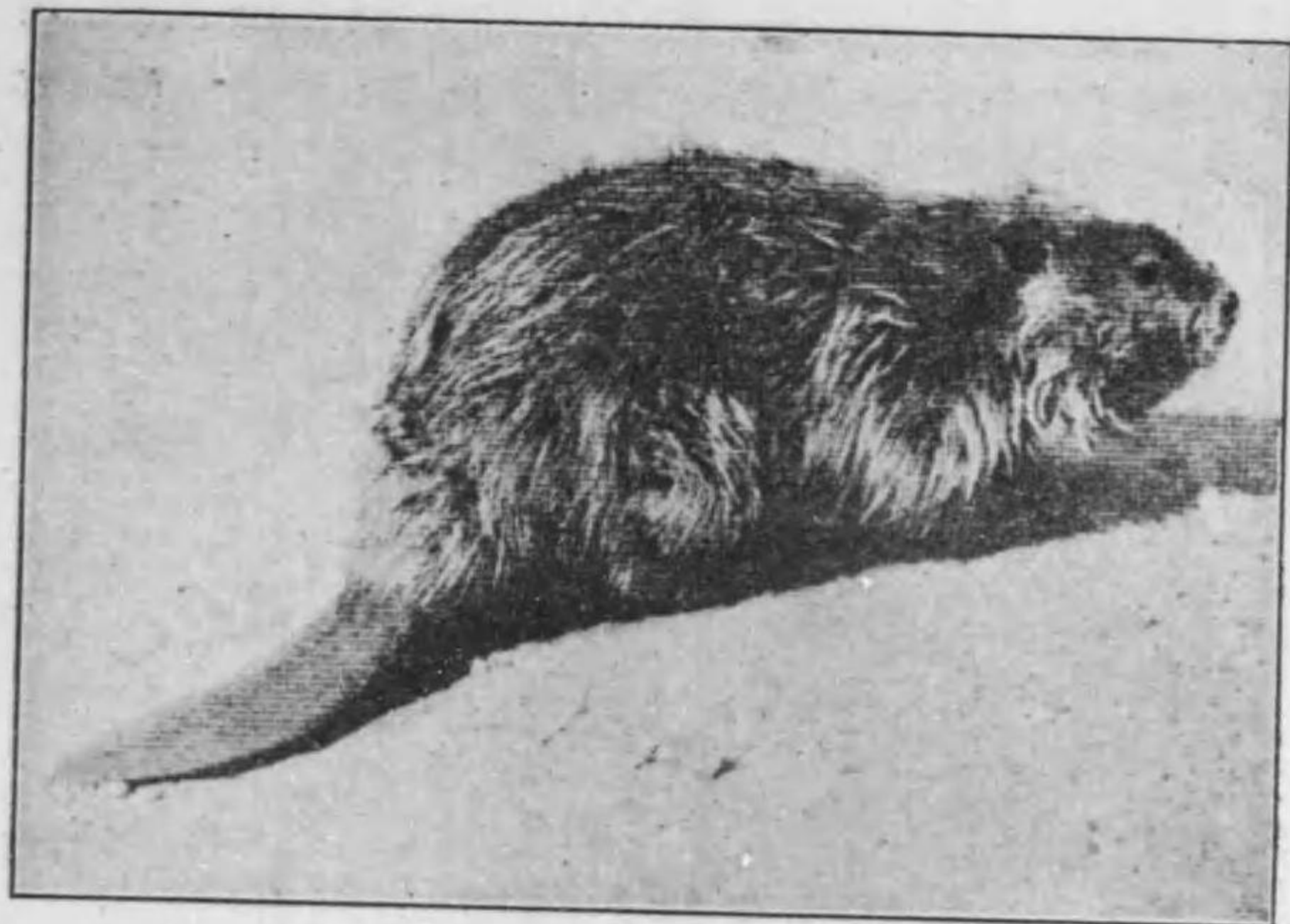
第百五十三圖 海狸の壑
(From Marvels of the Universe)

三九〇
に於ては、大にその数を減少し唯僅かにスカンチナウイア及びポーランドに生存するのみである。然し、北米のカナダ地方の湖河の水邊には、多く棲息し、水流を堰き止めて堤を造り、その附近には、完全なる巢を造りて、社會的に生活して居る。

體の長さは、二尺五六寸乃至三尺許に達し、背部の毛色は赤褐色を呈し、腹面は灰色である。また皮膚に接近して存在する毛は、柔軟にして羊毛状をなし、色は帯灰褐色である。尾は扁平にして幅廣く、且つ鱗片を有するを以て、水中を游泳するに當りて、舵の如く使用する。ことが出来る。而して尾の長さは、

約一尺位である。體軀は肥大し、頭は短い、耳殻は小なれども、これには鱗片を有し、よく之を外方に疊みて、外聽道を閉塞することが出来る。眼は甚だ小さく、鼻端は裸出し、且つ容易に之を閉づることが出来る。頸は太く、背部は弓状をなし、四肢は短く、且つ強健にして、共に五趾を具へ、後趾の趾間には蹠を有し、これにて水中を游泳する。齒は驚く程鋭るごとく、且つ強健にして、樹幹及び樹幹を噛み切ることが出来る。常に樺柳、ヤマナラシ等の樹皮、枝莖等を食ふのである。

北米に産する海狸は、河流を堰き止める爲めに、堤を造り、これによつて、水の深さを増し、附近にある巢をして、敵の攻撃を受くるのを、防禦するのである。巢の材料は、主として木材、粘土、若くは礫であるが、巢を造るは、夜間に於てするのである。その技術の熟練なることは、實に驚歎すべきものがある。例へば、附近の山林に入りて、造巢の材料たるべき樹幹を咬断するに當つてや、先づ幹の一面をば、他面よりも高く噛み、以つて豫め幹の倒れ落つる方向を見定め置き、その愈々切れて倒れ來らんとするを見るや、忽ち身を反はして之を避け、決して倒木の下に壓迫せらるゝやうなことはない。堤の形狀の如きも、一に地勢に準じて之を設計し、水流の摩擦抵抗を減じて、容易に破壊せられざるやうに、極めて堅固に造營するのである。又冬季にありては、氷雪の爲めに材料



海狸 圖四十五百第
[From Marvels of the Universe]

に、水道を穿ち、水流を利用して、運輸の便を謀るといふことである。其智慧に富むこと斯くの如くなる外に、忍耐力に富み、數時間内に、材料の運搬に往復すること、數十回の

に龜裂を生じ、爲めに巢の破壊する恐れがあるから、この際には、新鮮なる泥土を携へ來りて、之をば堤の外面に塗抹し、その破損を豫防するのである。又冬季糧食の缺乏の時の準備として、豫め食料をば、巢内に貯藏するのである。且つ又敵の襲來を受けたる時、逃去する用として、二ヶ所に入口を設けてある。造巢材料の運搬も、亦頗る巧妙を極めたるものにして、粘土、小枝の如き小なるものは、前肢にて攫み來れども、その稍重きものは、之を地上に轉輾させながら運搬するし、又之を胸部に押し抱へて、運び來るのである。而して運搬上、最も困難なる材料に至りては、巢に達する通路の間

多きに至るとも、決して倦怠することはないさうである。

海狸は、一産に二乃至五兒を分娩する。その毛皮は帽子、手袋等に製せられ、又織物にも使用せられて居る。以前はカナダ地方に多く蕃殖したりしも、その毛皮を得んが爲めに濫獵せられた結果、今日にては、頗るその數を減少したといふことである。肉は食用として美味である。

[九] 山鼠科 (Myoxidae)

體制上、鼠科と栗鼠科との中間に位するものであつて、習性は栗鼠に似て、常に樹上に棲息する。尾には長毛を密生し、眼と耳とは大きく、前肢は短い。臼齒は齒根を有し、且つその咀嚼面には、横行せる珐瑯質の隆起がある。他の齧齒類と異なる所は、腸には盲腸を有せざることである。

[一] 山鼠 又 御山鼠 Myoxus elegans, Temm.

英に「日本のロイアー」(Japanese Loire)と稱する。體長は二寸五分許で、尾は二寸位ある。毛色は、淡褐色にして、頭より尾まで、脊の中央に亘りて、一條の黒色斑を有する。尾は體長よりは少しく長く、尾全體に亘りて、長毛を密生し、尾毛は流蘇狀をなして、左右に排列する。富士、日光山の如き我邦の深山に棲息し、果實、昆蟲、鳥卵を食ふのである。

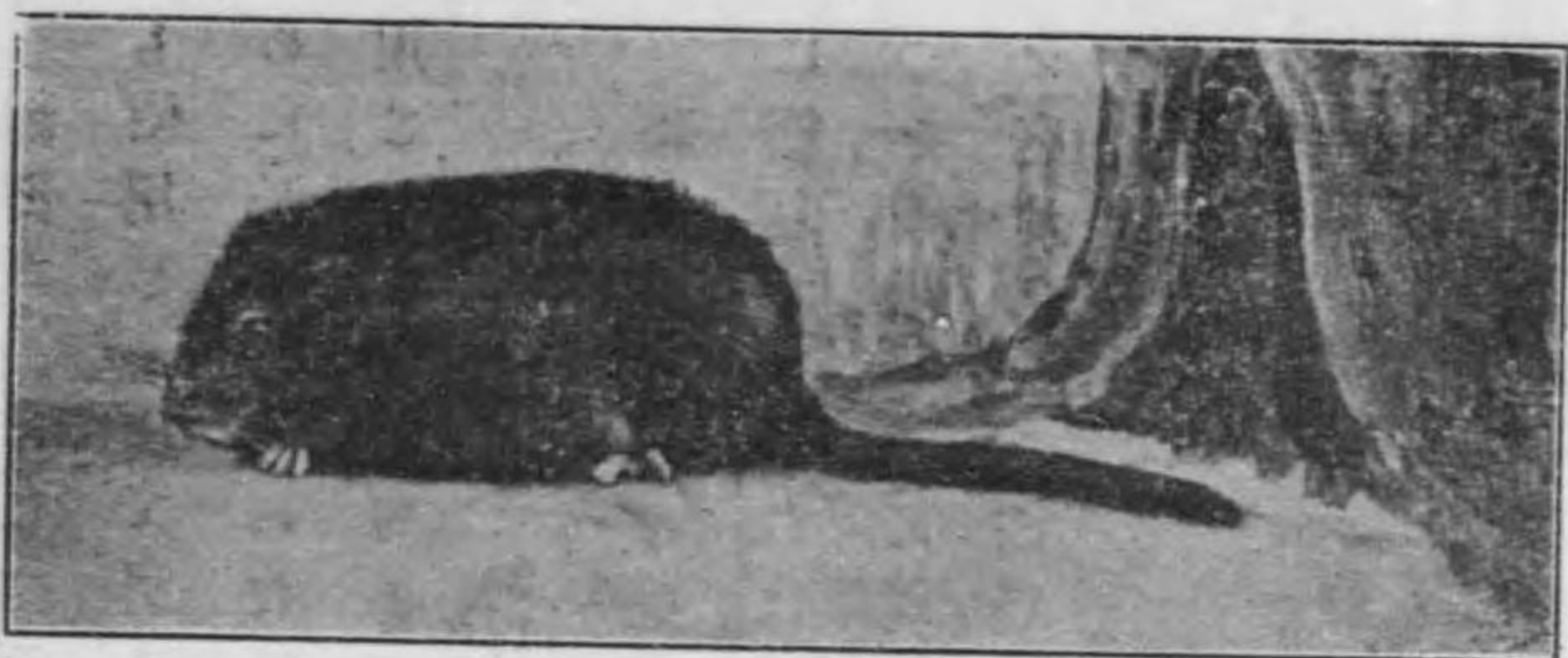
洋書に記する所に據れば、本属のものは、野生の漿果をも食し、恐らくは、小鳥も食するものであらうといはれて居る。晝間は隠れて睡眠を貪り、黄昏より夜陰に乗じて、食を探りに、樹上に徘徊するのである。

〔一〕 ドルマウス *Muscardinus avellanarius, L.*

英に「ドルマウス」(Dormouse)と稱する。歐羅巴大陸及び英國に産し、愛翫用として飼養せられて居る。體長は二寸許で、尾は圓筒状にして、略ぼ體長と同長である。成長せるもの、背部は、赤褐色にして、腹面は白い。その外觀と習性とは、栗鼠によく似て居る。晝間は叢林若くは樹洞中にある巢内に隠れ、夜間出で、樹上を徘徊し、堅果、種子等を食ひ、栗鼠の如く、前掌を以つて食物を口に運ぶのである。

〔一〇〕 栗鼠科 (Scuridae)

樹上若くは地上に棲息する齧齒類にして、尾は圓筒状をなし、且つ長毛を密生すれども、鱗片はない。臼齒は彙を常とすれども、老成するに従ひて、上顎の第一臼齒は、屢々脱落するものがある。而して臼齒には



スウマールド 圖五十五百第

齒根を有しない四肢共に五趾を具へ、前肢の拇指は發育不完全である。

〔一〕 栗鼠 *Scirus lvs, Temm.*

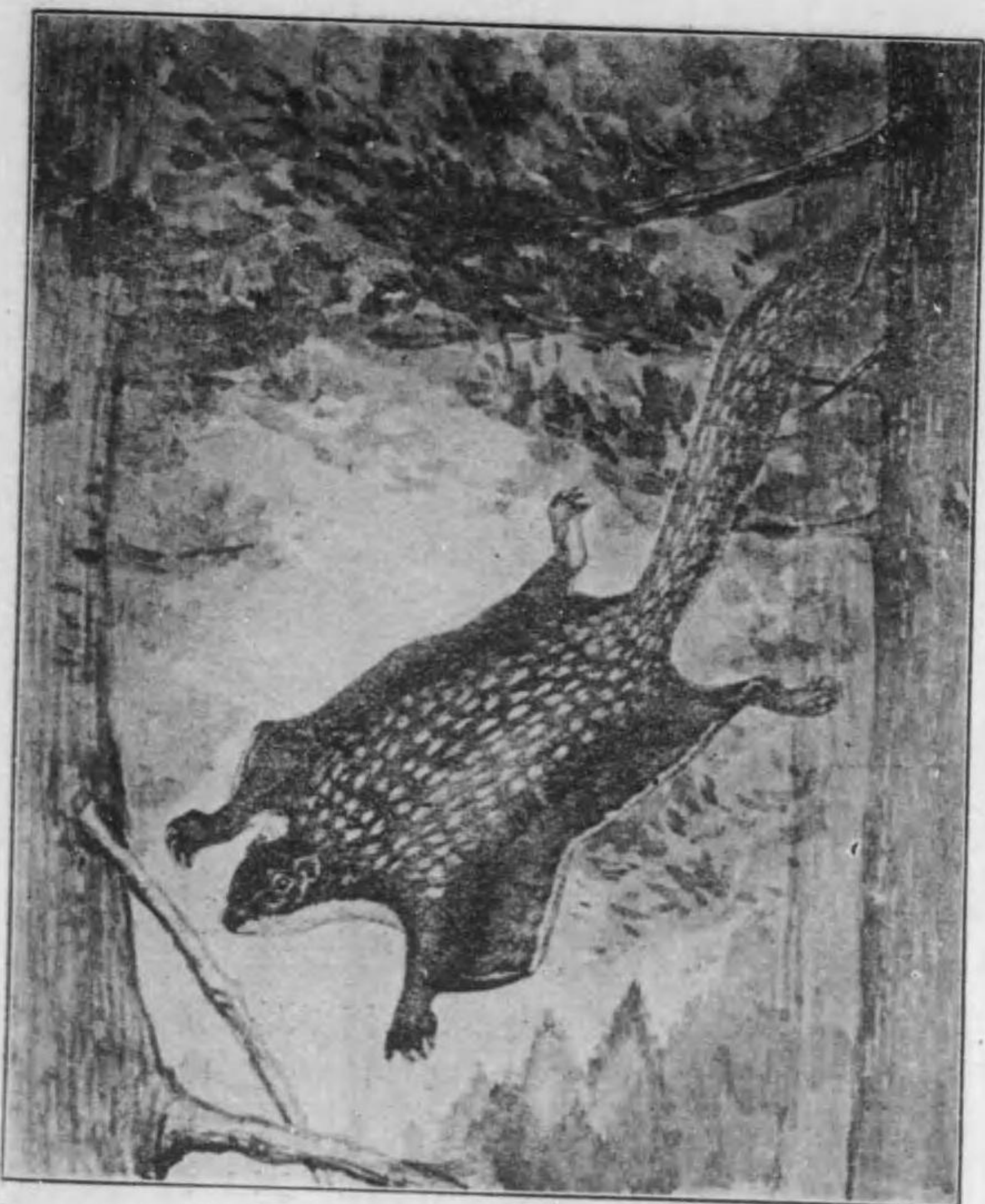
外觀は鼠に似て、體軀は瘠形であるが、鼠よりは大きい。額は幅廣く、吻端は細く狭い。

耳殻は大きく、眼も亦大きく秀いで、如何にも愛らしく見ゆる。背部は赤褐色、若くは黒褐色にして、腹部は白い、尾は圓筒状をなし、これには長毛を密生し、静止する時は、常に尾をば背上に負ふて居る。樹木に攀縁すること、巧妙敏活にして、跳躍しつゝ、行進するのである。

鼠 栗 圖六十五百第

晝間は巢中に隠れるか、又は腐朽せる枝幹の空洞中に隠れ、早朝若くは夕方に近づく頃に、巢を出で、果實及種子を搜索する。而して櫛栗、薔薇等の果實、松櫂

ありて、形状は略ぼ球状をなし、葉、小枝、苔、草等を用ひて構成せられて居る。同一の巢中には、牝牡一對雙棲するのみならず、年々歳々同一の巢に棲んで居る。冬季に近くときは、それが棲める樹木に近き處の、あらゆる罅隙、穴などを求めて、儲栗等の如き果實を貯ふるのである。栗鼠の敵には、黃貂、鼬鼠の類、鷹、鷲の如き猛禽がありて、この山林の害獸の、法外の蕃殖を制限して居る。栗鼠の毛皮は、種々の製作物に使用せられ、尾の毛は、筆毛に造らるゝのである。栗鼠屬には、約八十種以上あり、サテ、濠太利亞大陸を除き、世界に到る處に産するのである。



第百五十七圖 栗鼠の毛皮は、種々の製作物に使用せられ、尾の毛は、筆毛に造らるゝのである。栗鼠屬には、約八十種以上あり、サテ、濠太利亞大陸を除き、世界に到る處に産するのである。

(一) 鼯鼠又をかつ

Pteromys leucogenys, Temm.

英に「ジャバニース、フライング、スクアレル」(Japanese Flying Squirrel) といはる。前肢と後肢との間の皮膚は、延びて膜状をなし、之を擴げて、喬木の頂より、斜に空中を落下して、他の樹木に飛び移るのである。背部は暗褐色にして、腹部は白く、眼と耳との間より頸に至る迄、廣き白帯を有する。而して尾は細長である。常に本邦の深山に棲息し、武蔵、大和、下野等にて捕獲せられたのである。好みて果實、嫩芽、若くは鳥卵等を食ふが故に、森林の害獸である。

(二) ももんが又のぶすま *Pteromys momonga*, Temm.

英に「ジャバニース、アスサパン」(Japanese Assapan) といはる。體は栗鼠よりも大きく、鼯鼠よりは小さい。前種と同様に飛膜を有し、巧みに木より木に飛び移るのである。頭は大きく、吻端と兩耳の間は、前種よりも廣く、背部は暗褐色にして、尾は短い。常に深山の森林中に棲息し、巢をば樹洞内に營む。前種と同じく、森林の害獸である。本種は北海道に産すれども、前種は北海道に産せないものである。

(四) 花金鼠又さうふねずみ *Tamias asiaticus*, Allen.

我が北海道、朝鮮に産し、體長は七八寸である。耳は略ぼ圓形にして、頬には大なる貯

囊を有する。眼の兩側には、白と樺色の縞が四條ある。又背面には褐色の縦條が五本ありて、その間は黄褐色である。尾は殆んど體長の半位あつて、尾毛を生ずれども、栗鼠の尾に比すれば甚だ短い。常に地中に穴居し、巢には多量の果實、穀粒等を貯藏する性質がある。本屬のものは、亞細亞、歐羅巴の北部、及び北米に産し、英に「チブマンク」(Chipmunk) 又「ハツキイ」(Huckle) 又「チツピング、スクイアレル」(Chipping Squirrel) の名がある。

〔五〕 マルモット (Marmot) *Arctomys marmotta*, Schreb.

歐羅巴のアルプ山、カルパチア山、ピレネー山の如き、雪線に近き高所に、小群をなして穴居し、穴には乾燥せる草や、其他の植物質の食物を貯へて、冬季の食料に供する。而して九月の中頃より、翌年の四月の始め頃までは、穴中に蟄居するのである。體の大きさは、飼兎位あつて、毛色は帯灰黄色にして、頭の頂上は暗灰色を呈し、尾の先端は黒くなつて居る。常に穴中に蹲踞し、その動作は至つて緩慢である。門齒は甚だ長く、且つ有力である。四肢は短く、趾には強爪ありて、之を用ひて穴を掘るに適する。幼獸を捕へて飼養するときは、よく人に馴れ、主人の命に因りて、種々の藝當をなすことが出来る。その肉は食用となり、毛皮は種々の用途に供せられて居る。

〔六〕 草原マルモット (Prairie Marmot) *Arctomys Indovicianus*



第百五十八圖 草原マルモット

北米のミズーリ地方の草原に於て、大群をなして棲息する。穴毎にその前面には、土壌をば、小さな饅頭形に積み上げてある。而してこれが、長さ數哩に連亘する位である。體長は一尺三寸余である。毛色は主に赤褐色にして、これに灰色と黒色とを混じて居る。門齒は大きく、口外へ突出する。その叫聲は犬の吠ゆるに似たるを以て「ブレイリー・ドック」(Prairie Dog)

と呼ばれて居る。

〔七〕 旱獭 *Arctomys bobac*, Pall.

この獸は、先年滿洲に於て、土民間に、肺ペストの流行するや、その病毒の媒介者なりとて、既に世間によく知られたる動物であるが、理學士青木文一郎氏が、傳染病研究所に於て生ける標本を檢せられしに、前記の學者を有するものなることが判然したのである。(動物學雜誌、第二、百七十三號參照) この種は、歐州の東部より、西比利亞及び滿洲に分布する「タルバーガン」とは、蒙古語より露西亞語に轉化せしものなりといふ。



シガールタルタ 圖九十五百第
(From Brehm)

四〇〇
 猪、ベストに罹り易い動物を擧ぐれば、北里醫學博士に據れば、タルバーカン、猿の孰れもの種類(普通に自然に於て肺炎に感染した)、驢馬(普通に自然に肺炎に於て罹りて斃死せる)である。

第八目 翼手類 (Chiroptera)

哺乳類にして、空中を飛翔し得るものは唯蝙蝠の類あるのみである。されば彼の碩學アリストテレス氏も、蝙蝠をば、皮膚より成れる翼を有する鳥である、と認められたのである。其他プリニー氏、アルドロバンガス氏、スカリゲル氏の如きも、同様に蝙蝠をば、鳥と思つたのである。所が千六百八十三年に英のジョン・レイ氏は、蝙蝠は哺乳類なることを、構造上より確かめたのである。この翼手類の原語「キロプテラ」(Chiroptera)は、二つの希臘語より出でたもので、その一つは「手」を、他の一つは「翼」を意義するのである。蝙蝠は他の哺乳類とは異り、空中生活を營めるを以つて、體軀の構造も、他の哺乳類



内外普通動物誌

と異なる所あるは、言を俟たずして明らかである。前肢の拇指以外の指骨は、長く伸長し、これに、背部及び腹部の皮膚は、一面に擴張して、飛膜となりて、前肢の指間と、後肢とに及んで居る。又飛膜中に、尾を包括するものがある。この飛膜が、實に六飛翔器官にして、これには、毛は極めて少なく、且つ弾力性に富み、伸縮自在にして、觸覺又極めて鋭敏で、飛翔する際、障害物に觸れざる利益がある。

大蝙蝠 前肢の拇指と、第二指とには、鉤状の爪を有すれども、第三、四五の三指には爪がない。尤も食蟲蝙蝠類にては、第二指には爪を有しないのである。而して後肢の五趾は、皆短く、これ種には、それ／＼鉤状の爪を有する。又後肢は屈曲して、外方に向ひ、前肢よりは遙かに小形である。前肢の骨格の中で、尺骨は極めて萎縮すれども、橈骨は長く、且つ屈曲し、腕骨は六個ありて、拇指と他の細長なる四指とを支持するのである。空中を飛翔する爲めには、成るべく體重を輕減する必要

がある。されば肩部の骨を除く外の他の骨片は、一般に細小にして、重量を減ずる。また腸管も短く、胎児の數も少く、唯一産に一子若くは二子である。子は産れて數日にして、その後肢の爪にて母體に懸垂し、母の胸部にある二個の乳房より乳を吸ふのである。蝙蝠は、飛膜を以て張れたる前肢をば、上下に運動させて、空中を飛翔するものなるを以て、鳥類に見るが如く、鎖骨は著しく發達し、又肋軟骨は化骨して胸骨の前面に隆起する。其他鳥喙骨の發達せることは、鳥類によく類似して居る點である。

後肢は、主として他物に、自體をば懸垂するに使用するのである。空中にありて、蝙蝠の飛翔する動作は、稍活潑なれども、一たび地上に降るときは、その動作極めて拙劣である。即ち先づ前肢の拇指にある鈎爪をば、出來る丈け前方に伸出して、之をば地の凹處に引き懸け、腕を曲げて、體をば前方に引き寄すると同時に、後肢にて地を支へて、體をば前方に推進せしむるのである。此の如き方法にて、前進するを以つて、體は直線に進行せずして、雁木狀に進むのである。而して晝間は、人家の檐端、洞穴等に群居して潜伏し、後肢の鈎爪にて、倒にその體軀を懸垂して居る。而して黄昏に至れば、飛翔して昆虫類を捕食するのであるが、その將に飛び出でんとするや、一旦懸垂せる場所の上方に攀縁したる後、體軀を落下せしめ、その際始めて翼を擴げて、空中に飛び出すのである。

つて、懸垂せる所より、いきなり飛び出づることは出來ないのである。

感覺器の中で、視力は比較的に發達せざれども、嗅覺、聽覺、觸覺はよく發達して居る。これに關して、十七世紀頃に、伊太利の有名なる解剖學者スバランザニー氏は、面白い實驗をしたのである。それは、蝙蝠を取つて來て、眼が見へぬやうに裝置したのである。又た一室の中には、幾條となく、無數の絲をば限なく懸け渡して置き、この室内に蝙蝠をば放ちたりしに、彼れは如何にも巧妙なる態度を取つて、絲と絲との間をば、巧みに操縦し行きて、少しも絲に觸まつたことなしに、飛翔し得たといふことである。その大なる耳殻は、自由に動きて、蚊蚋の如き小蟲の翅音でも、容易に、之を聞き得ることが出来る。

蝙蝠の種類は、凡そ四百種以上もあつて、地球上總べての方面に産すれども、北緯六十度以上の地には棲息しない。概して烈寒中は、冬眠をなすのである。僅少なる例外を除く外は、毛色は暗色にして、よく周囲の色と一致し、所謂保護色をなすのである。されば、殆んど感覺なく見ゆる程、靜かに、その潜伏所に懸垂する間、若くは飛翔せる時にも、よく鼯鼠、黃鼯、鴉、鴟等の如き、敵の視線を避ける利益がある。

翼手類を分ちて次の二亞目とする。

第一亞目 食果類 (Frugivora) 又大翼手類 (Megachiroptera)

頭は伸長して、非常によく狐の頭に似たるを以つて、この類の大多數のものは、英の俗名を「フライイング、フォックス」(Flying Fox) (狐の義) といはれて居る。毛色も概して赤い狐に酷似せる色である。一般に體軀は大形にして、食用飛狐の如く、左右の兩翼を擴ぐるときは、殆んど五尺の長さに達するものもある位である。耳は小さく、尾を有するものにも、尾は退化して短い。第二指は三個の指骨より成り、通常その末端には、拇指に於けるが如く、鉤爪を有する。而して他の三指は、二個の指骨より成り、これには鉤爪がない。臼齒の咀嚼面は、平滑にして、これには二條の縱溝を有する。東半球の熱帶及び暖帶地方に産し、常に果實を食し、果樹に大害を與ふるのである。

第一亞目 食蟲類 (Insectivora) 又小翼手類 (Microchiroptera)

蝙蝠類の大多數を含む。體軀は割合に小さく、耳は大きく、屢々瓣を以つて被はれてある。尾は、股と股との間の皮膜中に、包まるゝものと、然らずして、外部に露出するものとある。第二指には、鉤爪を有しない。臼齒の咀嚼面には、鋭るごき數多の突起を有し、且つ横溝を有する。多くは昆虫を食するを以て、農業上有益で

ある。然しながら、南米に産するものには、哺乳類の血液を吸吮して、有害なるものあり、又あるものは、果實を食するものがある。この類は東西兩半球の熱帶及び暖帶地方に産するのである。

以上

第一亞目 食果類 (Frugivora) 又大翼手類 (Megachiroptera)

〔一〕 大蝙蝠科 (Pteropidae)

通性は亞目の所にて述べたる通りである。

〔一〕 小笠原蝙蝠 *Pteropus pselaphon*, Say.

英に「ボニン、ローセツ」(Bonin Rosett) と稱し、我が小笠原島に産する。兩翼を擴ぐるときは、二尺以上に達する。常に果實を食して、果樹に損害を與ふるのである。その毛皮は鞣して諸種の用に供し、肉は頗る美味である。この屬のものゝ齒式は I_2, C_1, P_3, m_3 である。而してこの屬は、大蝙蝠科の半數以上を包括し、皆口吻は長く尖出し、顎には軟毛を有し、且つ尾を有しない。

〔一〕 沖繩蝙蝠 又八重山蝙蝠 *Pteropus dasymallus*, Temm.

八重山群島に産する大蝙蝠にして、顎の下面左右には、帶褐白色の毛叢を有する。肉

は美味にして食用となる。

〔三〕 食用飛狐 (石川博士著農業動物學) Pteropus edulis, Geoff.



第百六十一圖 大蝙蝠 (Pteropus sp.) の體
に子懸垂し乳を吮吸せしむる圖

英に「カロ
ンク」(Kal-
ong) 又「マ
レイ、フオ
ックス、バ
ット」(Mal-
ay Fox-Bat)
といふ、マ
レイ群島
より我が
臺灣に産
する翼手
類中の最

大なるものにして、充分に成長せるものでは、鳥位の大きあり、又兩翼を擴張するとき
は、五尺に達する。口吻は長く伸出し、眼球の閃めける状態は、如何にもよく狐に似て居
る。

食用飛狐は、この類の他の大蝙蝠と同じく、日中は大樹の蔭所に懸垂して隠れ、殊
に無花果樹の蔭に多い。而してその多数が、群居せる状態は、如何にもよく、無花果の房
に髣髴たるものがある。而して一たび逐ひ出されるときは、鋭き叫聲を發して飛び
出せども、晝間は強き太陽の光線の爲めに、眼が眩惑せらるゝを以つて、唯僅に羽搏ち
をして、片々と飛翔する位で、直ちに、その隠匿所を求めて懸垂する。而して他の大蝙蝠
と同じく、夜間出遊する。果樹園に大損害を與ふれども、その肉は美味である。又ジャバ
島に於て「ツルアダン」を受粉せしむるといふことである。

第二亞目 食蟲類 (Insectivora) 又小翼手類 (Microchiroptera)

〔一〕 蝙蝠科 (Vesperthionidae)

尾は細長にして、全く股間膜の内に包まれて居る。上顎にある門齒の中央に位する
一對は、決して大なることなく、常に多少廣き空隙に因つて、相互より分離せらる。鼻は
吻端に於て、單純なる新月形か、若くは圓形の孔に因つて、外方に開き、分明なる葉狀の

皮膚に因つて、圍繞せらるゝことはない。耳輪にある迎珠 (Tragus) は分明である。

〔一〕 蝙蝠 *Vesperugo noctula*, Schreb.

英に「ノクチュール」(Noctule) といふ。この属のものは、體は割合に肥大し、頭は扁平にして幅廣く、且つ吻は鈍くある。耳殻は短く、幅廣く、且つ三角形をなし、先端は鈍く、迎珠は鈍く、且つ常に少しく内方に曲つて居る。脚は短いのである。

蝙蝠は、最も普通に見る種類にして、舊き屋根裏、空洞等に多い。テンミツク氏の説く所に據れば、牝のその子を哺乳する時は、尾をば腹部の下に曲げ込み、また腿間膜をば、囊の如くに褶み込み、よく子を押しやるといふことである。その飛翔せる時も、かゝる方法にて、子を支持するのである。その食物は、蛾類、蚊類、其他黄昏飛翔する昆蟲類にして、その害蟲を驅除することは、實に大なるものがある。而して「カハホリ」の意義は、蚊屠の約なりといふ説がある。

金子錦二氏著、學校用動物學 (明治十八年 二月出版) に據れば、昔は蝙蝠の尿をば、夜明珠と稱して、藥用に供したといふことである。

〔二〕 山蝙蝠 *Vesperugo noctula*, Schreb. var. *lasiopterus*, Schreb.
樹木の空洞、若くは岩窟等に棲息する。

〔三〕 あぶらむこ *Vesperugo abramus*, Temm.

本邦到る處の、市街村落に、普通なる種類の一つである。

〔四〕 秩父蝙蝠 *Synotis darjilingensis*, Hodgson et Horst.

門齒は、前白齒は、異なる齒式が、他と異なる識別點である。耳の外縁は、眼の前方に至るまで、伸出して居る。この種は、秩父地方に産する蝙蝠である。

〔五〕 兔蝙蝠 *Plecotus auritus*, L.

英に「ロング、イヤード、バット」(Long-eared Bat) と稱する。本邦始め東半球の大部分に分布する。體長は一吋六七分、乃至四吋三分位ありて、兩翼を擴張するとき、一尺に達する。耳は、兎の耳の如く長くして、且つ結合する。門齒は、前白齒も、である。

〔二〕 菊頭蝙蝠科 (Rhinolophidae)

この科のものにては、鼻に附屬せる皮膚は、非常に發達して、鼻孔の周圍を取り圍んで居る。鼻孔は、吻の上面に存する溝中に位する。耳は大きく、且つ通例は分離して居る。而して耳輪には、迎珠がない。前科の如くに、上顎にある門齒の中央の一對は、大なることなく、且つ多少廣き空隙に因つて、相互より分離するのが常である。白齒には、鋭るごき W 字狀の突起がある。頭骨は大きく、鼻骨は非常に擴張して居る。尾は長くして、股間

膜の後縁に突出して居る。この科のものは、東半球の温帯及び熱帯地方に産する蝙蝠である。

〔一〕 菊頭蝙蝠キクカバ 又 菊蝠キクカバ

Rhinolophus ferrum-equinum, Schreb.

英に「グレート・ホールズシュー・バット」(Greater Horseshoe Bat) といはる。鼻にある皮膜は、二部分より成り、



第百六十二圖 菊頭蝙蝠屬 (Rhinolophus mitratus) 一種の頭部 (After Dobson)

一つは槍頭状にして、額の基部に位し、一つは馬蹄状をなして、上唇の縁邊に位する。而して、この二膜の間に、鼻孔を開いて居る。耳及び尾は、中庸大にして、前腕の長さは、平均二寸位である。この属のもの、齒式は $I_2, C_1, P_3, M_3 \parallel 32$ である。この種は、廣く分布するものにして、英國、歐羅巴、亞弗利加、亞細亞に産し、本邦にても、全國到る處に棲息し、岩洞若くは枯木の洞中に隠れて居る。

〔二〕 小菊頭蝙蝠コキクカバ *Rhinolophus minor*, Horsf.

前種よりも小形である。

〔三〕 フイロストマ科 (Phyllostomidae)

前に述べたる二科のものは、中趾は、二指骨のみより成れども、この科のものでは、中

趾は三個の指骨より成り、その中、第三指骨はよく發育する。鼻孔は「バンビイルス」(*Vampyrus*) 「フイロストマ」屬 (*Phyllostoma*) 等の如く、皮膜の附屬物の前部に開くものあり、又は「キロニクテリス」屬 (*Chironycteris*) の如くに、吻端に於て、單純なる孔となりて、開いて居るものもある。上顎の中央にある一對の門齒は、概して大形にして、且つ共に接近して居る。眼は通常大きく、且つ耳輪の迎珠は、よく發達する。この科のものは、中央亞米利加、及び南亞米利加の熱帯及び亞熱帯に産し、「バンビイルス」(*Vampyrus*)、スベクトラム」(*Vampyrus spectrum*, L.) の如く、食物は全く果物である



第百三十六圖 スルイペンバ 最大なる蝙蝠の頭部 (From Claus) (From Claus) (From Claus)

と果實とを混食するのである。

〔一〕 吸血蝙蝠 (Desmodontes)

「フイロストマ」科の一族をなすものである。吻は短く、且つ圓錐状をなし、鼻にある葉状の皮膜は著明である。而して股間膜は、甚だ短く、尾はない。齒式は門齒がまで、犬齒は

上顎前臼齒、臼齒は下顎若くは上顎である。上顎の門齒は甚だ大きく、且つ銳利にして、犬齒間にある空處の全部を充たして居る。前臼齒は甚だ狭く、咀嚼面には、銳るごい邊緣を有する。臼齒はありても、甚だ退縮し、又之を缺くものがある。胃は非常に伸長して、恰も腸の如き觀を呈する。これには「デスマダス」(Desmodus)及び「ディファイラ」(Diphylla)の二屬がある。前者は跟骨と臼齒とを有せざれども、後者は短き跟骨を有し、又兩顎の兩側には、一個宛の退縮せる臼齒を有する。共に中央亞米利加及び南亞米利加に産するのである。

(一) デスマダス *Desmodus rufus*, Weid.

英に「バンバイアバット」(Vampire Bat)といはれ、ブラジル、チレ等に多く産する。體の長さは、約二寸五分許である。背部は帶赤褐色にして、腹面は帶黃褐色である。上顎には、二個の大なる銳利なる門齒と、ランセット狀の犬齒とを有し、これにて、牛馬等の皮膚をば切りて、血液を吸吮するのである。その食物は、疑ひもなく果實及び昆蟲であるが、機會さへあれば、夜間出で、牛馬、騾の如き家畜及び人を襲ひ、人にては、額、肩、臂、足の趾の如き體の露出せる部分に咬み付き、血液を吸ふのである。

(二) ディファイラ *Diphylla ecaudata*, Spix

ブラジルに産し、前種よりは稍多い。且つ前種よりは小形であるが、その習性は前種と同一である。

第九目 食蟲類 (Insectivora)

口吻は伸長し、短脚を有する小獸である。多くは昆蟲、蝸牛、蠕蟲等を食するを以つて、臼齒の咀嚼面には、銳るごき圓錐形の突起を有し、以つて昆蟲類などの硬き外皮を突き刺し、併せて之を咀嚼するに適する。臼齒の齒根は、よく發達して強壯である。門齒は通常大形にして、その數は一定せざれども、兩顎共に二個以上を有する。犬齒は通常小さいのである。目は常に小さく、時には毛皮下に埋伏するものがある。耳殼は、時には大なるものあれども、又時には小なるものもある。四肢には、皆五趾を具へ、各趾には強健なる爪を有する。蹠には毛なく、且つ全蹠を着けて歩行する。而して乳房は、腹部に存在する。

この類の多くは、昆蟲類及び蠕蟲類を食すれども、中には雜食するものあり、又主に魚類を食するものもある。多くの種類は、地上に棲息すれども、又樹木上に攀緣するものもある。この類は、東西半球の温帶及び熱帶地方に産すれども、南亞米利加及び濠太利亞には、棲息しないのである。

〔一〕 蝟科 (Erinaceidae)

背には、短き棘毛を具へ、敵に遭遇する時は、非常によく發育せる皮下筋の收縮に因りて、體をば栗毬狀に丸めることが出来る。上顎にある大白齒は、皆四個の大なる突起の外に、中央には一個の小なる突起を有するのである。

〔一〕 蝟 *Erinaceus europaeus*, L.



(From Popular Science) 蝟 圖四十六百第

英に「ヘッジホッグ」(Hedgehog)又「ウルチン」(Urchin)又「フアーズ・ピッグ」(Furze-pig)又「ヘッジ・ピッグ」(Hedge-pig)と稱する。歐羅巴に産する普通の種にして、體の長さは、八寸三四分、尾の長さは、八分余である。口吻は尖り、四肢は甚だ短く、各趾共に、銳利なる爪を具ふるが、殊に前肢にある爪は、銳尖にして地を穿つに適する。背部には棘毛を有し、腹面には、棘毛を有せざれども、その代りに、柔軟なる毛と、剛毛とを有する。背面と體側とに沿ふて、巨大なる皮下筋が、發達せるを以つて、敵に遭遇する時、之を收縮するときは、頭をば體

軀に挟み込み、四肢をば引き上げたる後、その周圍に沿ふて、體軀をば、球狀に丸めることが出来るのである。

蝟は、一生涯の間、牝牡雙棲し、苔、草、樹葉を編みて、岩石地の罅隙、又は古木の根下に巢を造り、一産に三四子を分娩する。而して分娩は、年二回なりといふ。子は生れたまゝでは盲目である。而して、冬は全く地下一尺位の處に穴を穿ち、この穴中に於て、睡眠を貪るのである。

夜出で、林地、叢林、園地を徘徊し、各種の昆蟲、蝸牛、卵等を食し、時には雉子類、雷鳥類の如き鳥類、野兔、飼兔を食ふことがある。又は、芫菁はんせつの如き昆蟲をば、一時に數百疋も食ふことがあるが、その毒に感染することがないといはれて居る。

棘毛は、解剖用の留針として、廣く使用せらる。これ金屬製の留針と異り、酒精アルコール中に浸されても、鏽を生ぜざる利益がある。

蝟屬のものは、約十九種位を有し、歐州、亞弗利加、亞細亞の大部分、即ち支那、朝鮮、に至るまで産する。然し、マダガスカル、セイロン、パルマ、シナム、マレイ半島、マレイ群島、濠太利亞には、發見せられて居ない。天津では、蝟をば、俗に「刺蝟」と稱する。蝟の齒式は、 $13/14, 2/3, 1/1, 3/3$ である。

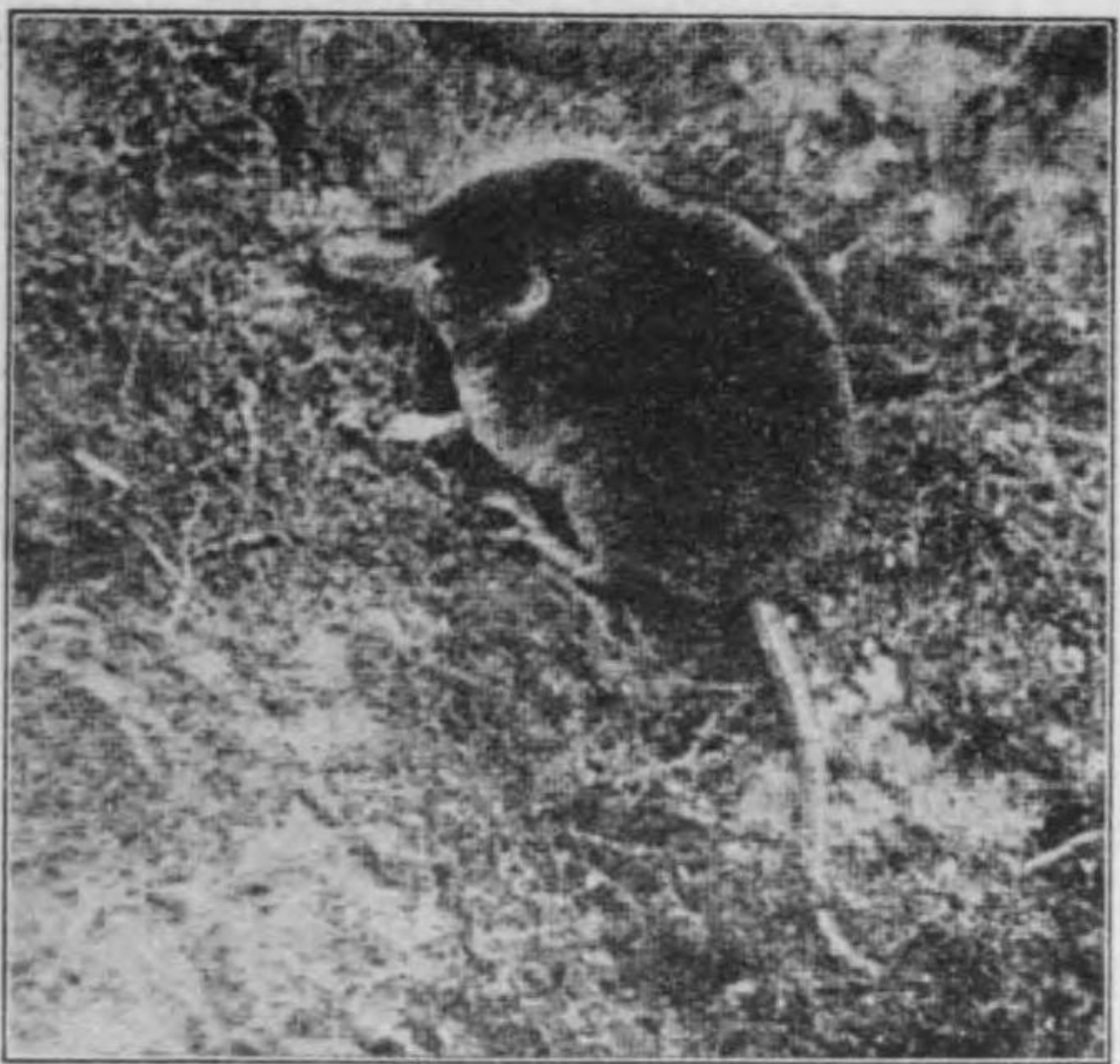
〔一〕 鼯鼠科 (Soricidae)

多くは地上に棲息すれども、稀に水中に游泳し得るものがある。伸長せる吻を有し、毛皮は柔軟にして、尾は短毛を以つて被はれて居る。上顎の前面にある一對の門歯は大きく、その後方の基部には、多少隆起せる突起を有し、大白歯にはW状の突起が、よく發達して居る。犬歯は小さく、前臼歯の数は一個にして、あまり大きくない。地上に棲息

するものは、四肢の兩側には、剛毛を有せざれども、水中に入出入するものは、四肢の兩側には、剛毛を有する。また水鼠屬の如く、蹠を有せざるものあれども、ネクトガレ屬 (Nectogale) の如く、趾は蹠を以つて連結するものもある。

〔一〕 鼯鼠又ひみず
Sorex dsinezumi, Temm.

小形にして、本州及び北海道に産し、田圃に多く棲み、ムグラネズミの作りたる巢穴に多く潜んで居る。吻端は著しく突出し、眼と耳殻



種一の鼯鼠 圖十五六百第
(*Sorex vulgaris*)

とは小さい。常に尖れる吻端をば、自由に屈伸させて地を穿ち昆虫類等を食ふを以つて、農業上有益である。

〔一〕 水鼠 *Sorex platicephalus*, Temm.

英に「ジャバニース、ウラター、シユル」(Japanese Water-Shrew) と稱する。體の長けは、四寸六七分にして、尾は殆んど體長と同じ位である。常に池沼、河畔に穴居し、夜出で、徘徊し蝦蟹、昆蟲、蝸牛、蚯蚓、魚類を食する。容易に水中に潜入し、又時々水上を泳ぐことがある。その口吻は、前種の如く細く尖つて居る。

〔二〕 麝香鼠 *Crocidura caerulescens*, Schaw.

九州長崎、沖繩島其他の暖地に産し、二三寸大の小形なる獸である。尾の下部に位置する二腺は、麝香様の香氣を有する液體を分泌する。常に地中に棲み、その性鼯鼠などと同じく、頗る貪食にして、夜間出で、害蟲を驅除する効が多い。

〔三〕 鼯鼠科 (Talpidae)

眼は甚だ小さく、全く皮膚中に隠れたるものがある。耳殻は短く、毛皮に因つて被はれて居る。四肢は短く、前肢は側方に擴張して、地を掘るに適する。口吻は突出し、體には柔軟なる天鵞絨様の毛皮を有する。歐羅巴、亞細亞、北米の温帯地方に分布する。

〔一〕 鼯鼠又むぐら Talpa mogura, Temm

「もぐら」といふ名稱は、大槻博士の言海に據れば「うごろもち」の轉化にして、墳ち墳持ちの義である。古名は「うごろもち」「もぐらもち」である。尤も現に伊豫宇和島にては「おごろもち」といふて居る。されば「もぐらもち」といふ名は、地面に土を掘り上げて、高く墳の如く築き上げるより起りたるものである。この獸の掘り上げし土墳は、一坪内に五六以上もあることがある。英に「モール」(Mole)といふは、古き英語の「モールド、ワープ」(Mold Warp)より起りしものであつて、この語は「土墳を築き上げる」といふ意義より、變化したものである。左れば「もぐらもち」といふ名の起因は、東西同一轍に歸したものと、いふべきである。

鼯鼠は地中にありて、蚯蚓其他の昆蟲類の幼蟲を食する爲めに、齒及び體の構造は、總べてよくこの生活に適するやうになつて居る。體は肥滿し、頸部は判然しない。鼻端は尖りて錐の如くなり、地を穿行するに、最も便利である。常に地中に棲息し、太陽の光線に觸るゝことなきを以つて、眼は毛皮中に隠れて居る。その性質最も日光を忌むを以つて、一たび地上に出で、日光を見れば、忽ち活氣を失ひ、遂には死するに至るのである。耳殻も甚だ小さいが、聽力は發達して居る。毛色は黒色、若くは帶褐黒色にして、

柔軟なる短毛を密生し、光澤ありて、天鵝絨の如き觀を呈する。四肢は短けれど、筋力は強く、且つ五趾を有し、趾毎に鈎爪を有する。前肢は殊に大きく、幅廣くして、最も筋力に富み、その掌部は外後方に向ひ、最後の指骨は、他の指骨よりは遙かに大きく、且つ二又に分れて、強大なる鈎爪を有する。腕骨は密接せる短骨より成り、その内側よりは、長き鎌狀の骨が突出して、掌部の幅を廣くするのみならず、腕に強力を與へて、土を掘るに適する。されば鼯鼠の手は、鶴嘴若くは鋤と同じ作用をなし、掌部で土をば左右に押し別ち、後肢を用ひて、その掘り起したる土をば、體の後方に、迅速に投げつけることが出来る。嗅覺は極めて鋭敏にして、土中に棲息する昆蟲類を嗅ぎ探るに適するのである。

前肢骨の中で、撓骨と尺骨とは短く、上膊骨も亦短く、且つ幅廣くして、その兩端は扁平となり、この部には、甚だ鋭るごき突起を具へて居る。かゝる骨組は、全くもぐらもちに特有なる構造にして、是等突起は、皆肩の關節を動かす所の筋肉の附着點である。而して上膊骨、撓骨、尺骨は、皆體中に隠れるを以つて、外部よりは見ることが出来ない。又胸部の前方は甚だ長く、その下部は龍骨狀を呈し、且つ擴がつて居る。肩胛骨は長く、三角狀を呈し、鎖骨は之に反して短かく、その肋骨より遙かに前方に位するは、地を穿つ

に當り、前肢をして、頭に接近せしむるの利益に外ならないのである。後肢は細くして、唯前肢の運動を助くるに過ぎざること、前に述べた通りである。

鼯鼠は、土壤中を穿行する際に、土壤を隆起し、爲めにその通路に當れる作物、其他樹木の根部を弛め、また畦畔に縦横に穴を穿つ爲めに、堤防を破壊し、用水を漏洩せしむる害はある。然し、ケラ、ハリガネムシ、其他害蟲の卵塊、幼蟲、蛹を食ひ、蛭、蝸牛、蚯蚓を食する利益はあれども、無毒蛇の卵、益蟲の卵、蛹等を食ふは、間接に害となるのである。毛皮は、袖口襟等につけて、防寒用となり、又砥石に代用して、刃物を磨くに用ひらる。

(一) 歐洲鼯鼠 *Talpa europaea, L.*

英に「モール」(Mole)と稱する。尾を含める體長は、稀れに八吋に超ゆるものがある。毛皮は、本邦産の鼯鼠と同じく柔軟にして、天鵞絨状をなせるは、穴を穿つ際に、土壤が附着せぬ利益がある。毛色は普通は黒色であるが、時には帶黄灰色もあり、又白色のものもある。鼯鼠位よく土壤を掘起し、穿行する獸はない。一晚の中に、一疋の鼯鼠が、體長の四百五十倍の通路を穿つことが判つて居る。さればこの割合で、人が發掘開鑿に従事したと假定せば、十二人の土工で、唯一晩の交代時間中に、四哩の長さある鐵道隧道を穿つことが出来るのである。

鼯鼠は、無害であるやうに見ゆるが、實際、仲々兇惡のもので、ちよとしたことから、同類相争闘し、勝ちたるものは、負けたるもの、體をば裂き、熱心にその血液を吸吮し、その肉を食ふのである。彼れは水分の缺乏に對しては、餘程困るものと見へて、常に水が



第百六十六圖 歐洲鼯鼠

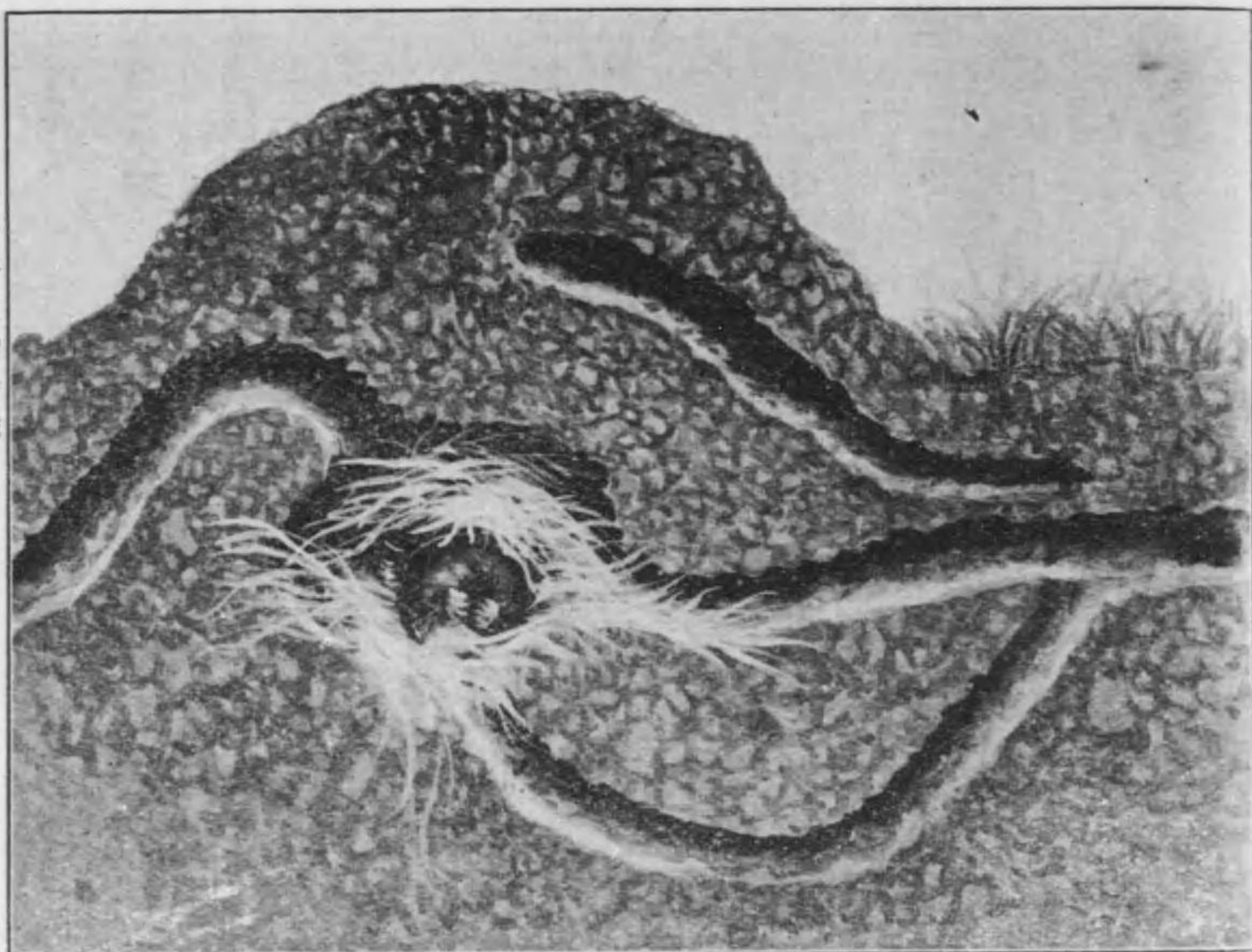
手近に得らるゝ所をば穿行する。その穿行するは、唯夜間に於てのみ働くにあらずして、屢々日中徘徊することがある。而して食物なくして、十二時間以上生存することは出来ない。その食物は、蠕蟲の外に、野鼠、鼠、蛇、蛙なども食するのである。彼れの自然に於ける敵は、鼯鼠の類である。皮は被服用として賞用せられて居る。

米國イリノイ州に於て、ウエスト氏が、五十六疋のモグラについて、其消化器中に含まれたる、食物の種類に就て調査せしに、有害なる昆蟲及び幼蟲類を多量に食し居りしを以て、間接には、農業上に大なる利益を與ふるものと考へられたれども、一方には甘藷球根類、穀物類の如きものを食害するより起る、直接の損害も、亦閑暇すべからずといふ。左に食物の一覽表を示さん。

全食物に對する百分比

食物	三	二六
蚯蚓	三一	二六
昆蟲	五三	六二
幼蟲	四七	三六
成蟲	四二	二六
植物	二八	一一
雜	一	一

鼯鼠は、一年一回子を産む。その蕃殖期は、三月及び四月頃である。而して牝牡共に、同一の巢にあるかは不明である。然し、牝が子供の養育所として、特に離れたる所に、巢を造ることは、確かである。この巢は、牡の巢と稍類似して居るが、その大きさは小さく、且つ巢の下底より、地表に通ずる導脈はない。巢中には、枯草を敷きて、幼児の床としてある。巢内に、幼児が存在する間は、地表を鋤起し、また墳丘をば、平坦に且つまき散らして、巢の所在を發見せられないやうにするのである。五月になれば、子を分娩するが、生れた子は、體長は二吋よりは長きことなく、石竹色にして、盲目、且つ體軀に毛を有せざることは、如何にもよく、生れて間もない豚の子に似て居る。幼者は、一日一吋の五分の一の



圖面斷縦の巢の鼠鼯 圖七十六百第
(From Marvels of the Universe)

割合にて、大きさも増し、生れて第十日目には、石竹色の體色は、變じて鉛色となり、更らに四日を経ると、同じく鉛色の短い天鵞絨狀の毛を生ずるやうになる。この毛は、日々長く伸び、且つ色は暗色となり、遂に第四週の末に於て、子供が巢を去るまでの間は成長する。子が一たび巢を去りたる後は、自身で食物を取り、獨立の生活を營むことが出来るのである。この頃になると、體長は親の長さの四分の三位に達し、大きさが小なる外、少しも親と異なる所はない。

生れた年の末頃になると、彼等は自分の住居を準備する。先づ地下一

二吋イシチの下に、穴を穿ちて室を造り、掘り起したる土をば、頂上に投げ出して、築山状に高める。この室には、草や樹葉より成れる巢を造るのである。而して、巢をばよく保護する爲めに、他より土を持ち運び來りて、室の頂上に積み上げる。その高さは、時としては二尺に達することがある。而して、この土は、この室に通せるトンネル隧道に因つて、運搬し來つたものである。これらの隧道は、堆積せる築山状の室にまで連絡して、別段に、其特別の設計を加へずに、穴その儘で存在して居る。以前幾多の博物學者は、これらの隧道は、敵の襲來を受けたときに、逃去用として、上下二段の外に、之を連絡せる幾多の路が、秩序整然として、系列をなして造られてあるやうに、想像してあつたが、これは誤謬である。然し、一たび敵より襲はれた時に、逃げる通路として、巢室の下底よりは、一條の隧道が出て、一旦下方に向きたる後に、上方に曲り、地表に通ずる隧道中の一ヶ所に、連絡するやうになつて居る。この巢中に於て、鼯鼠は單獨に棲み、體を捲き上げて横はりて居る。こゝより、時々巢を出で、隧道を通りて地表に近づき、蚯蚓其他の食物を探るのである。(この項リオネル、イーア、ダムス氏の説話に據る)

(三) ひみずもぐら又やまもぐら *Urotricus talpoides*, Temm.

英に「ヒミズ、モール」(*Himidsu Mole*)と稱する。體軀は鼯鼠ウロトリクスよりも甚だ小さく、頭胴の長

さは、九〇乃至一〇一ミリメートル、即ち我が約三寸乃至三寸三分である。毛色は暗褐色にして、口吻は鼯鼠よりも尖長なれども、前肢は鼯鼠の如くに發達しない。尾は體の割合に長くして、平均三三ミリメートル、即ち約一寸一分許に達する。この種は、九州の山地に産する。アンダーソン氏に據れば、蚯蚓の外、植物の幼根をも食ふといふことである。

對馬に産するものは、學名を *Urotricus talpoides adversus* Thos. と稱し、體軀は前種よりも小さく、頭と胴との長さは、八四乃至九一ミリメートルである。而して毛色は淡褐色である。この外、尾が比較的短き者には、四國産のものなる *U. t. centralis* Thos. と、本州産のものなる *U. t. hondonis* Thos. とがある。前者は毛色褐色にて、尾の長さは、平均三〇ミリメートルである。後者は、毛色は灰黒色にして、尾の長さは、平均二七ミリメートルである。以上は動物學雜誌(第二百六十八號)所載、理學士青木文一郎氏の「日本のヒミズモグラ類」といふ説話に據りたるものであるが、氏は羽前國八ヶ嶽産のヒミズモグラ類の一種 (*Dymecodon pilosus* True) に「ひめひみずもぐら」の新稱を附けて、簡單に記述せられて居る。曰く、「ウロトリクス」屬のものは、下顎に犬齒を缺くが、「ダイメコドン」屬のものは、上下兩顎に、犬齒を有する。而してこの「ひめひみずもぐら」は、外觀は、本州産のヒミズムグラ

に似て居るが、尾毛は特に短い。然し、時にはヒミズムグラの若きものと誤ることがある位ださうである。

因にいふ、伊勢山田神苑會附屬の陳列館には、伊豆日金峠、下野日光山、陸中宮古近在産のやまもぐらの標品を藏する。田中芳男氏編述の案内書に據れば、その土を掘り起すの害は、尋常の鼯鼠と異なる所がないといふことである。

第十目 貧齒類 (Edentata)

この類は、その名稱の示すが如く、齒の構造は不完全である。門齒は六つ、帶齒鼠にては、之を有すれども、その他のものは、之を缺いて居る。犬齒も之を有するものは、稀にして、よく存在するものにて、小形にして鈍く、且つ圓錐狀を呈する。樹懶（イタチ）「アルマデロ」及び南亞弗利加に産する土豚（ポコ）にては、上下兩顎には、若干の臼齒を有すれども、然かも齒根なく、又珙瑯質を有することがない。鯨鯢（マンネン）及び南米産の食蟻獸（タマシ）にては、口には全く齒が無い。食蟻獸「アルマデロ」の如く、昆蟲類を食するものあれども、その他は植物質を食する。性質は皆遲鈍にして、腦の發育は不充分で、大腦の表面には、回轉を有しない。土豚及び亞弗利加と亞細亞とに産する鯨鯢屬の外は、總べて南亞米利加に産するのである。

〔一〕 鯨鯢科 (Manidae)

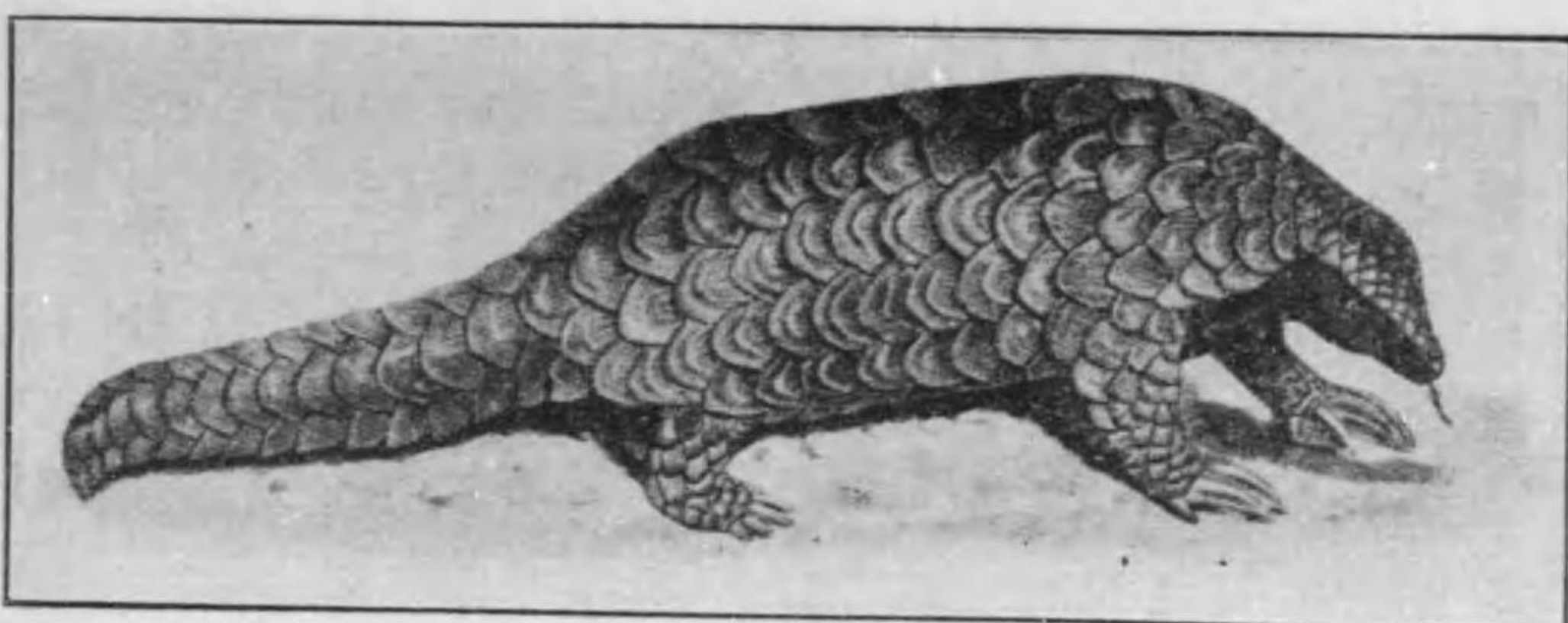
體の下面と、四肢の内側とを除き、體の外面には、角質の幅廣き大鱗をば、覆瓦狀に被覆し、鱗と鱗との間には、毛を疎生する。口には齒なく、舌は長くして蠕蟲狀をなし、口外に伸出することが出来る。四肢は短く、前後肢共に五趾を具へ、各趾には爪を有すれども、兩肢共に拇趾は頗る退縮する。前肢の第三指の爪は、非常に長く屈曲し、且つ縦扁となれるを以つて、地に穴を穿ち、又は蟻塚を穿つに適する。歩行するときは、前肢の外方に位する二指の背面と、外側とのみを地に着け、爪の尖端は上内方に向いて、地面に觸れて摩擦することはない。後肢はその全蹠を地につけて歩行する。

この科のものは、亞弗利加の西部と、東部と、南部との赤道附近、印度、セイロン島、バルマ、瓜哇、ボルネオ、マラツカ、支那、臺灣に産する。一種樹上に棲息するものあれども、多くは地上に穴居する。この類は、英に「スケアリー、アントイター」(Scaly Ant-eater) (有鱗食蟻獸) といひ、又マレイ語を採りて「パンゴリン」(Pangolin) といふのである。

〔一〕 龍鯢(鯨鯢) Manis dahmanni Sundeval. = M. aurita, Hodgson

印度、ヒマラヤ、山厦門、仙頭、海南、臺灣等に産するものにして、前肢の第三指の爪の長さは、後肢の第三趾の爪の長さよりは二倍ある。背部を被包する鱗數は、胴部にて十七

個を算するのである。頭部は小さく、縦扁にして、その前面に於て尖り、口腔は小さく、眼



(After Vogt and Specht.) 經 鱗 圖 八 十 六 百 第

も亦小さい。耳殻は之を有すれども、小形である。體は狹長にして、長さ二尺に達し、尾は體長よりも長く、その上面は隆起すれども、下面は扁平である。その食物は、蟻の如き別段に咀嚼を要せざる者なるを以て、齒なくとも、食物を取るに、一向差擱がない。又舌は細長なるのみならず、唾液は粘液質に富むを以つて、よく蟻を附着するに適する。その性質怯懦にして、敵に襲はれ、物に驚くときは、體を球狀に締め、唯甲鱗のみを顯はして、その害を防ぐのである。甲は穿山甲と稱し、古來藥用に供せられて居る。

(一) 尾長龍鯉 (Long-tailed pangolin)
Manis tetradactyla, L.

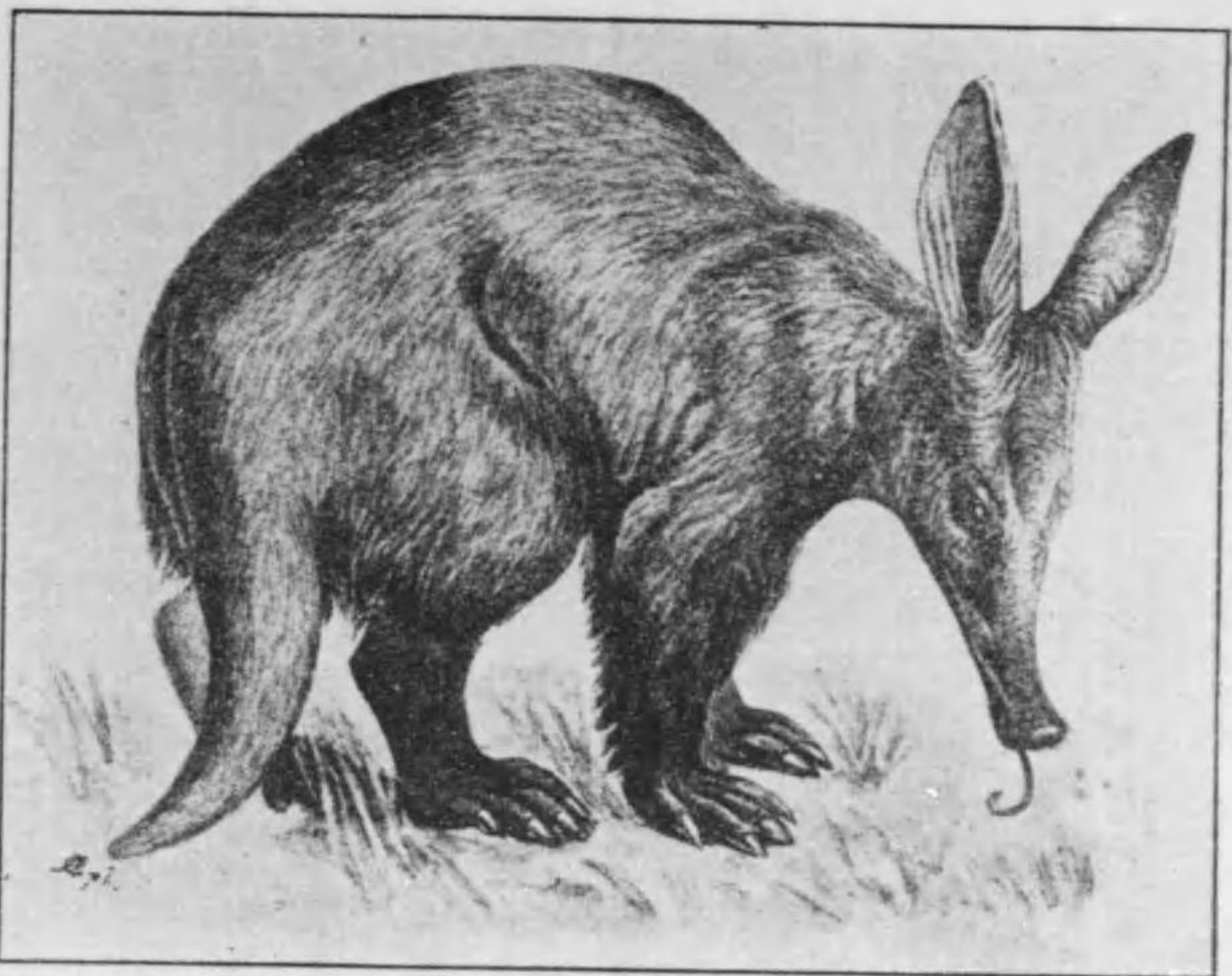
英に又「フアタギン」(Phatagin)といふ。西部亞弗利加に産し、尾は長くして、尾を含める體の全長は五尺に達する。この種に屬するものなるや否やは不明なれども、龍鯉の

肉は、亞弗利加の土人に因りて、食用に供せられ、美味なりと稱へられて居る。皮は種々の器具を飾るに用ひ、その鱗片は、中央亞弗利加にては、呪に用ひるといふことである。

(二) 土豚科 (Orycteropidae)

體には、剛毛狀の毛を疎生し、齒の數は多くして、上顎の各側には、八乃至十個、下顎の各側には、八個の齒を有するやうに見ゆる。然しながら、これらの齒は、決して一時に生ずるにあらずして、後方の齒が生ずる前に、前方の小齒は脱落する。而して成長せる獸にては、上下兩顎の各側にある齒は、常に五個である。而して、これらの齒の構造は、全く不思議である。その頂上は、齒が磨損する前に圓くなり、且つ基部は、齒根に至るまで、漸々に細くなることなく、平坦に截斷せられ、且つ絶へず成長するのである。總べての齒は、平行せる齒質の集合より成立し、その中央には、一つの細き髓室を有する。この室より、多くの筒狀をなせる齒質組織が、外方に射出し、これらの組織は、共に密接して押し合ひ、以つて全體は、革の集合せるが如く見ゆる。

前肢には、拇指を缺き、他の四指には、強壯なる中庸大の爪を有し、地を掘るに適する。而して歩るくときは、手掌を地に着ける。後肢には、五趾を有し、趾の長さは不等である。頭は伸長し、筒狀の鼻を有し、その先端には、鼻孔を開いて居る。耳は大きく、且つ尖りて



(After Vogt and Specht.) 豚土 圖九十六百第

直立し、舌は幾分か蠕蟲狀を呈する。尾は殆んど體長位長くして、圓筒狀をなし、基部に至りて甚だ厚くなり、尖端に至るに従ひ、漸々尖つて居る。この科のものは、亞弗利加に産し、常に地上に棲息し、動物質を食するのである。

〔一〕 土豚 *Orycteropus capensis*, Geoffr.

英に「アード、バーク」(Aard Vark)といふ。これボリア人の名づけたるものにして「アース、ピッグ」(Earth-pig)即ち土豚の義である。體軀は豚に類し、褐色の粗毛を疎生する。頭は甚だ長く、漸々尖りて吻狀をなし、大なる耳を有し、四肢は短く、爪は肥りて鋭るごとく、殆んど蹄狀を呈する。尾は長く圓筒狀にして、漸々に尖つて居る。體長は三尺以上にして、その外一尺五寸位の長さある尾を有し、體の高さは、一尺五寸位である。

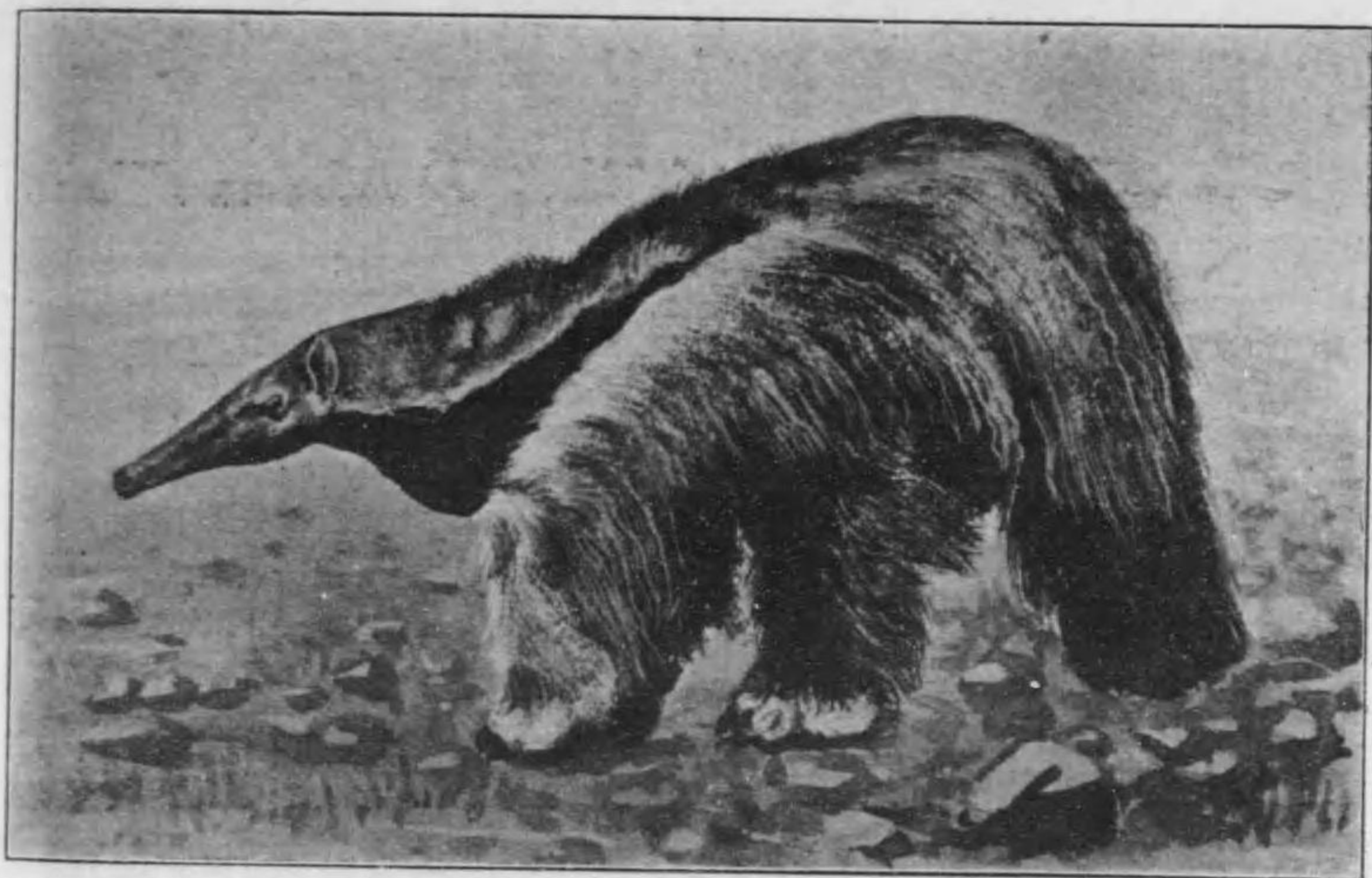
亞弗利加のグードホープ崎、アビシニア、セネガンビアに産し、夜出で、徘徊し、白蟻を食する。舌は蠕蟲狀をなし、且つ唾液は粘性がある。

〔二〕 食蟻獸科 (Myrmecophagidae)

體の外面には毛を有し、口には全く歯がない。頭は伸長し、吻は筒狀にして、その先端に口腔を開く。舌は長く蠕蟲狀にして、顎下腺より出づる、粘稠なる唾液を以つて、潤ふて居る。前肢の第三指は、よく發達し、長き鎌狀の爪を有すれども、他の指は退縮するか、又は隠れて居る。後肢には四又は五趾を有し、その長さは不等にして、皆爪を有する。尾は長く、時には屈撓するものがある。その食物は、蟻の如き昆蟲より成る。一種は地上に棲めども、穴居することなく、又樹上に棲むものがある。總べて、南米の熱帶地方に産するのである。

〔一〕 大食蟻獸 *Myrmecophaga jubata*, L.

英に「グレート、アント、イーター」(Great Ant-eater)又「アント、ベアー」(Ant Bear)又「タマノイア」(Tamanoir)といふ。中央亞米利加及び南亞米利加に産する。頭は狭く、且つ伸長し。舌は約一尺許に伸出することが出来る。體長は四尺で、肩に於ける高さは二尺位あつて、尾は二尺五寸位である。毛色は褐色にして、頭と顔とは、灰色を混じり、體と尾とは、



大食蟻獸 圖十七百第

多くの長い白毛を生ずる。咽喉は黒くして、この部より縁が白い三角形の黒條が肩を超へて斜に上後方に亘つて居る。また尾には長毛を叢生して居る。

前肢の第一、第二指は細く、殆んど同長の指骨を有すれども、第三指は大に發達し、其先端にありて爪を有する指骨は長く、指の全長は、第二指に超ゆる位である。爪は第五指を除く外、各指に於て發達する。歩行する時には、指は強く屈曲して、その先端をば、上方と内方とに向けて保ち、體重をば、第五指端を超へてある硬き蹠の部分と、第三、第四指の背面とに因つて支へるのである。後肢は短く、寧ろ幅廣くして、五趾を有する。各趾には爪を有し、爪の長さは皆一樣でない。

四趾は寧ろ最長なれども、第一趾は最短である。常に全蹠を他に着けて歩行する。耳は小さく、卵形にして直立し、眼は甚だ小さい。



小食蟻獸 圖一十七百第
(From Proc. Zool. Soc.)

常に河の沿岸にある低濕の草原、及び森林の濕地に徘徊し、白蟻を食する。牝は一産に一子を分娩し、乳房は胸部に二個を有するのである。

(二) 小食蟻獸 *Tamandua tetradactyla*.

英に「リットル、アント、イーター」(Little Ant-Eater)といふ。頭は前種程伸長しないし、體の大きさも、前種よりも小さく、その半分位であるが、前種よりも極く普通のものである。體には短き剛毛を生じ、尾は漸々尖りて、物に捲き付くことが出来る。尾の下面と先端とは、毛を有せずして、その代りに鱗を有する。

南亞米利加及び中央亞米利加の森林に棲息し、樹木に攀縁する。毛色は個體に因つて異れども、普通は帶黃灰色にして、殆んど體の側面の全部に沿ふて、一本の幅廣き黒帶を有するのである。前肢の第三指には、甚だ大なる

爪を有し、第二、第四指には、中庸大の爪がある。第一指の爪は、甚だ小さく、第五指は全く皮膚中に埋没し、且つこれには爪がない。後肢には五趾を有し、これには皆爪を有すれども、爪の長さは不等である。

〔四〕 犰狳科 (Dasipodidae)

皮膚の大部分は、化骨し、背と體側とは、無數の正方形若くは多角形の骨質小板を有し、甲冑の如く、頭頂より背部と、四肢の外面とを被覆して居る。而して小板と小板との間は、皮膚が柔軟にして、よく屈撓し動くのである。而して多くの種にては、この間より毛が生へて居る。四肢の内面と、體の腹面とは、皮膚が柔軟にして、多少毛を以つて被はれて居る。また骨質小板の表面には、角質の表皮を有する。齒はその數多くして、構造は簡單なれども、絶へず成長する性がある。前肢には、種類に因つて三指、四指、若くは五指を有し、これには發達せる強き鉤爪を有し、地に穴を穿ち、或は物を搔くに適する。後肢には五趾を有し、趾には皆爪を具へ、全蹠を地に着けて歩行する。舌は長く尖り、且つ伸出することを得れども、食蟻獸程長くは出でない。然し顎下腺は非常によく發達する。この科のものは、英に「アルマデロ」(Armadillo)と通稱せらる。これは西班牙語より出でたるものにして、「甲冑を着ける獸」といふ意義である。

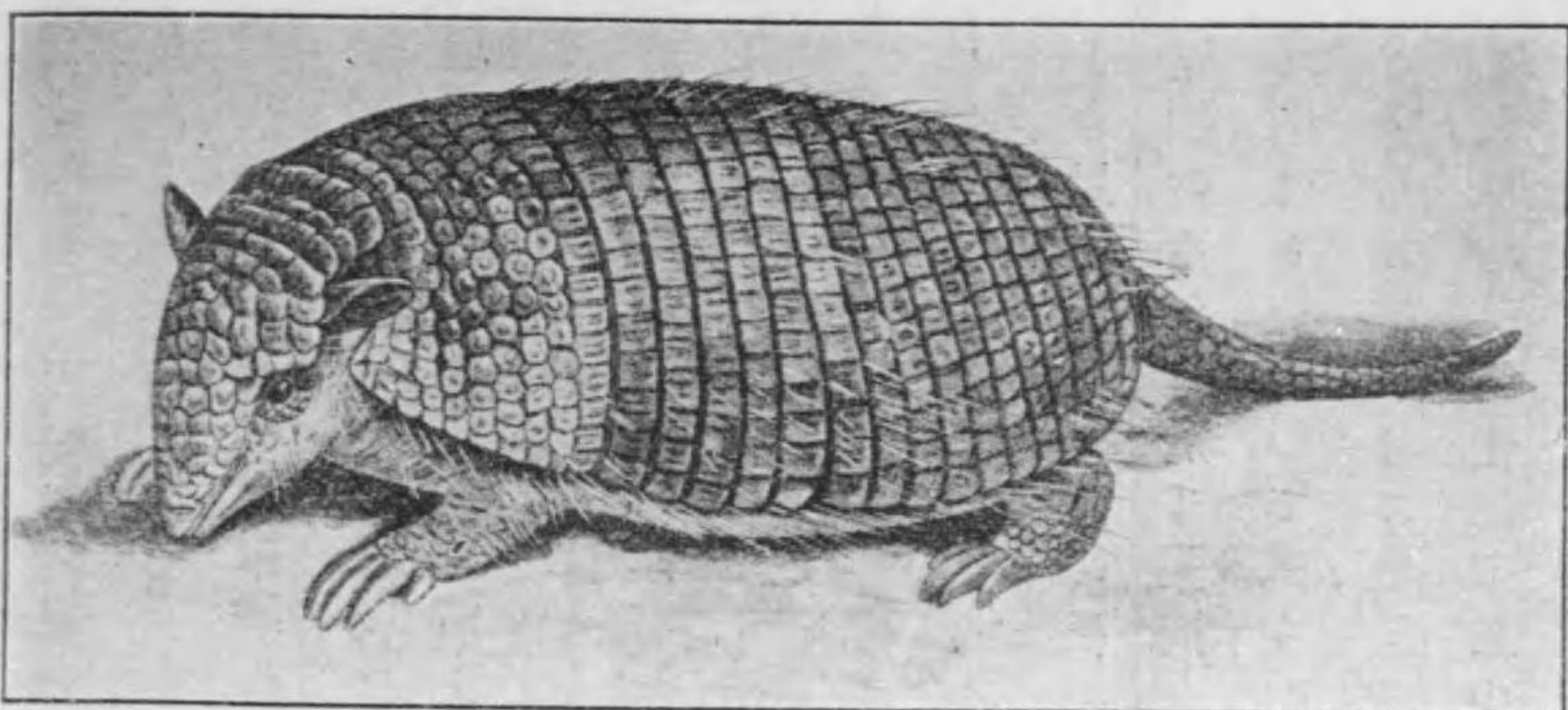
この科のものは、體軀の大きさは小形なるか、若くは中庸大にして、大概のものは穴居し、多くは夜間出で、徘徊する。ある種は、全く昆蟲を食すれども、中には雜食するものありて、植物の根、昆蟲、蠕蟲、地上に棲む鳥、鳥卵、爬蟲類を食する。又牛馬羊等の屍肉を食ひ、掃除役を務むるものがある。この類は穴を穿つに有力なるを以つて、土人が屍體を埋葬するに當つて、墓所をば丈夫なる板圍か、又は石で圍まざれば、彼等の爲めに發掘せらるゝ恐れありといふことである。

皆南亞米利加の熱帶、及び温帶地方の平原若くは、森林に棲息する。土人はその肉を食用に供するのである。

〔一〕 犰狳動物通解 大鎧鼠 (命名博士) *Dasyus gigus*, Cuv.

英に「グレートアルマデロ」(Great Armadillo)といふ。本科中の最大なる者にして、吻端より尾根に至る迄の長さは、三尺以上に達し、尾は約一尺六七寸もある。齒は通例上下兩顎の兩側に於て異同を見れども、常に各側二十乃至二十五個もあるを以て、總計百以上にも及ぶのである。而して年齢が進むに従ひ、前方の齒は脱落して、その齒槽は全く痕跡もなくなるやうになるのである。

頭は小さく伸長し、且つ圓錐形をなし、耳は中庸大にして卵形である。前肢は五指を

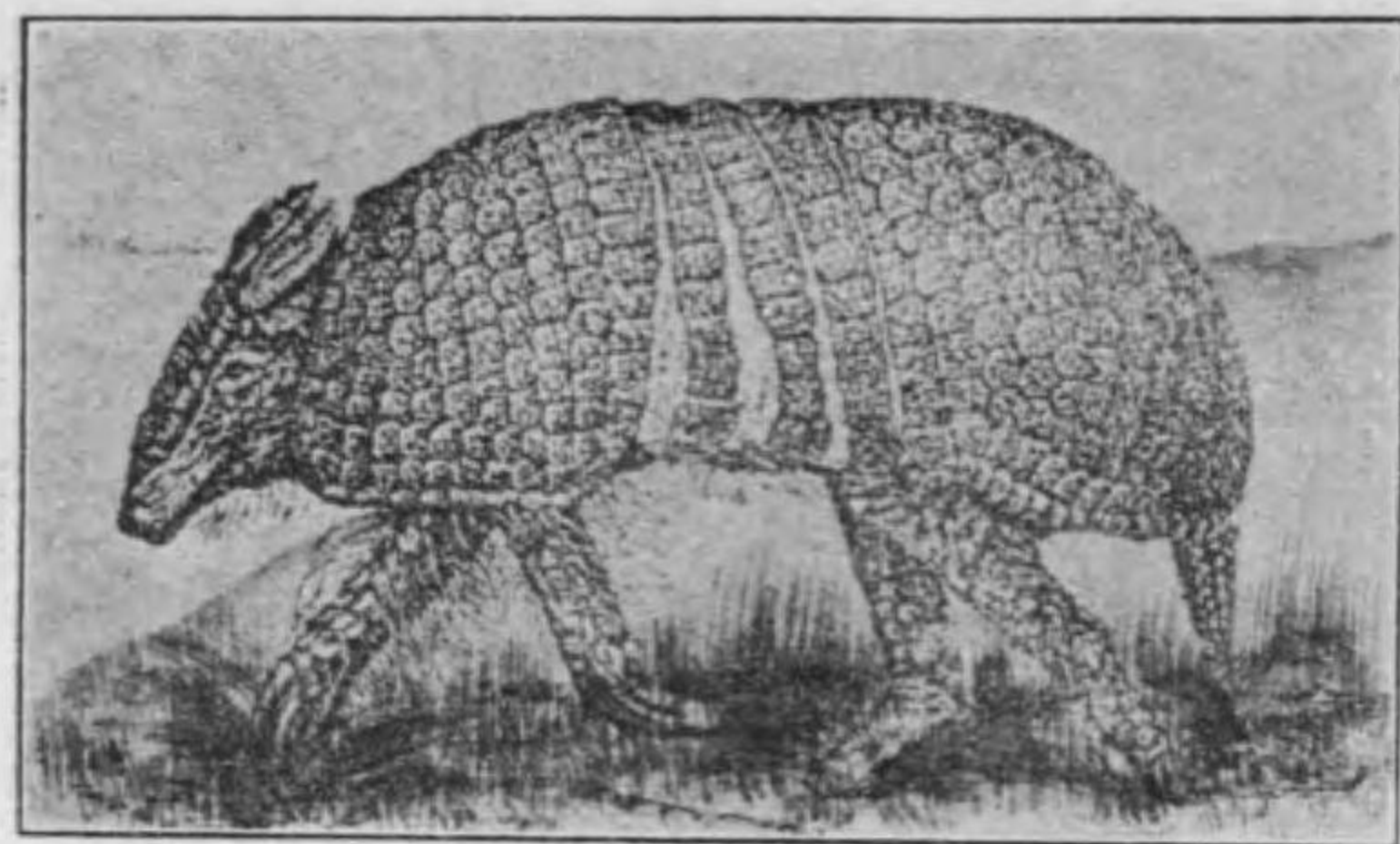


第百七十七圖 第六帶鎧鼠 (After Vogt and Specht.)

有し、第三指にある鎌状の爪を以つて、地を掘起し、時には墳墓を開き、屍體を食ふことがある。後肢は短く、且つ圓味を帯び、五個の甚だ短き趾を具へ、趾毎に短き幅廣き扁平なる鈍爪を有するのである。常にスリナム及びブラジルの森林に棲息する。

〔二〕 六つ帯鎧鼠(假稱) *Dasypus sexcinctus*

英に「シツクス、バンドデッドアルマヂロ」(Six-Banded Armadillo) 又「エンコウベルト」(Encoubert) と稱する。頭は幅廣く、且つその上面は扁平である。口吻の先端は鈍く、耳は中庸大にして、體の側方に着き、左右遠く離れて居る。體軀は幅廣く、且つ側方より壓迫せられたるが如き觀を呈する。胴の中央部には、六個の動くべき帯を有する。尾は體よりも短く、漸々に尖つて居る。前肢には五指を有し、その第一指は最も細く、第二指は最長なれども細く、第三乃至第五指は、次第にその長さを減じ、五指共に皆



第百七十三圖 三輪鎧鼠

鉤爪を有する。後肢は寧ろ短く、五趾には皆爪を有し、第三趾は最長にして、第二趾はこれに次ぎ、第四趾の長さは、第二趾より少しく短く、第一第五指は殆んど同長である。ブラジル及びパラグエーに産するのである。

〔三〕 三輪鎧鼠(丘博士命名) *Dasypus trinectus*, L.

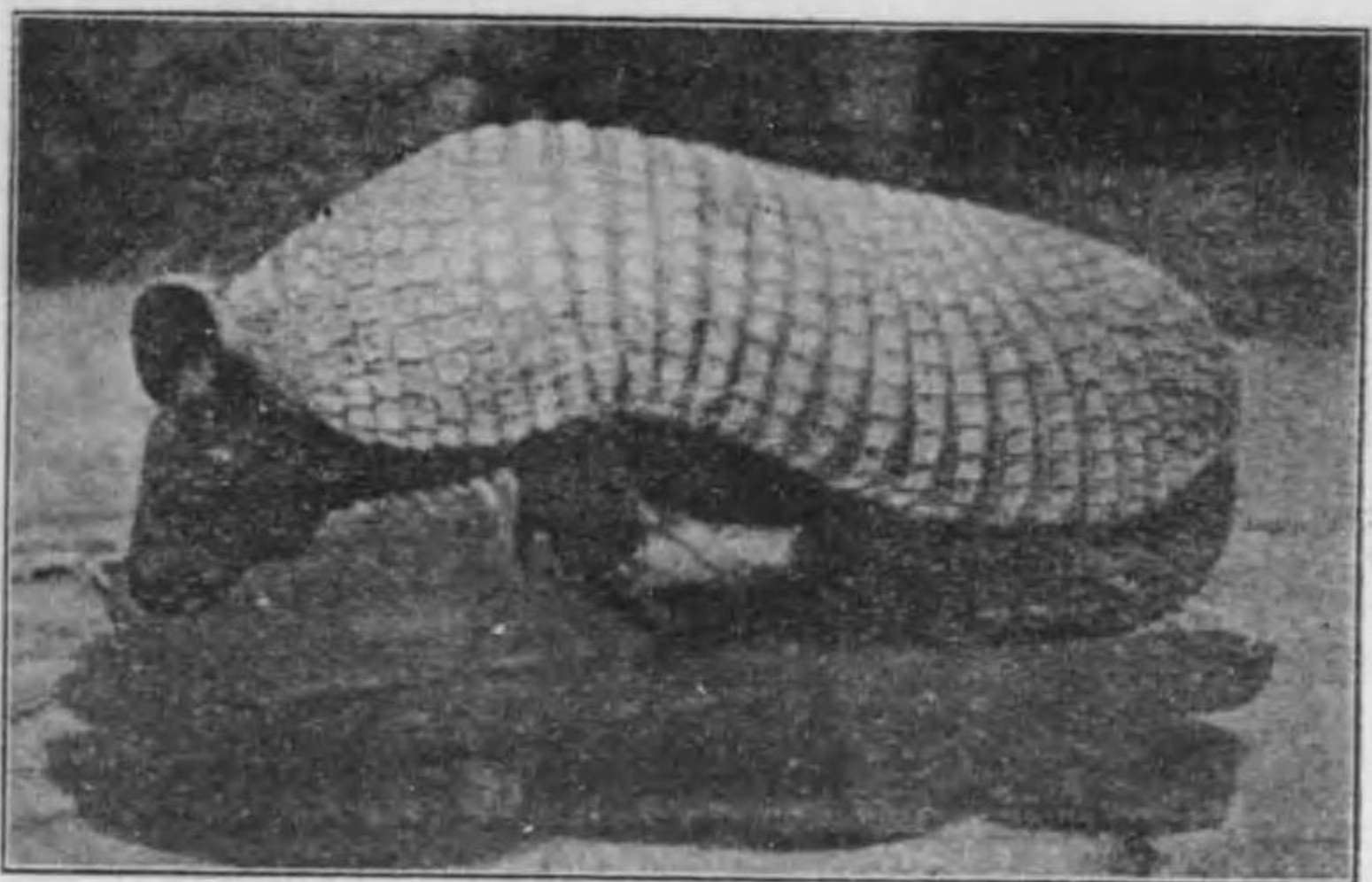
耳は頭の兩側に低く着き、寧ろ大形にして、幅廣き卵形である。背面を被へる骨質板は、體の兩側に於て、著しく離れ、以つてこの部に大なる空隙を造り、この中へ四肢をば、容易に退縮せしむることが出来る。而して胴の中央には、三個の動かし得べき帯を有する。尾は短く圓錐状をなし、大なる骨質の瘤起を以つて被はれてある。前趾の第三指の爪は、甚だ長く、且つ鎌状を呈する。而して後趾に於ては、中央の三趾は、幅廣き扁平なる爪を具へ、共に合して三つ

に、深裂せる蹄状をなして居る。この獸は、危険に遭遇するときは、完全なる球状となりて、體を捲縮する性がある。而

して、他の種の如くに穴居することはない。又甚だ奇妙なる足取りを以つて、迅速に走るが、その際、唯前趾の爪の先端のみ、地に着くのである。前種と同じく南米の産である。

〔四〕 廣帶鎧鼠(假稱) *Lysurus uncinatus*

英に「ブロード・バンドデッド、アルマデロ (Broad-banded Armadillo) 又「タトゥアイ」(Tatouay) 又「カバツソウ」(Cabazon) と稱する。狢狸科の中では、狢狸に次いで大なるものにして、體長は一尺五寸に達する。スリナム、ブラジル、パラグアイに産すれども、あまり多くはない。耳は寧ろ大きく、圓味を帯び、左右廣く離れて居る。頭部は後方に於て幅が廣い。胴にある動くべき帯は、十二三ある。尾は體よりは著るしく短く、且つ細く、皮膚は殆んど裸なれども、下面と頂上に近き處には、小形の背骨板をば、少しく散生して居る。前趾の第一と第二指とは、長く且つ細く、これには小爪を有する。第三指には、大なる鎌狀の爪を具へ、第四と第五指とは、小爪を具へて居る。後趾は割合に小さく、これには五趾を有し、皆小なる三角形の鈍爪を具へて居る。而して第三趾は



最長なれども、第一趾は最短である。

〔五〕 鎧もぐら(丘博士命名) *Chlamyphorus truncatus*, Hart.

英に「ピチシアゴ」(Pichiango) 又「ピチアゴ」(Pichigo) といふ。小なる穴居する獸にして、體長は約四寸許である。アルヘンチナ國の西部の砂地平原に棲息し、殊にメンドサの附近に多い。骨質小板は、石竹色を帯び、その間に生せる絹狀の毛は、雪白色である。これは稀れな種類である。

骨質板は、明瞭に横亘せる帯が、序列をなして排列し、後頭部と、胴の截形をなせる後端との間に、約二十個の帯を有する。體の後端は截斷せられたるが如き形狀をなし、こゝには、堅硬なる卵形の骨質板が、垂直に位する。尾は寧ろ短く、その基部に倚れる半分は、圓筒狀をなし、その先端に於て擴大して居る。前後肢共に、その背面には、角質小板を有する。而して四肢の下面と、背部の骨質板の懸垂せる側方の下にある體の下面と、及び側面とは、甚だ柔軟なる長い絹狀の毛を以て被はれて居る。眼と耳とは甚だ小さく、且つ毛中に隠れて居る。四肢は短く、皆五趾を有し、これには、よく發達せる爪を有する。前肢にある爪は、甚だ長く、強健にして、幾分か壓縮せられて居る。

〔五〕 樹懶科 (*Bradipodidae*)

頭は短く圓い。眼は前向し、耳殻は小さく不分明である。臼齒は上下兩顎の各半部に、三乃至四個を有し、これは筒状にして、絶えず成長する。然しながら門齒は之を缺いて居る。又時としては犬齒を缺くものがある。額骨にある一大突起は、下顎上に垂下する。前肢は後肢よりも非常に長く、その末端は、狭き曲れる足となつて居る。趾は三個を超ゆることはない。而して、各趾の全長に亘りて、共通の皮膚にて被はれ、皆長き強爪を具へて居る。又尾は退縮するのである。

この類は、常に樹上に棲息し、その強爪を用ひて、枝より懸垂する。體には枯草状をなせる長い粗毛を以て被はれて居る。南亞米利加、及び中央亞米利加の森林に産し、植物を食するのである。

〔一〕 三趾樹懶 *Bradypus tridactylus*, Cuv.

英に「スリー、トード、スロース」(Three-toed Sloth) 又「アイ」(Ai) と稱する。「アイ」の名は、其の叫聲より名づけたものである。體の長は約二尺にして、粗毛は主に帶褐灰色にして、時としては、肩の間に卵状の斑紋を有し、これは褐色若くはオレンジ色を以つて縁付けられて居る。この斑紋は、樹木の斷株の切口によく彷彿し、この動物が樹枝に懸垂せるとき、よく四周の色と一致し、之を保護するものである。而して斑紋は、樹懶が永く樹枝

に靜止せる間に、毛上に附着せし微小の藻類の繁殖せし爲めに、生じたものである。故に樹懶を捕へ來りて、之を飼養するときは、漸次にその綠色を失ひて、灰色となるのである。これ樹懶の背上に繁



第百七十五圖 二趾樹懶 (After Vogt and Specht.)

茂せる藻類が、林地より持ち來たされた爲めに適當の濕氣と溫度とを失ひて、漸次枯死し、遂に褪色せるに基くものである。樹懶は、夜間出で、徘徊し樹葉、芽、幼苗を食する。その肉は食用となる。また彼の敵には、蛇類がある。

〔二〕 二趾樹懶

Choloepus didactylus, Ill.

英に「ツウ、トード、スロース」(Two-toed Sloth) 又「ウナウ」(Uman) といふ。脊椎は六個を有す

る、南米の森林に産し、習性は前者に酷似するのである。

第十一目 有袋類 (Marsupialia)

この類は、腹部の皮膚の褶襞より成れる袋を有する。而して胎生なれども、母體には胎盤を生ずることなきを以つて、幼兒は子宮内膜の腺體より分泌する液汁を以つて養はれ、生まれたるときは、不完全なる構造を有し、母の袋中に入れられ、その部にある乳房より分泌する乳汁に因つて養はれるのである。袋の形式は、種屬に因りて異り、あるものにては、袋は前方に開くあり、又ある者にては、後方に開いて居る。またある種屬にありては、唯皮膚の皺襞をなせるに過ぎざるものがある。骨盤よりは、二個の叉状をなせる袋骨が、前上方に伸出して、殆んど脊椎骨と平行して居る。この骨は、多くの種屬にありては、牝の腹部の袋を支持する役目があるが、又奇なることには、牡にもあるのである。而して齒式は種屬に因つて一定しない。

この類は、袋鼠の類が、亞米利加に産する外、總べて、濠太利亞大陸及び附近の島嶼の特産である。その外形と習性とは、非常に變化がある。多くのものは、草食にして、その齒式は、齧齒類若くは有蹄類に似て居る。然しあるものは、雜食である。又食肉類の如く、昆蟲、鳥類、哺乳類を食するものがある。濠太利亞大陸にては、この一目を以つて、他の大陸

に棲息せる、哺乳類の各目の代表者を、現出せるが如き觀を呈して居る。即ち「ウラムバット」は齧齒類を代表し、「カンガル」は、反芻類を代表し、「フクロムササビ」は、「ムササビ」の類を代表し、「フクロリス」はその外形と習性とは、「レムール」に似て居るし、「フクロタヌキ」は、巖鼯の如き食蟲類に酷似するのである。

有袋類を分ちて、次の五亞目として記述する。

第一亞目 齧齒有袋類 (Rhizophaga)

雜大あんどまの重々しき獸にして、體には軟毛を密生し、四肢は短く、尾は退縮する。四肢は五趾を有し、後肢の内趾のみは退縮して、これには鉤爪を有しない。齧齒類に似たる齒式を有する。

第二亞目 食草有袋類 (Poëphaga)

頭と頸とは小さく、前肢は小さく弱くして、これには五指を有し、後肢は甚だ長く發達し、跳躍するに適する。後肢には四趾を有し、その末端には、蹄狀の爪を有する。而して四趾の中で、内方にある二趾は、合着し、その中央のものは、甚だ長く、且つ有力である。尾は、甚だ長くして、その基部は肥大し、跳躍するを助くる。齒式は、馬の齒式とよく似て居る。常に植物を食し、胃は結腸狀をなし、盲腸は甚だ長

第三亞目 食果有袋類 (Carpophaga)

樹木に攀縁する有袋類にして、後肢の第二第三趾は互に結合し、内方に位する趾には爪なくして、且つ對向して居る。尾は長くして、纏絡することが出来る。齒式は前二亞目の中間のものといふべきである。

第四亞目 食肉有袋類 (Raptacia)

齒式は食蟲類と食肉類とに似た所がある。胃には腺狀装置がなく、盲腸の發達も著しくない。あるものは、樹木に攀縁し、あるものは跳躍し、又あるものは、走ることが出来る。

第五亞目 足手有袋類 (Pedimana)

樹木に攀縁する小形の有袋類にして、主として植物、鳥、卵、昆蟲、小獸を混食する。口吻は稍鋭り、眼と耳とは大きく、尾は長くして裸出し、纏絡性を有し、攀縁するに用ひらる。四肢は中庸大にして、兩肢共に五趾を具へ、後肢の第一趾を除く外、皆短い鋭るぎき鈎爪を有し、これらは殆んど同長である。後肢の第一趾は、大きく、且つ他の四趾と廣く離れて對向し、その先端には、爪を有せざれども、此部

は圓るく擴張して、以つて樹木に攀縁するを助くるのである。これ足手有袋類の名がある所以である。この類は、亞米利加大陸に産するのである。
以上

第一亞目 齧齒有袋類 (Rhizophaga)

(一) ウチムバット科 (Phascomyidae)

體は肥大せる魯鈍なる獸にして、吻は短く且つ幅廣い。四肢は幾分その長さを異にし、甚だ太く強壯である。前肢には五指を有し、指の長さは、少しく不同にして、各強壯なる爪を有する。後肢の拇趾は短く、且つ爪なく、其他の趾には、爪を具へて居る。而して尾は退縮する。胃はその構造簡單にして、盲腸を有し、また牝は袋を有する。

(一) 普通ウチムバット

Phascomyis mitchelli, Owen.

英に「コンモン・オーストラリアン・ウチムバ



第百七十六圖 普通ウチムバット

ツト] (Common Australian Wombat) といふ。ニュー・サウス・ウェールズ、ヴィクトリア、南部濠太利亞に産する。一に「オーストラリアン・バッヂャー」(Australian Badger) (濠太利亞の義) といはる。體は重々しく造られ、體長は三尺位である。體には粗糙なる毛を生じ、毛色は帶褐色より、黄色のものがある。又黒色のものもある。耳は短く圓るく、且つよく毛を生ずる。四肢は短く、後肢には、一部蹠を有するを以て、水を渡ることが出来るし、また前肢にて地を穿ちて、穴居するのである。肉は美味にして食用となる。毛皮は靴拭を製して、耐久性がある。

(一) タスマニアウナムバット (Tasmanian Wombat)
Phascolomys ursinus

タスマニアに産し、體長は三尺位である。毛色は背部と腹面とは、一様に暗色を帯びたる灰褐色である。

(二) 毛鼻ウナムバット (Hairry-nosed Wombat)
Phascolomys latifrons.

南部濠太利亞に産し、體長は三尺三四寸である。體毛は伸直且つ柔軟にして、絹状をなし、體の上部は灰色の斑で、吻端は白く、その部には毛を有し、觸はれば、天鵞絨状の感

がある。眼の上下には、一個の斑點を有し、その色は白色である。頬と咽喉と胸とは白く、額は黒く、他の體下部は、汚れたる灰色である。常に穴居して棲み、植物の根を食するのである。

第二亞目 食草有袋類 (Poëphaga)

(一) カンガルー科 (Macropodidae)

胃は囊状をなし、且つ盲腸を有する。袋は大きくして、體の前方に開いて居る。

(一) 濠太利亞麝香鼠 (Australian Musk Rat)

Hypsiprymnodon moschatus, Ramsey.

體は小さく、長けは僅に八寸餘にして、尾は五寸五分位に過ぎない。その形狀は、鼠に似て居る。クイーンズランドなるヘルバルト河の流域地に産する。

(二) 兎カンガルー (Rat-kangaroo) Potorous

英に又「ポトルー」(Potoro)と稱する。體は小形にして、大なるものにも、大さは飼兎位に過ぎない。前肢の指にある爪は、甚だ大きく、中央に位する三指の爪は、殊に大きい。後肢には、拇指を缺く。尾は長くして、毛を生ずる。又犬齒は、通例存在して居る。常に地上にありて草を食し、その肉は土人に由りて、食用に供せらるゝのである。

〔三〕 ワラビー (Wallaby)

この中には、多くの種と變種とがある。カンガルー科の中で、小形の者にして、毛は輝いた色を呈する。この「ワラビー」といふ名は、濠太利亞土人の呼んで居る名である。この中で、最大なるものは、



イピラツ岩 圖八十七百第 (After Vogt and Specht.)

「ブラツシユ・カンガルー」 (Brush Kangaroos)

と呼ばれて居る。これ、彼等が、藪の茂れる地方に、徘徊するより起りたる名である。

一種「赤頸ワラビー」 (Red-necked Wallaby)

と稱するものは、ニウ・サウス・ウェールズ及びビクトリア地方に産し、形状は

大「カンガルー」に似て居る。體長は殆んど三尺五寸に達し、よく跳躍する。

一種「岩ワラビー」 (Rock Wallaby) (Petrogale xanthopus)

と稱するものは、岩石多き地方に棲息するものにして、この類には、他にも種類がある。又外貌普通の野兔に似たるものを、

「兔ワラビー」 (Hare Wallaby)

と稱する。これには、若干の種類あれども、その中の一種なる

「帯條兔ワラビー」 (Banded Hare-Wallaby) (Lago-trophus fasciatus, Peron and Lesson)

は、體軀は小さく、輕快にして優美である。吻の毛は、鼻孔の上内角と、同高の處にまで生へて居る。毛皮は厚く且つ柔軟にして、毛色は、通例背部は灰褐色にして、その後方には、黒と白との横帯を有し、體の下面は、灰色と白色とを混じて居る。耳殻は短く、その後面は灰色である。四肢の腕部と背面とは、灰色に赤色を帯び、その他の部分は、黄灰色である。尾は短毛を密生し、その上部は黄灰色なれども、下面は暗黄色である。常に地上に生活し、植物を食する。

〔四〕 樹棲カンガルー (Tree Kangaroo) Dendrolagus ursinus

體軀は非常に小さい。前肢と後肢との長さは、あまり相違して居ない。而して後肢に

は、鉤爪がない。四肢は、樹木に攀縁する爲めに、特別に適應して居ないけれども、常に多くは、喬木上に棲んで居る。この種の外に、二種ありて、總べてクインスランド及び新ギニアに産する。

〔五〕 大カンガル― *Macropus giganteus*, Shaw.

英に「グレート・カンガル―」(*Great Kangaroo*) 又「グレート・グレイ―カンガル―」(*Great Grey Kangaroo*) といふ。この獸が、



第百七十七圖 樹に攀るカンガル―
(From New Illustrated Natural History)

歐洲人に知られたるは、西暦千七百七十年にして、カピチンクツク氏が、遠洋航海中に、始めて發見したものである。頭は小さく、眼は大きく圓く、且つ美しくして、柔和の相を呈する。耳は長く卵形であつて、口吻は尖つて居る。充分に成長し

たる牡では、體長四尺以上を超へ、この外に、三尺許の後肢を有する。牝は牡よりも、非常

に小形にして、全く別種と思はるゝ位である。前肢は短小にして、唯後肢の半分位であつて、これには五指を有し、皆強壯なる鉤爪を有する。靜止して直立する時は、前肢は、之を胸部に懸垂し、手の作用を營むのである。後肢は長大強壯にして、その長さは三尺五寸許ありて、拇趾を缺く。四趾には、強壯なる爪を有し、第四趾にある爪は非常に長くして、以つて有力なる防禦器官となる。後肢は、全蹠を以つて、地を踏むのである。

毛は羊毛狀をなし、柔軟にして短く、密生し、吻端には殆んど毛がない。毛色は、普通背部は帯灰褐色にして、腹面と四肢の内側とは、白味を帯びて居る。兩肢の趾の先端は、殆んど黒く、尾は褐色なれども、その先端に進むに従ひ、漸々暗色を帯び、先端は全く黒色である。カンガル



第百八十八圖 大カンガル―

が、短距離を歩むときには、四肢をば地に着けて不器用に歩めども、一たび物に驚く

ときは、後肢を以つて跳躍し、一躍よく一丈五尺位も跳び、また高さ九尺位の墻壁をば跳び越すことが出来る。静止するときは、尾は第三肢の代用をなし、有力なる支柱となる。又跳躍する際には、尾は水平に體の後方に附着するを以つて、體の平均を取るに都合がよいのである。

大カンガールは、東部濠太利亞及びタスマニアの平原に棲息し、常に草本其他の植物質を食する。門齒は上顎に三對、下顎に一對を有し、上顎の三門齒は、縁邊幅廣くして、植物質を切るに適する。又これと相吻合する所の下顎にある一對の門齒は、大きく披針形をなして尖り、その縁邊は鋭るごとく、恰も剪刀の刃の如く、以つて上顎に對して、よく咬み合ふのである。犬齒は之を缺き、前臼齒は上下兩顎に二對宛、後臼齒は四對宛あれども、前臼齒と後臼齒の一、二個は落下するを以つて、老獸にては唯僅に門齒と二個の後臼齒とを存するのみである。この獸は、植物質を食するを以つて、盲腸は長く發達し、胃も大きく、その壁には、縦筋發達して、皺狀を呈し、爲めに外觀恰も結腸の如く見ゆるのである。

牝は一産に一子を分娩する。その懷胎日數は、僅に三十九日に過ぎない。生れたる子は、長さ一吋位で、盲目にして毛なく、體は蚯蚓の如く半透明で、極めて哀れむべき姿である。

ある。生まるゝや否や、母親は袋の中へ子を入れ、乳房を哺乳させるのである。袋内には、四個の乳房を有し、この附近の筋肉の收縮に因りて、縮り出でたる乳汁は、小供の呼吸を妨ぐるごとくなくして、口腔へ入るのである。斯くて、約八九月の間、子供は袋中に残り、自由に自ら歩行し得るに至れば、袋は子供の隠れ場所となるのである。

大カンガールは、牧草を食ひて、牧畜家に損害を與ふることが少くはない。その皮は鞣して靴及び手袋等に用ゆる。カンガール科のものゝ肉は、皆多少食用に供せられて居る。その腰肉は、特に柔軟であるが、又後肢の肉よりは、よい燻肉を作り、尾の肉は、スーブとして、珍重せらるゝ所である。

第三亞目 食果有袋類 (Carpophaga)

(一) 袋栗鼠科 (Phalangitidae)

四肢は前後肢その長さを異にすれども、共に五趾を有する。前肢の指は、その長さ不等なれども、皆爪を有する。後肢は短く、且つ幅廣くして、五個のよく發達せる趾を有する。拇趾は大きく、爪なれども、他趾と對向する。而して第二第三趾は細くして、共通の膜に因り、爪に至るまで連結せられて居る。而して爪は樹木に攀緣するに適するやうになつて居る。尾は「コアラ」の外は、甚だ長くして、殆んど常に屈撓する。皆樹木上に生活

し、重に夜間出で、徘徊し、この中二三種は、植物質を食すれども、多数のものは、雑食にして、昆蟲、小鳥等を好むのである。胃は單純で、牝の袋はよく發達して、後方に開いて居る。この科のものゝ多くは、濠太利亞にて「オポッサム」(Opossum)と呼ばれ、大なる種類は、毛皮を得んが爲めに、狩獵せらるゝのである。

〔一〕 袋栗鼠 *Phalangista vulpina*, Desm.

英に「コンモン・フアラランガー」(Common Phalanger) 又「バルビン・フアラランガー」(Vulpine Phalanger) と稱する。栗鼠に似たる有袋獸にして、體長は一尺五寸位で、尾も亦栗鼠の尾に似て、長さ一尺位ある。背部の毛色は帶褐灰色にして、體下は帶黄白色である。耳は白く、尾は黒い。而して尾は屈撓性に富み、之を用ひて、樹枝に纏絡することが出来る。前肢は栗鼠の如く、食物を攫みて、之を口に運ぶのに用ゆる。その食物は、幼芽、樹葉の外に、昆蟲、爬蟲類、小鳥及び鳥卵である。牝は一産に一二子を分娩し、子が袋を去るべく、充分に大きく成長するときは、母親は之を背上に乗せて運び回るのである。この獸の肉は、食用に供せられて居る。

〔二〕 袋鼯鼠の類 (*Flying Phalanger*)

この類は、前種と甚だよく似たれども、腕關節より踝に至るまで、横腹に沿ふて、皮膚

の褶襞が發達せることは、鼯鼠のやうである。そこで鼯鼠の如く、樹より樹に、空中を飛び移ることが出来る。この際、尾を使用して、體の平均を取り、又舵の如くに、方向を取る。ここが出来る。これには次の種類がある。

〔一〕 大袋鼯鼠(假稱) (*Treat Flying Phalanger*) *Petauroides volans*

體長は一尺六七寸で、尾は長い。毛色は黒褐色にして、體の下面は白く、毛は柔軟にして絹狀である。濠州大陸に産する。

〔二〕 栗鼠狀袋鼯鼠 (*Squirrel-like Phalanger*) *Petaurus scirius*, Shaw.

英に又「スクアレルライク・フライング・オポッサム」(*Squirrel-like Flying Opossum*) といひ、又「シュガー・スクアレル」(*Sugar Squirrel*) (砂糖栗鼠之義) 又「スクアレル・オポッサム」(*Squirrel Opossum*) といふ。東部濠太利亞に廣く分布する。頭と胴と尾との長さは、一尺五寸乃至一尺六寸七八分もあり、その中で、尾は半分以上を占めて居る。毛色は美麗にして、背部は灰色で、體下は白色である。又鼻端より背に沿ふて、尾根に至るまで、一本の狭き暗色條が、連亘して居る。この類は、他の獸と同じく、夜出で、徘徊する。

〔三〕 小形袋鼯鼠 (*Pigmy Flying Phalanger*) *Petaurus pygmaeus*, Desm.

體長は僅に四寸二分で、尾は一寸七分許である。斯くも小形なるも、他の有袋類の如

くに、牝は袋を有し、その中に四個の乳房を具へ子を養育するのである。

〔三〕 コアラ (Koala) *Phascogaleus cinereus*, Goldf.



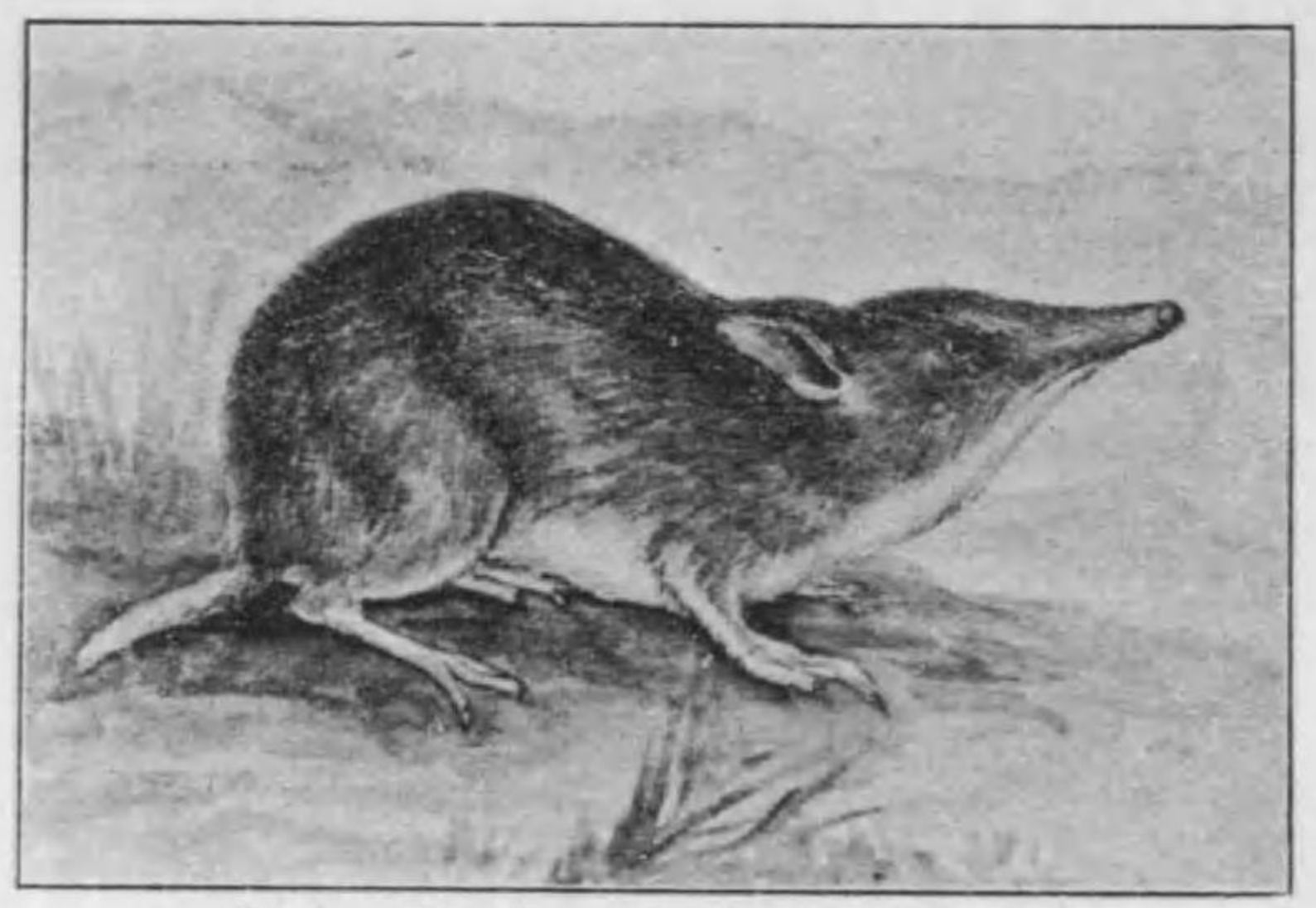
ラアコ 圖一十八百第 (After Vogt and Specht.)

英にまた「ネーティブ・ベア」(Native Bear) 又「オーストラリアン・ベア」(Australian Bear) といふ、體は重々しく造られ頭は短く太く、耳は總狀をなして大きく、毛は柔軟にして密生し、且つ灰色をなす。尾は全くない。體長は約二尺乃至二尺六七寸に達する。横腹には皮膜なく、爪は鋭く尖つて居る。日中は喬木上に、體を捲縮して隠くれ、夜出で、徘徊し、草を食する。この獸は、東部濠太利亞に産するのである。

第四亞目 食肉有袋類 (Raptacia)

〔一〕 袋狸科 (Peramelidae)

この科のものは英に「バンディコット」(Bandicoot) と稱する。口吻は長くして豚の如く、



種一狸袋 圖二十八百第 (Perameles gunnii)

がある。

前肢の第一及び第五指は短く、且つ爪なければ、第二第三第四指は長くして、曲爪を有し、以つて穴を掘るに適するのである。後肢の拇趾は短く、且つ爪を有せざれども、第二第三趾は扁平にして、燃れたる爪を有する。又第四趾は長く、且つ有力にして、丈夫なる尖れる爪を有する。而して第五趾も、第四趾と同様であるが、唯それよりも、少しく小さい。尾は漸々尖りて、これには、短毛を生ずるか、若くは殆んど裸出して居る。常に地上に棲息し、地を穿ちて穴を掘るのである。その性雜食にして、蠕蟲及び昆蟲を食すれども、また植物質をも食ひ、耕地、花園に來りて、地を掘り、播きたる種子の大量を食ふのみならず、栽培植物の根、鱗莖を食ひ、損害を與ふるのである。この科のものは、濠太利亞大陸、タスマニアに産し、又新ギネアの或る地方に産し、約八九種

〔一〕 袋狸 (丘博士命名) *Perameles nasuta*, Geoffroy.

内外普通動物誌

英に「ロング・ノーズ・バンデクター」(Long-nosed Bandicoot) といふ。體軀は細く、毛は粗糙にして、稍刺状を呈する。口吻は甚だ長く、且つ細い。毛色は、概ね背部は曇りたる阿列布色を帯びたる褐色にして、腹面は白い。耳は狭長にして、且つ尖つて居る。四肢の内側は白く、蹠は粒状を呈し、その後方は、黒き薄毛を生ずれども、前方は白く、且つ裸である。尾は中脬の長さにして、その背面は褐色なれども、下面は青白色である。頭と胴との長さは、一尺三寸許で、尾の長さは四寸二分許である。東部濠太利亞に産する。

〔二〕 金色袋狸 (假稱) *Perameles aurata*, Ramsay.

英に「ゴールド・デン・バンデクター」(Golden Bandicoot) といふ。體は小さく、體長は七寸許である。背部の毛は、金色を帯びたる褐色にして、黒の束線を有し、體下は白色である。濠太利亞の北西部に産する。

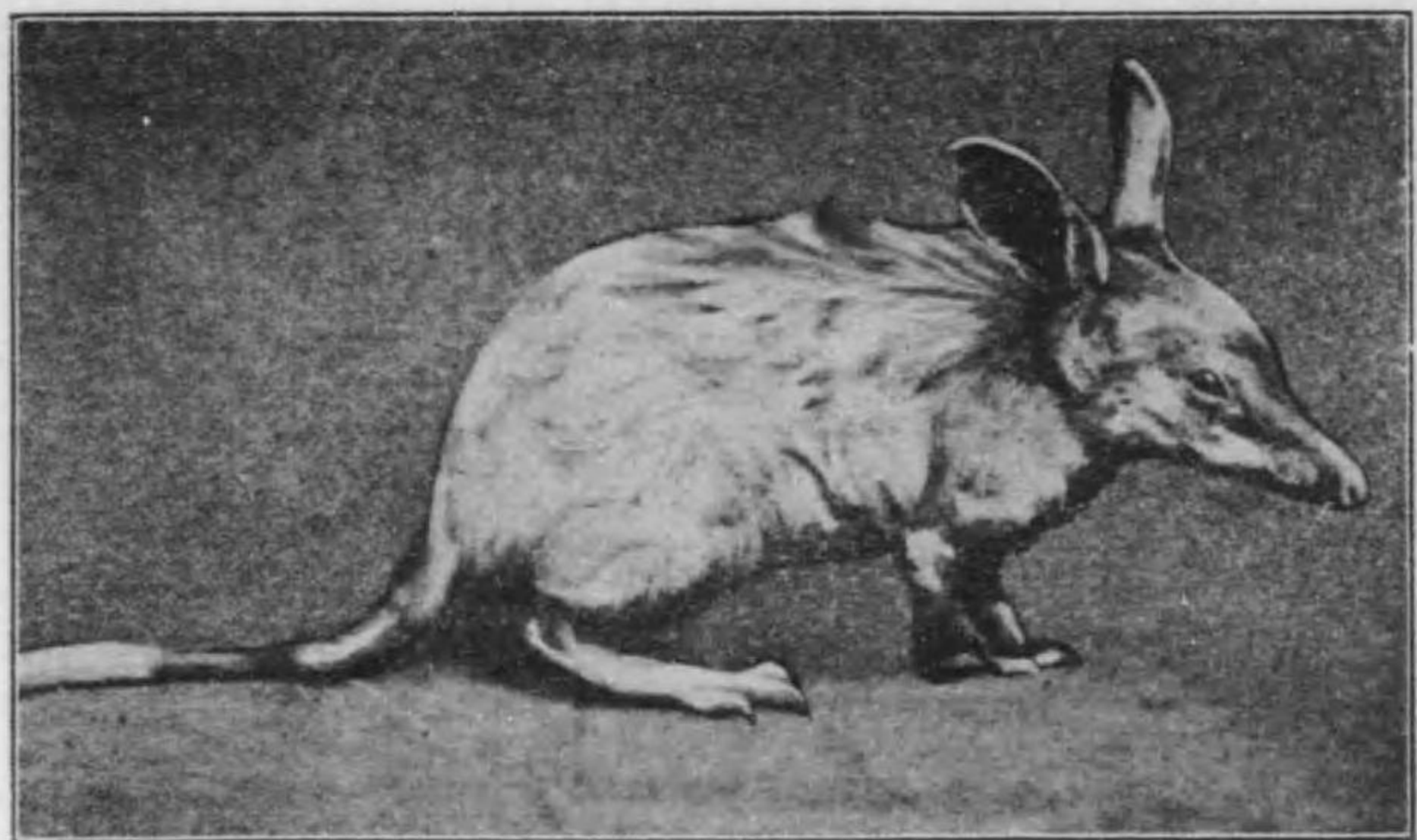
〔三〕 兎耳袋狸 (假稱) *Peragale lagotis*

英に「ラビット・イーアド・バンデクター」(Rabbit-eared Bandicoot) といふ。又殖民地の人々に因りて「ネーチー・ブラビット」(Native Rabbit) といはれて居る。大さは、飼兎位あつて、行歩も亦兎の如く迅速である。然しながら、後肢が前肢より長きことは、「カンガル」の如しである。口吻は狭く、且つ非常に伸長する。耳は甚だ大きく長く、且つ尖つて居る。尾も

亦長く、その上半分は、背面に於て長毛を生ずる。毛は柔軟にして、絹状をなし、背部の色は、淡灰色、體の側面は褐色にして、腹面は白色である。牝の袋は、前方に開いて居る。西部濠太利亞に産し、地中に穴居するのである。

〔一〕 袋鼯鼠科 (*Dasyuridae*)

齒式は、門齒₃、犬齒₁、前臼齒₂、後臼齒₂は無數にして、その數は種屬に因つて變化する。門齒は小さく、犬齒はよく發達し、臼齒には、尖れる突起を有する。前肢には五個の長さ不同の指を有し、これには皆爪を有する。後肢の拇趾は爪なく、概して退縮すれども、時には、全く之を缺くものがある。その他の四趾は、よく發達して、長さは略等しく、皆爪を有する。胃は單純にして、盲腸を有しない。袋を有すれば、體の前方か、若くは下方に開いて居るが、時として、退化せるものもあり、又稀には發育不全のものもある。濠太利亞、タスマニア、及び新ギネアの南部、其他附近の島嶼に産し、



第百八十三圖 兎耳袋狸 (After Protheroe)

大多数の種は、全く食肉をなせども、小形の種類は、主として昆蟲を食するのである。

〔一〕 袋食蟻獸 (正博士命名) *Myrmecobius fasciatus*, Waterhouse.



第百八十四圖 袋食蟻獸 (From Gould.)

英に「マースビアル・アントイーター」(Marsupial Ant-eater) といふ。毛は短く粗糙にして密生し、毛色は普通、背面部は輝ける赤褐色にして、頭部に於ては、灰色を呈し、體の後部は暗色を帯び、これに白色の横帯がある。而して左右の眼上には、一白條がある。體の下面は、歴然たる青白味を帯びたる黄色である。耳は尖りて、密生せる短毛を有し、その後方は赤褐色にして、内側は黄色を帯びて居る。爪は暗色を帯べる角色である。尾には、その上部には長毛、下部には短毛を生じ、前者は灰黄色と黒色とを帯び、後者は赤褐色である。舌は長く圓筒状をなし、伸出することが出来る。下唇は尖り、齒を超へて突出する。頭と胴との長さは、約八寸四分で、尾は六寸近くある。濠太利亞の西部

と南部とに産し、常に砂地に棲息して、蟻を食ふのである。

〔二〕 フアスコロゲール *Phascologale*

この属のものは、皆小形の有袋類にして、大なるものにも、大きが普通の鼠より大きいものはない。形状は細瘦優美にして、體には斑紋を有しない。齒式は $I. 1. 0. 1. P. 3. M. 3. 1. 5$ である。齒は寧ろ食肉類の齒に似たるよりは、食蟲類の方に似て居る。鼻端は尖り、耳は中庸大にして圓く、殆んど裸出する。四肢は幅廣く且つ短く、前肢には五指を有し、指の長さは稍不等にして、少しく曲れる。尖爪を有する。後肢の拇趾は短く、且つ爪を缺けども、他の四趾には、前指に於けると同様の爪を有する。趾は裸出し、且つ粒状をなし、五個の横條ある硬結部を有する。而して牝の袋は發育不全である。濠太利亞大陸、新ギネア、及び附近の島嶼に産し、血に渴せる大膽なる食肉有袋類である。今左に一二の種類を記述する。

〔一〕 小形叢尾袋鼠 (Lesser Brush-tailed Pouched Mouse) *Phascologale calura*, Gould.

濠太利亞の南部と西部とに産し、體長は四寸余、尾の長さは五寸許である。

〔二〕 黄肢袋鼠 (Yellow-footed Pouched Mouse) *Phascologale flavipes*, Waterhouse

新ギネアより東部濠太利亞を通りて、南部濠太利亞に分布する種類である。

(三) 袋鼬鼠 *Dasyurus*

體には斑紋を有する。體軀は肥大なるか若くは瘦せて居つて、全形は優美である。耳は狭長にして、尾は長く、これには濃き毛を密生する。齒式は $2.1, 1.1, 2.1, 3.1, 3.1, 1.1$ である。四肢の趾の長さは、幾分か不等にして、これには鋭るごき曲爪を有し、拇趾は甚だ小なるか若くは之を缺いて居る。蹠は粒状をなし、殆んど裸出するものあり、また全く裸するものもある。而して歩行するときは、全蹠を以つて地を踏むのである。牝の袋は垂直に下方に開き、乳房は六個若くは八個である。濠太利亞及びタスマニアに産し、日中は岩石間の穴か若くは樹木の空洞内に隠れ、夜出で、徘徊し、小獸、鳥類等を捕へて食ひ、その習性は鼬鼠科のものによく似て居る。殖民地の人は「ネーチープ、キャット」(Native Cat) と稱する。これには、次の如き種類がある。

- (一) 北濠太利亞袋鼬鼠 (North Australian Native Cat) *Dasyurus hallucatus*, Gould
- (二) 黒尾袋鼬鼠 (Black-tailed Native Cat) *Dasyurus geoffroyi*, Gould.

體長は九寸餘で、尾の長さは六寸七分許である。北部濠太利亞に産する。

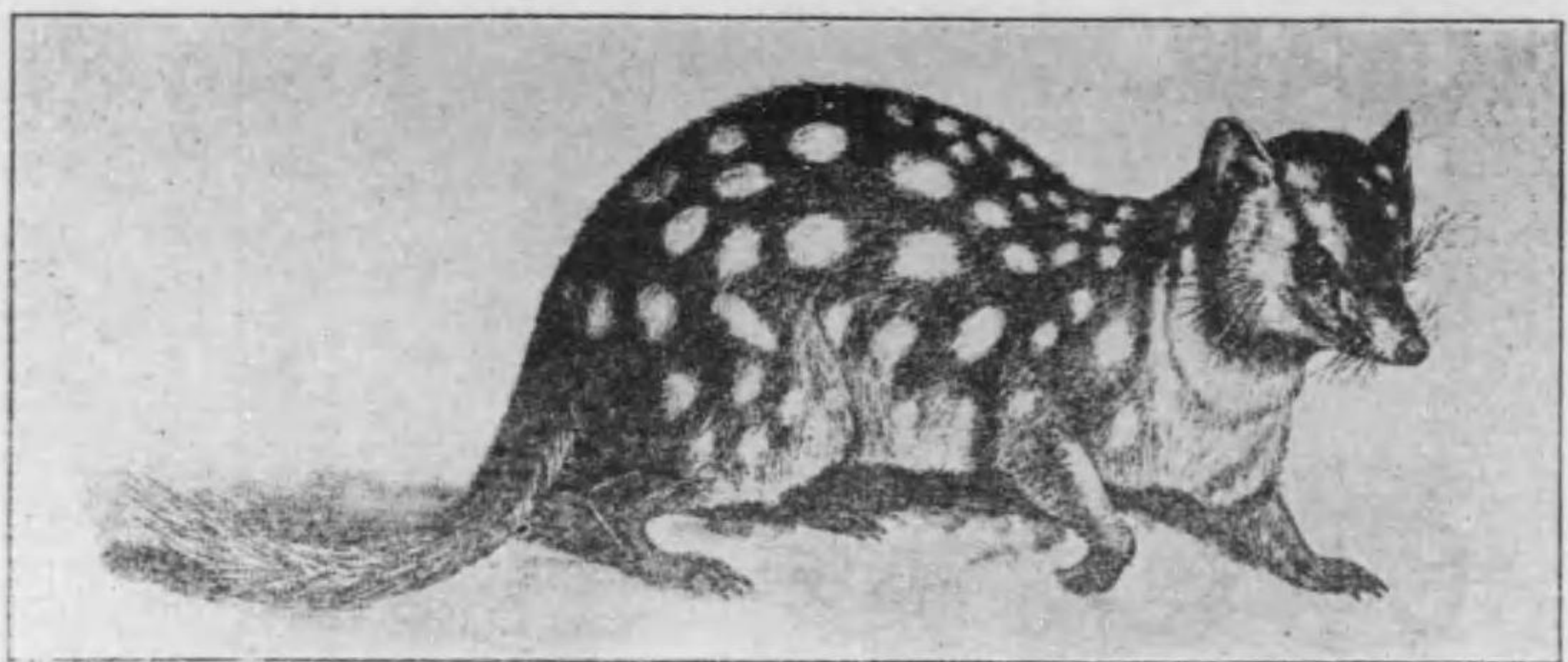
尾は長く、毛は寧ろ繁つて居る。尾の基部に寄れる上半部及び下面の四分の一は、白色の縁邊を有する褐色なれども、他の部分は黒い。南部濠太利亞に産するのである。

- (三) 袋鼬鼠 (Common Native Cat) *Dasyurus viverrinus*, Shaw.

體の大きさは、中庸大であつて、形状は瘦せて居る。毛は厚く且つ柔軟である。普通の毛色は、背面も腹面も、共に淡灰色なるか若くは黒色にして、これに白色の斑紋を有する。耳は大きく、肢には拇趾がない。尾は毛を叢生し、その先端は白色である。牝は六個の乳房を有する。體長は一尺五寸。尾の長さは一尺である。ニューサウスウエールズの東部なるウラターシエツト、ビクトリア、南濠太利亞、タスマニアに産する。

- (四) 斑紋袋鼬鼠 (Spotted Dasyure) *Dasyurus maculatus*

體の大きさは、普通の猫位である。毛色は概してチョコレート色を帯びたる褐色にして、體の全面に亘りて、多くの

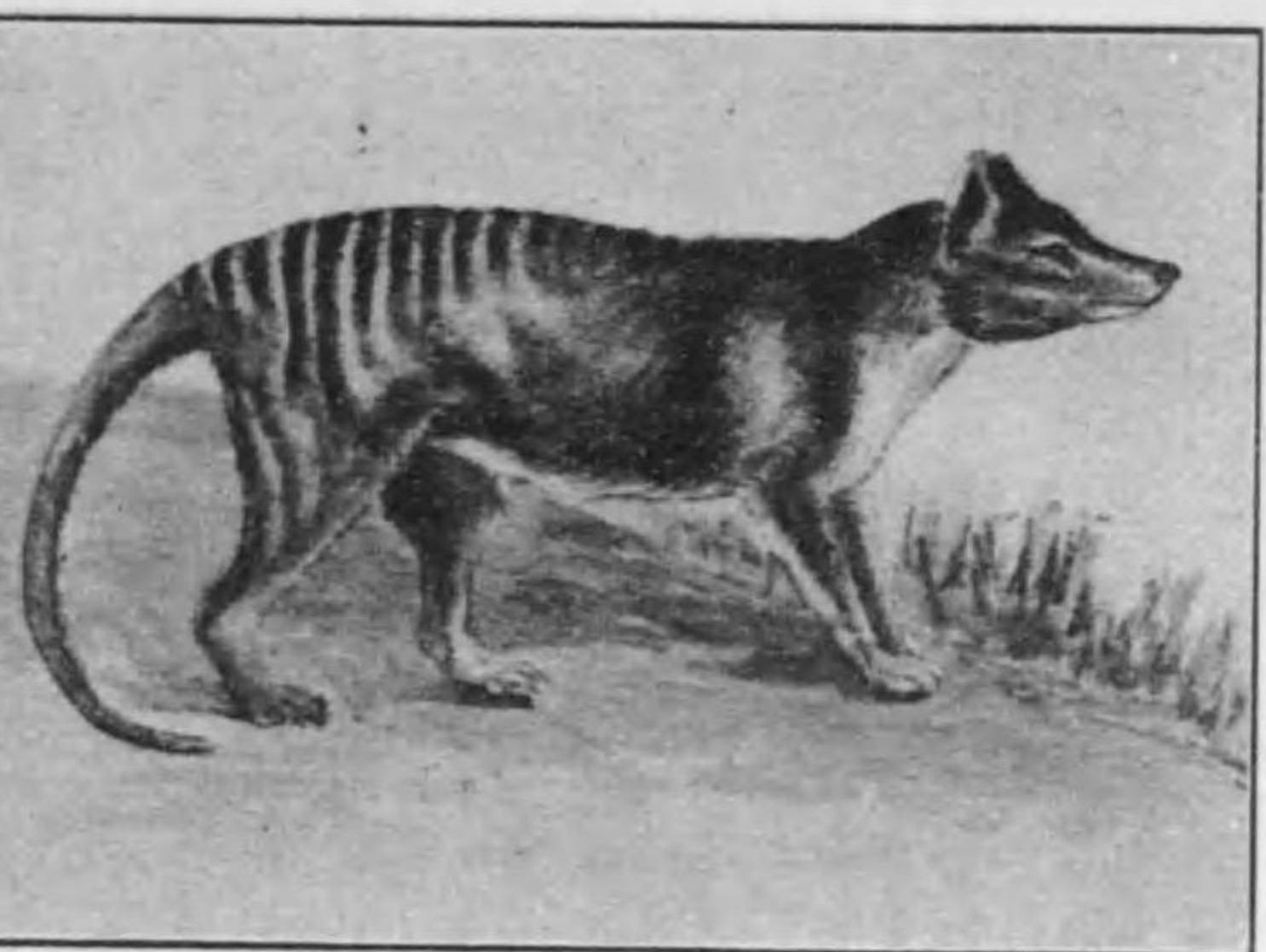


第百八十五圖 袋鼬鼠 (After Vogt and Specht.)

白色の斑紋を散らして居る。タスマニア及び南濠太刺利亞に産する。

〔五〕 袋獾 (假稱) *Dasyurus ursinus*

英に「タスマニアン・デビル」(Tasmanian Devil) といはる。頭は割合に大きく幅廣く、吻端は鈍く、體軀は肥大にして、外觀獾に似て居て、その大きさも亦獾位である。毛色は主に濃黒色にして、胸を横りて、白色の一條を有し、これは殆んど肩の所まで、擴がつて居る場合も多い。而して時には、横腹にも白毛を疎生することがある。タスマニアに産し、日中は岩石の罅隙、若くは自身穿ちたる穴中に潜伏し、夜出で、羊其他の獸を襲ふて食ひ、性質頗る兇暴である。



第百八十六圖 袋 鼠 (ゴドール氏より略寫)

〔四〕 袋狼又タスマニア狼
Thylacinus cynocephalus, Harris.

英に「テイラシン」(Thylacine) 又「タスマニアアン・ウルフ」(Tasmanian Wolf) といふ。袋鼬鼠科中の最大なるものであつて、尾を含める體の全長は、約四尺位で、この中尾は一尺三

寸位である。即ち「チアツカル」位の大きさである。尤も時には、體の全長が、五尺五寸乃至六尺に達するものがある。毛は短く密生し、且つ捲縮する。毛色は背部が灰褐色にして、少しく黄色味若くは黄褐色を帯び、腹面は稍淡色である。眼の周圍、及び耳の縁邊と、基部とは、殆んど白い。脊の後部には、約十六本の黒褐色の條を有し、これらは臀部に至りて降下して、膝の邊にまで及んで居る。蹠は裸出し、粗糙の粒狀をなし、分明なる褥狀部がない。尾はその上下面に飾毛を有し、その先端は黒味を帯びて居る。牝は後方に開ける袋を有すれども、袋骨を有しない。

以前はタスマニアに於て、牧羊に非常なる掠奪を與へたるを以て、殖民地の人々に因りて、大に狩り倒され、今は人跡離れたる山地に見るのみである。その速力は、こと更に迅速なることはなけれども、小形のカンガルを捕へ、又鴨嘴獸、ハリムグラ等も、食ふのである。

第五亞目 足手有袋類 (Petaimania)

〔一〕 袋鼠科 (Didelphidae)

亞米利加に産する有袋類にして、その外觀と習性とは、非常によく「アラランガー」に似て居る。

〔一〕 袋鼠又子守鼠 *Didelphys virginiana*, Shaw.

英に「バーヂニアン・オポッサム」(*Virginian Opossum*)といひ、亞米利加合衆國の南部に産する。體長は約三尺にして、その中一尺は尾である。されば全體の大きさは、肥つた猫位である。毛は柔軟、灰白色にして、これに黄色を帯びて居る。幼鳥、鳥卵、幼兎、野鼠、爬蟲類、昆蟲等を食する。又家禽の卵を掠めるのである。



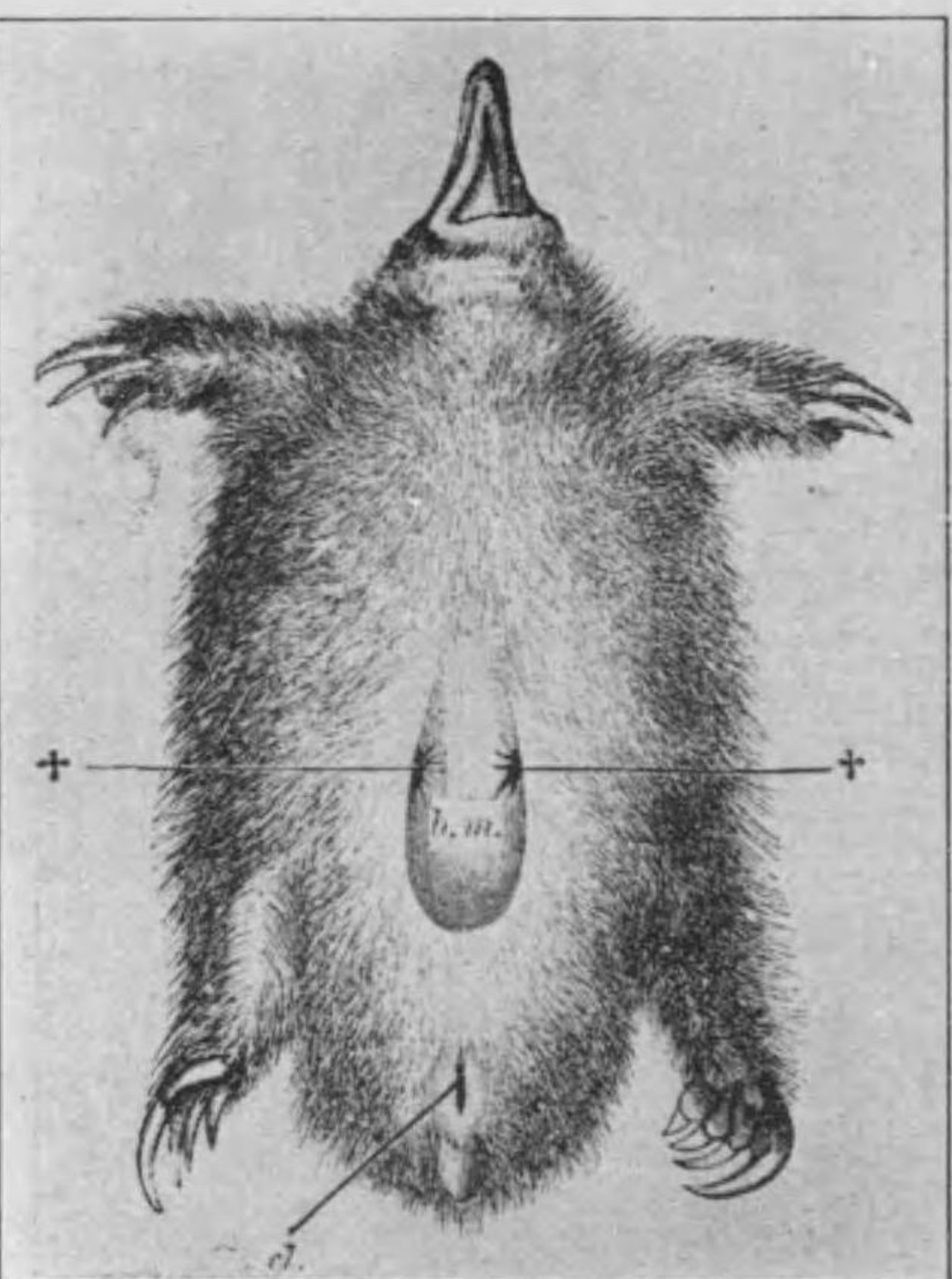
鼠袋 圖七十八百第 (After Vogt and Specht.)

常に倒木若くは樹木の洞穴や、樹根の下に巢を造り、一産に十二疋若くはそれ以上の子を産む。子は生まるゝや、約四「グレイン」(一「インチ」は我が〇〇一七)の體重があつて、全長は一時を三疋である。超ゆることはない。母親の袋内にて養はれ、一週間の終りには、三十「グレイン」の重さに成長する。而して生れて五週目には、母の脊に上りて、自分の尾で、母親の尾に纏絡し、小爪を以つて脊に纏り付くのである。

〔二〕 スリナム袋鼠

Didelphys dorsigerus, L.

英に「メリアンス・オポッサム・オブ・スリナム」(*Merian's Opossum of Surinam*)といふ。體長は、僅に五寸位で、形は鼠に似て居る。牝の袋は僅に皮膚の褶襞であるに過ぎない。それ



な面腹の(牝)ラガムリハ 圖八十八百第 (毛の叢二るあに壁側の袋) ++ 圖示示 (After W. Haackl.) (腔泄排) cl(袋).m.b

故に、生れたる子は、早くより母親の背の上に纏絡して、休息するのである。亞米利加の土人は、この肉を食用に供するといふことである。

〔三〕 水袋鼠 (*Water Opossum*) 又蟹喰袋鼠 (*Crab-eating Opossum*) *Didelphys cancrivora*, Gm.

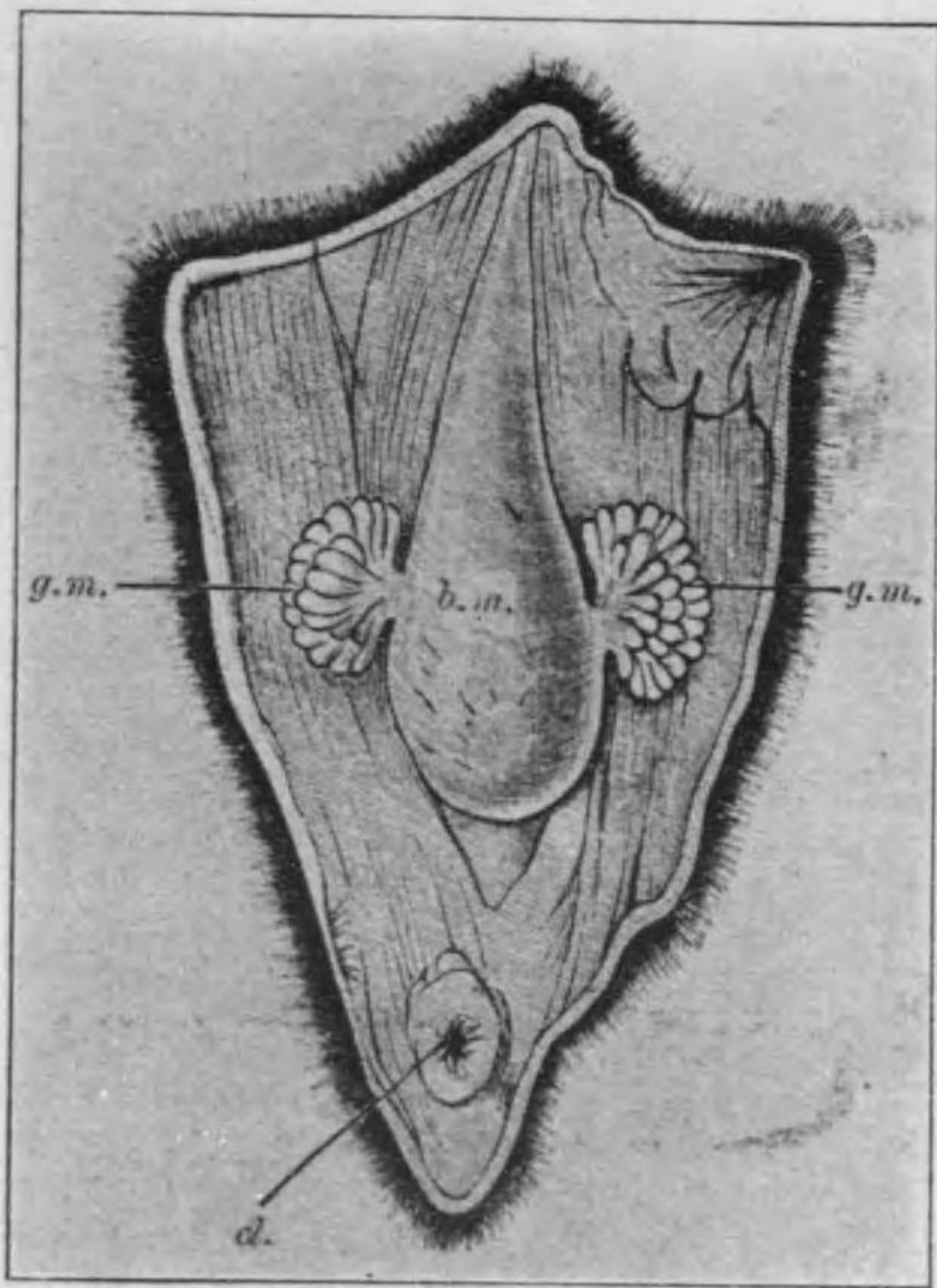
ブラジル及びグアテマラ間に

位する地方の海岸に産する。後肢に蹠を有し、水中に入りて、魚類、甲殼類、其他小形の水生動物を食するのである。

第十二目 單孔類又一穴類 (*Monotremata*)

内外普通動物誌

この類は、有袋類の如く、胎盤を有することなく、卵生にして、且つ鳥類の如く、輸尿管と生殖管とは、直腸の末端に開口して、排泄腔を形成する。これ單孔類の名が起つた所以である。鳥喙骨が完全に發育し、又骨盤の前面には、二個の袋骨を有し、牝にありては、



第九十八圖 哺乳類の腹面(牝)ラケムリハ 圖示する部の袋るあ (After W. Haackl.) (腔泄排) cl (腺

腹面の皮膚が、嚢状をなし、卵より孵化せる幼獣は、嚢内に於て哺乳せらるゝのである。乳腺は直ちに嚢内の皮面に開口し、乳房を形成することはない。口には肉様の唇なくして、鳥喙状をなし、真正の齒なく、之に代ふるに、角質板を有する。目は小さく、瞬膜を有し、耳には耳殻がない。四肢は短く、五趾を有し、これには強壯なる爪を具へ、牡は後肢に距を有する。胃は單一にして、半球状をなし、腸は廻盲嚢を有せざるを以つて、小腸と大腸との區別が、判然として居ない。總べて濠太利亞大陸、及び附近の島嶼に産するのである。

(一) 鴨嘴獸科 (Ornithorhynchidae)

大脳半球は平滑である。前顎骨と下顎骨とは、前方に擴張して、鴨の嘴に似たる角質の嘴を支へ、その上には、頗る觸覺に富める皮膚を有する。また下顎の側縁には、細き横隆起が、平行して存在することも、鴨の嘴とよく似て居る。口腔内には齒を有せざれども、兩顎の左右兩側には、二對の角質突起を有し、齒の代用をなして居る。

(一) 鴨嘴獸 Ornithorhynchus paradoxus, Blumb.

英に「ダックビル」(Duckbill) 又「ウラター・モール」(Water Mole) といひ、又廣く「プラチイプス」(Platypus) と稱せらる。濠太利亞のクインズランドの南方より、南タスマニアの淡水中に棲息する。充分に成長せる牡にては、嘴の尖端より尾端に至るまでの長さは、一尺五寸乃至一尺六七寸に達する。牝は通例牡よりも少しく小さいのである。眼は小さく、耳殻はない。體は卵形にして、稍扁平たく、全面には短毛を密生し、其毛皮は鼯鼠に似て居つて、且つ弛るく體軀に着いて居る。毛色は背部暗褐色にして、下面は稍淡い。四肢は短けれども、強壯にして、共に五趾を具へ、これには鉤爪ありて、穴を掘るに使用せらるゝのである。背つて一疋の鴨嘴獸が、砂礫多き堅き土壤中に、十分時内に、二尺の長さ穴を穿つたことがあつた。趾間には蹠を有し、後肢にある蹠は、爪の基部にあれども、前肢



四七〇

(From Popul. Scie.) 巢のそごしハノモカ 圖十九百第

にある蹠は、爪端を超へて、著るしく擴張し、主として游泳に使用するのである。尾は短く、扁平にして幅廣く、これには粗毛を生じ、游泳の際舵として使用する。ある而して陸上に出て、歩行する際には、蹠をば蹠の後方に向け重ねて、地に妨げらるゝを防ぐのである。鴨の嘴に似たる嘴は、鴨の如く使用して、泥中にありて、軟體動物、水棲昆蟲、蠕蟲、甲殼類等を探るに用ひらるゝのである。而してその基部には、漏斗状の楯を有して、眼を保護するやうになつて居る。

牡の踵部には、鋭く曲れる、長さ八分許ある距がある。この距の内部には、細管が貫通して、その尖端にある縦孔より、外界に開き、一種の液汁を分泌する。この作用は、交尾の際、何にかの刺激をば、牝に與ふるものであらうといふ説もある。而して牝では、その幼時のみ、發育せざる距を有すれども、それは漸次消失して、充分成長せるものにては、痕跡を止めないのである。

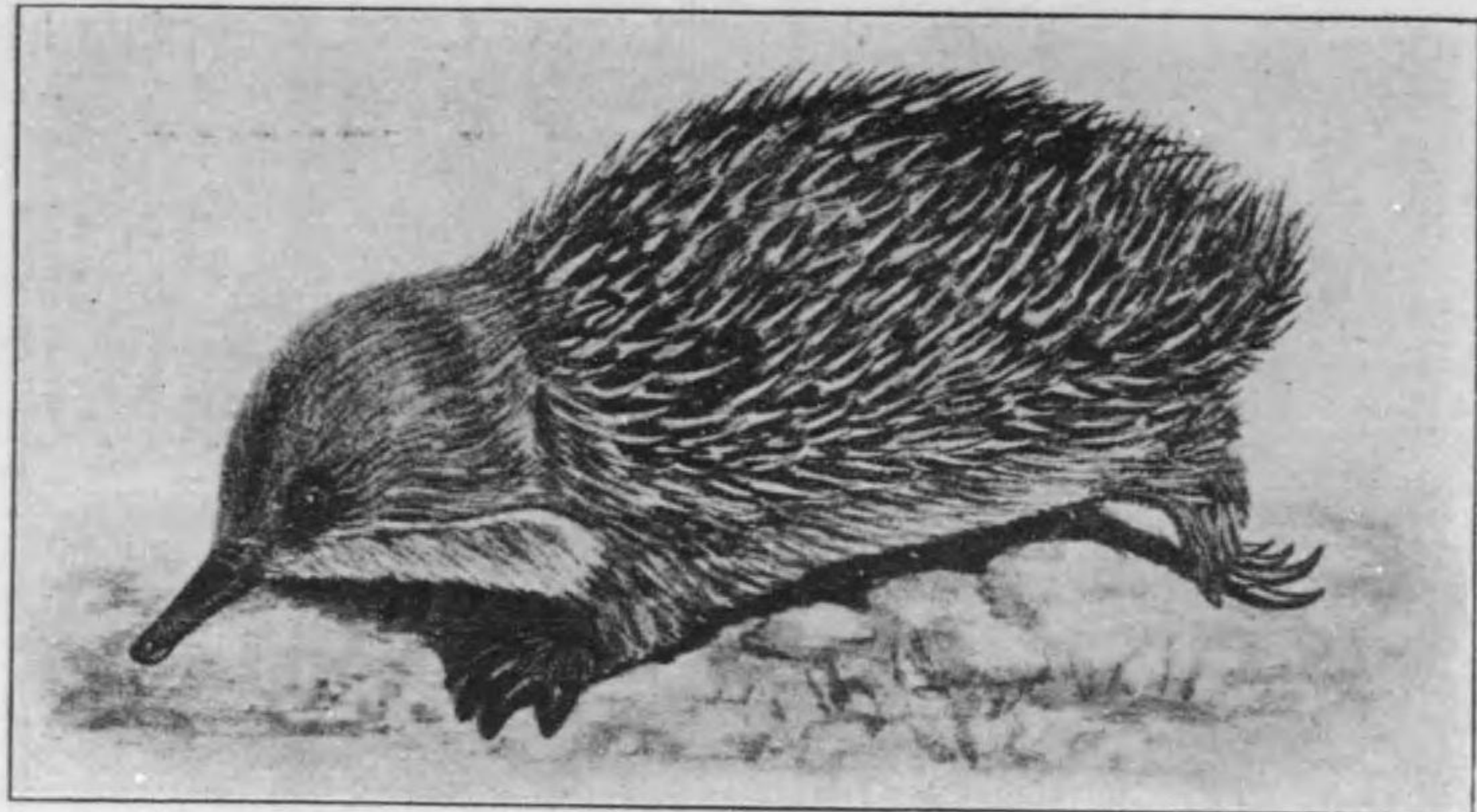
鴨嘴獸は、常に湖水又は河川の沿岸に穴を穿ちて棲息し、その中に牝牡同棲する。入口は常に二つありて、一は水中に開き、一つは陸上の草叢中に隠れて居る。道路は斜に上方に向ひ、時には五丈以上もあるものがある。その最終端には、廣い室があり、乾燥せる雜草を集め、束狀に纏めて敷いてある。牝は、こゝに二卵、時には三卵、若くは四卵

を産む卵殻は白く、形状は橢圓形にして、縦徑六分、横徑四分位ある。産卵したる後には、母親は鳥が抱卵すると同様に、之を温め、いよ／＼胚が發育し、幼兒として生れんとする時には、その嘴を以て殻を破り出るのである。生れたる兒は盲目にして、體は裸出し、誠に哀れなる有様なれども、その嘴は甚だ短く、その縁邊は、全く肉質にして、觸覺に富めるを以て、容易に母の袋内にある乳腺より、乳汁を飲むに適するのである。

鴨嘴獸はその性質甚だ怯懦にして、戒心深く、夜出て、數多群をなして、水中に游泳する。而して物に驚かば、直ちに水中に潜み匿れるのである。

(二) はりもぐら科 (Echidnidae)

大脳半球は大きく、且つ其表面には、回轉を有する。顔面頭蓋は長く、嘴狀に伸出し、其先端に於て鼻孔を開き、其下面には、小なる口を開いて居る。口蓋と舌とは、棘を有すれども、口には齒がない。舌は甚だ長くして、蠕蟲狀をなし、よく口外に突出することが出来る。之をば蟻及び白蟻の巢中に挿入し、是等を附着させて、食ふのである。四肢は短く、各肢には五趾を有する。趾には蹠を有せざれども、その代りに、強壯なる爪を有し、地を搔撥して、穴を穿つに適する。されば、一たび危険に遭遇する時は、地を掘り、その中に隠れ込むのである。その迅速なることは、見て居る内に、彼れの體軀が、土中に沈み込む



After Vogt and Specht.) ラグムリハ 圖一十九百第

かと思はるゝ位である。一たび歩く時は、後肢の趾の先端は、外後方に向ひて居る。尾は甚だ短く、骨盤と大腿骨との嵌入せる孔、即ち髀臼は、鳥類に見るが如く、大きいのである。牡の後肢の踵かかとにある距かかとは、鴨嘴獸のよりは、非常に小さい。この科のものは、體の背面には、蝟はりもぐらの如き、鋭尖なる強壯の棘を密生し、殊に尾の附近にある毛は、總狀に集つて居る。一たび敵に攻撃せらるゝときは、球狀に捲縮し、棘毛を直立させて、敵を防ぐのである。

牝の腹部にある袋は、唯單に皮膚の褶襞に過ぎないで、一産に産む卵數は一個である。卵は白色革質の卵殻を有するが、牝は産卵するや否や、之をば袋中に入れて、孵化せしめるのである。生まれたる子は、七八週間も、この袋内に止り、乳腺より分泌する乳汁を以つて、育てられる。其體長は約三寸三

四分位に成育するのである。この科のものは濠太利亞、タスマニア及び新ギネアに産するのである。

〔一〕 はりもぐら *Echidna aculeata*

英に「エキドナ」(*Echidna*)又「ボルキュバイン・アント・イーター」(*Porcupine Ant-Eater*)と稱し、通稱をば「ネチイプ・ボルキュバイン」(*Native Porcupine*)又「ネチイプ・ベツジホッグ」(*Native Hedgehog*)と稱する。最も普通の種類にして、濠太利亞及びタスマニアの山地に棲息し、砂中に穴居し、或は岩石の罅隙に潜伏するのである。

猪鳴嘴獸及びハリモグラの卵生なることを確めたるは、英人カルドウェル氏(*Cardwell*)である。氏は千八百八十四年に、恰もカナダ州モントリオル府に開會中の、大英國理學獎勵會に向つて、これが報告をば、電報にて知らせたるに依り、大に學者の注意を喚起したものである。

第二綱 鳥類 (*Aves*)

鳥類は、温血、卵生の脊椎動物にして、體面には、羽毛を生じ、前肢は翼となりて、二足にて歩行する動物である。體腔には横隔膜なきを以つて、胸腔と腹腔との區別はない。鳥類の體は、頭、頸、胴及び肢の四部分に分つことを得るのである。頭には嘴、眼、口、耳、鼻を有する。鳥類の前肢は、翼となりて、運動一方の作用を掌るを以て、嘴は手の代用を務め、食物を口に運ぶ用をする。故に鳥の食物の異なるに従ひ、自然に、これが捕捉に適するやうに、種屬に因つて、嘴の形狀、構造を異にするのである。例へば燕の如く、細長にして、先端の尖れる嘴を有するものは、昆蟲類を食ふに適し、雀の如く、短い強固な圓錐形の嘴を有するものは、種子を啄むに適する。また鷹鷲の如く、強壯にして鈎曲せる嘴を有するものは、肉を裂くに適する。また交喙の如く、交叉せる嘴を有するものは、松類の果實の殻を破り得ること、恰も剪刀で、物を切るが如しである。また雁、鴨の類の嘴は、その縁邊に櫛齒狀の缺刻を有し、以つて泥水中より得たる食物をば、水より漉し取るに適するのである。また啄木鳥の嘴は、硬直にして、鑿狀をなし、以つて樹幹を叩き、その中に棲める木蠹蟲、象蟲、天牛の幼蟲の有無を察し、幹に孔を穿つに適する。また篋鳴の有する篋狀

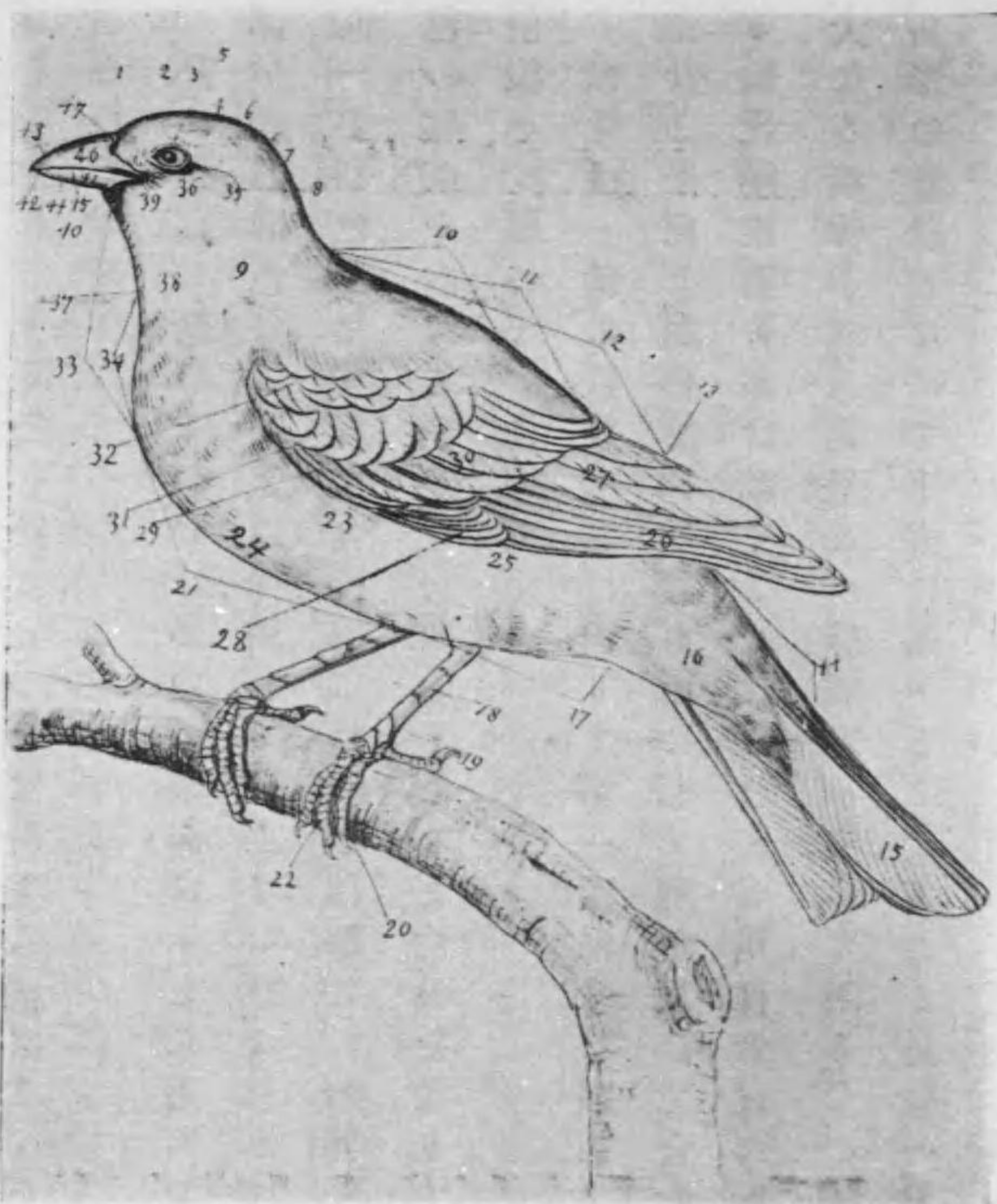
の嘴は、毛拔けぬきに似たる作用をする。如此、一々擧げ來るときは、殆んど際限なしと雖も、之を要するに、鳥の嘴は、その攝取する食物の種類及び食物を取る方法とに因りて、大に形状と構造とを異にする。之を吾人の身邊にある日常の器具に譬ふれば、挺こ、毛拔けぬき、鋏はさみ、鋸のこぎり、小刀かみと、夫々同様なる作用を營むのである。以上の外、鸚鵡あひび類の如く、嘴を用ひて、樹枝を握りて、攀緣するもあり、また嘴をば争闘する武器として、使用するものがある。

嘴の諸部には、次の如き名稱があつて、鳥の分類に必要である。

- 〔一〕峰線かみせ 又嘴峰 とは、上嘴の先端より、その基脚の羽毛の生際はぎに至るまでの、中央線を云ふ。
- 〔二〕底線せこせ とは、下嘴の先端より、下顎骨の相會して、なせる點までをいふ。
- 〔三〕會合線 とは、上下の嘴、相會してなせる横線をいふ。
- 〔四〕口角 とは、會合線の基部をいふ。

鷹鴉たかやくらの類にては、嘴の根本に於てのみ、軟皮を被る。之を蠟膜ろうまくといふ。而して鼻孔は、この膜の在る所に開いて居る。海燕うみづほ、信天翁あほうの類にては、鼻孔は管状をなして突出すれども、其他の鳥類にては、鼻孔は圓形、若くは橢圓形をなし、また嘴に沿ふて、横に長く開在

するものもある。



鳥の外形の圖

鳥の外う部

- (一) 額 (二) 眼前 (三) 眉 (四) 頭頂
- (五) 眼 (六) 後頭 (七) 頸背 (八) 頸部
- (九) 頸の側面 (一〇) 肩 (一一) 背部
- (一二) 體の上部 (一三) 腰 (一四) 上尾筒
- (一五) 尾 (一六) 下尾筒 (一七) 腹部
- (一八) 跗蹠部 (一九) 後趾 (二〇) 外趾
- (二一) 中趾 (二二) 中趾即ち第三趾
- (二三) 體側 (二四) 胸 (二五) 手足
- (二六) 喙 (二七) 臂 (二八) 初列
- (二九) 角 (三〇) 大雨覆 (三一) 中雨覆
- (三二) 小雨覆 (三三) 喉 (三四) 下喉
- (三五) 耳覆羽 (三六) 頰 (三七) 中喉
- (三八) 頰 (三九) 口角 (四〇) 下顎の枝
- (四一) 下顎の側面 (四二) 嘴の先端
- (四三) 峰線 (四四) 底線 (四五) 會合線
- (四六) 上嘴の側面 (四七) 鼻孔

眼は顔の兩側に位し、上下眼瞼の外に、白色の瞬膜を具へ、以つて強き光線の、眼に入

るを調節する。鳥類にては、視覚が最もよく發達して居る。眼の少しく後方には圓形の耳を有すれども、耳殻を缺き、且つ耳は、羽毛に被はるゝを以つて、外部より認むるを得ざるのである。

鳥の頭部に於ける部分は、鳥の外形圖に示した通りである。而して額、頭頂、後頭の三部が、若し同色なるときは、總稱して頭上といひ、これと同様に、眉、耳覆羽類、眼前、眼後が同一の羽色を呈する場合には、これらを總稱して頭側といふ。眉とは、眼の上にある淡色の條斑を有する羽毛をいふのである。また眼を通りて、耳覆羽の上境界をなせる暗色線をば、眼條といふのである。

頭骨は、一個の髁狀突起に因りて、第一頸椎骨と關節する。頸椎は、九乃至二十四個の椎骨より成り、屈伸、俯仰、廻旋自由にして、嘴を用ひて、食物を取るに都合がよいのである。胸椎、腰椎、薦骨部は、動くことなけれども、尾椎骨は、可動的に關節して、其先端には、扁大なる鋤骨を有し、尾翹及び脂肪腺を支へて居る。この鋤骨は、啄木鳥にては、幅廣き多角形の盤狀となりて、下方に擴がることもある。鳥類の胸骨は、甚だよく發達し、その前面の正中線には、龍骨突起を有し、翼を動かす筋肉の附着點となつて居る。肩帶は、肩胛骨、鎖骨、烏喙骨より成る。肩胛骨は、狹長なる骨にして、獨り烏喙骨と關節するのみならず、

その肩峯突起に因りて、鎖骨とも關節する。烏喙骨は大に發達し、下方は胸骨に、上方は肩胛骨及び鎖骨と關節し、胸骨と上膊骨との間にありて、翼を動かすに必要な支柱となつて居る。鎖骨の下端は、左右V字狀に結合し、また胸骨と關節する。而して鎖骨は、鳴鴉、烏亞米利加、駝鳥、駝鳥及び或る鸚鵡の類にありては、大に退化して、其痕跡を認めざる位であるが、概括していふ時は、鎖骨の強さは、飛翔する鳥及び游泳する鳥に於ては、翼の動作と、密接の關係を有するのである。

前肢骨の中で、上膊骨は、體の中軸と平行して、横臥せる長骨である。尺骨は、腕骨を附着せしむる骨にして、橈骨よりは長く、且つ強壯である。腕骨は、唯小形の二骨より成り、一は橈骨の方に、一は尺骨の方に存する。掌骨は、腕骨と相癒着するのみならず、下端は又指骨とも癒合する。而して掌骨の數は、三個ありて、拇指に接せる部分は、頗る短けれども、第二指に接せる部分は、最大且つ強壯である。指骨は、唯拇指と、食指と、中指とを存するのみである。拇指は、一個の指骨より成れども、第二指は、二個の指骨より成立する。

骨盤は、一對の無名骨より成りて、薦骨と密着する。而して耻骨の部分は、細くして體の後方と下方とに向ひ、その腹面は、哺乳類の如く結合することなくして、全く開いて居る。これ飛翔の際、體重を輕減し、飛翔を容易ならしむる爲めである。然れども、駝鳥の

如く、迅速に走るものにては、耻骨は、腹面の中央にて結合すること、哺乳類と全く同一である。

四八〇

後肢骨を検するに、骨盤と關節する所の、一本の大腿骨に次いで、脛骨がある。腓骨は、發育不完全にして、下方は僅に針状となりて、脛骨と密着するに過ぎない。この次には、跗蹠骨と稱する圓筒状の骨がある。この部は、恰も獸の脛部の如く見ゆれども、鳥類の踵は、遙かに地面の上に位し、吾人の膝に當るべき位置にあるのである。跗蹠骨と趾骨とを總稱して足といふ。跗蹠骨の表面にある鱗片は、板状網状若くは粒状をなせるが如く、鳥類の種屬に因つて變化するのである。

鳥足の完全なるものは、四趾を有する。その中で、拇趾は後向し、之を後趾と稱する。然し、鳥の中には往々之を缺くものがある。三趾は多くは前向し、その最も内側に位するものを、内趾又は第二趾と稱し、次なるを中趾、又は第三趾と稱し、最外側なるを、外趾又は第四趾と稱するのである。郭公其他の攀禽類にては、前後に二趾宛が、向ひて居るものである。鳥類の趾の末端には、皆爪を有し、鳥の習性の異なるに従ひて、其形状には異同がある。即ち前向せる三趾が、皆蹠を以て連続するものあり、又、鵝の如くに、前趾と後趾とが、蹠にて連接せるものがある。而して有蹠趾にても、蹠が趾端まで達せずして、唯趾

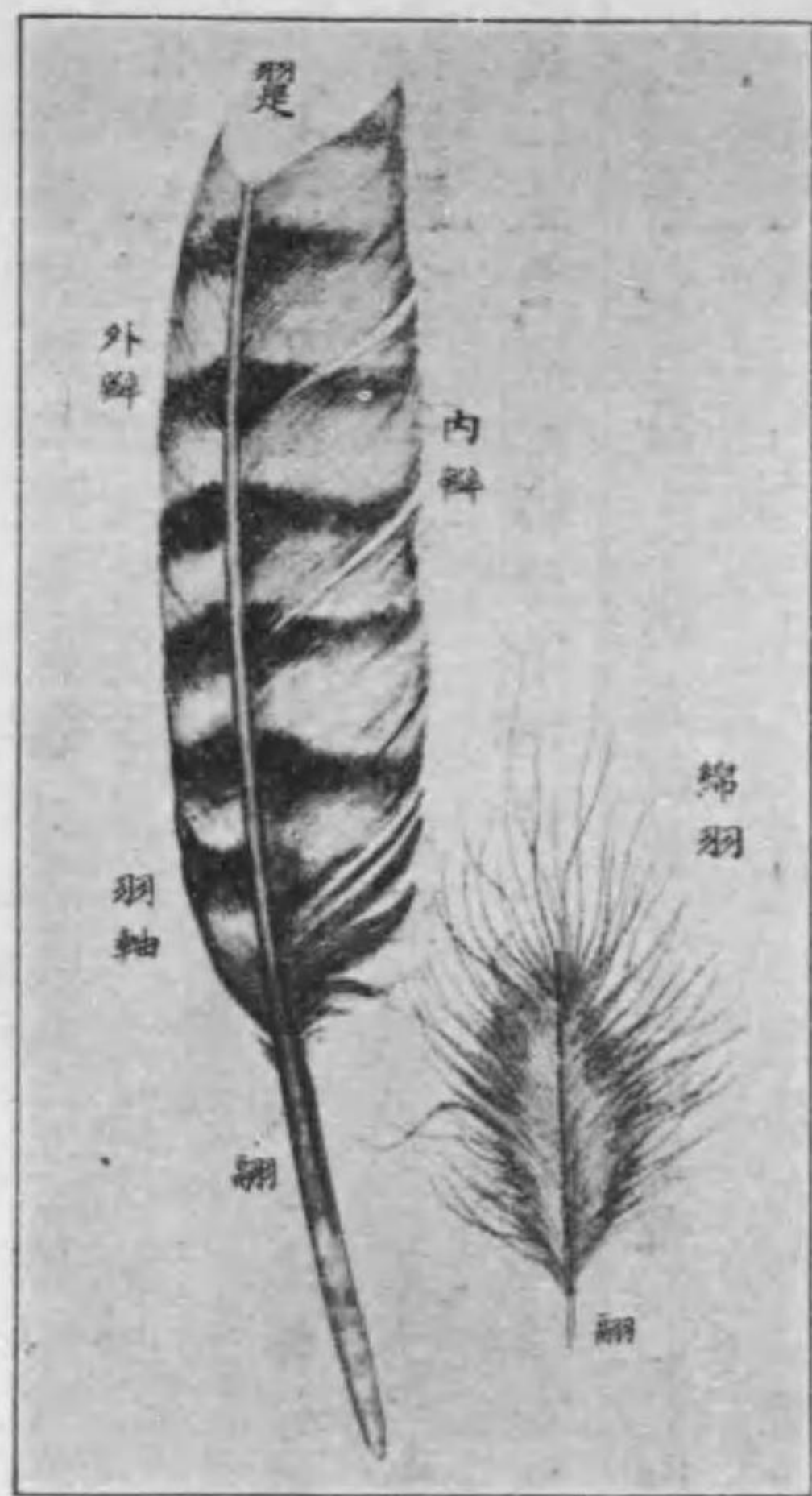
の半部位までしか達せざるものもある。また前趾間に、扁平の瓣状物を有すること、鷺、鴈、及び蹠足鳴に於けるが如きものがある。

鳥の脚は、翼と共に運動器なるを以つて、この兩者の間には、親密なる關係を有するのである。例へば家鷄、鶉、秧鷄などの如く、翼が短く、且つ常に地上に棲息する鳥にては、脚が發達して居るが、燕の如く空中を飛翔するものには、脚は非常に小形である。また、鶻鳥の如く、脚の特に發達せる鳥にては、馬よりも迅速に走ることが出来るが、一向飛ぶことは出来ない。樹上に峙する鳥では、脚にある或る蹠の作用に因りて、眠る間も、自然と趾を曲げて、その留木を、緊と掴むことが出来るやうになつて居る。雁、鴨の如く、水を泳ぐものは、前にも述べた如く、足には蹠がある。また、鶻、秧鷄等の如く、淺水を渉る種類にては、蹠を有せざれども、その代りに趾は長く、且つ廣く擴張して、泥濘の地を歩みても、足が泥中に埋没する患がないのである。元來脚の長さは、頸の長さと同俟つて、相互に密接の共同的關係がある。彼の殊に長き頸を有する「フレイミング」は、その脚も細く、且つ非常に長いのである。また地上に棲息する多くの鳥にては、脚は食物を搜索するに必要であることは、家鷄に就いて之を見ることが出来る。彼の鶻、鵝では、足は手の用をなし、鷹の類の中には、脚で造巢の材料を運搬するものもある。また、鷹、鷲の

如き食肉鳥は、強く鈎曲せる爪を用ひて、餌食動物を打ち、爪でその餌物を運ぶのであるが、嘴で食物を裂く際には、足でその餌を逃がさぬやうに支へるのである。鵝の脚は強壯で、且つよく屈曲する。而して趾の内部の表面には、鋭るどき、角質の刺を有し、外部の趾は、半ば裏返すことを得るから、足は四方面より、滑り易い魚を握み得るやうになつて居る。其他、足が武器として使用せらるゝ例は、家鶏の距の使用に因りて、明らかに見ることが出来るのみならず、駝鳥は脚で、人を蹴り倒すことが出来ること、いふことである。

羽毛は、皮膚の表皮が、角質に變じて生成せるものである。之を分ちて筆羽及び翬の二つとする。筆羽はまた綿羽若くは翬ともいふ。これは翬を有すれども、羽軸なく、極めて柔軟なる筆毛状に分岐せる羽枝は、直ちに翬より生ずる。この羽毛は翬と翬との間及び軀幹一面に排列し、その性質は、熱の不導體なるを以つて、體温の放散を防ぎ、水濕の侵入を遮り、又外物に觸れて、傷害を受くるを防ぐのである。

翬本羽は、翬及びこれと連続せる羽軸とを有する。羽軸は中空なるを以つて、輕るけれども、然かも強健にして、強く空氣を搏ち、その反動で、體をば上方に飛び上げるに適應するのである。また羽軸は、下方に彎曲すると同時に、側方にも彎曲して、以つて空氣を



圖の羽綿と是の鳥 圖三十九百第

下方に搏つに適應するやうになつて居る。羽軸の兩側には、數多の羽枝を生じ、羽枝は更に小枝に分かれる。之を顯微鏡下に檢するとき、小枝は皆小鈎に因りて、相纏絡して、一枚の板状となつて居る。之を羽瓣又は翬といふ。而して羽瓣の鳥體の内方に位するものを、内

翬といひ、之に反する方を外翬といふ。一般に内翬は、外翬よりは幅廣いのである。翬は、體面上必らず一定の區域にのみ生ずるものであつて、翼及び尾の羽域に於ては、最大なる翬を生ずるを常とする。翼に生ずる大形の翬をば、風切 (Remiges) といひ、風切の基部にあるものを雨覆 (Tectrices) といふ。翼に生ずる翬は、飛翔に大切なるものである。今左に主要なる羽毛の名稱を述べやう。

(一) 肩羽………肩部(上膊骨の上部をいふ)に生ずる羽である。

(二) 角羽又角翬………翼部に生ずる羽の一種にして、拇指骨より生ずる三枚以上の、大

羽ある場合を云ふ。

(三)初列風切羽又手翹(Primaries)……指掌部に生ずる長大の羽をいふ。その数は、九乃至十一枚なれども、通常は十枚である。之を數ふるには、最外羽より始める。若し最外羽が小形にして、認め難きときは、その次の羽より數へるのである。

(四)初列雨覆……初列風切羽の上部を覆ふ大羽をいふ。

(五)次列風切羽又腕翹(Secondaries)……尺骨より生ずる大羽にして、初列風切羽と連り、その數は六枚乃至四十枚である。

(六)後列風切羽又臂翹(Tertiaries)……臂より生ずる羽にして、三枚若くは三枚以上を有する。

(七)雨覆又覆翼翹……次列風切羽の上部を覆ふ所の小羽をいふ。これに大雨覆、又大覆翼翹(Greater Coverts)中雨覆(Median Coverts)小雨覆(Lesser Coverts)の別がある。また翼裏に生ずるものを下雨覆(Under Coverts)をいふ。

(八)翬(Mantle)……肩背部及び腰の前部が、皆同色なるものを總稱する。

(九)尾筒(Tail-Coverts)……尾の根部より生ずる羽をいふ。その中で、上部に生ずる羽をば、上尾筒といひ、下部に生ずるものを下尾筒といふ。

(一〇)尾翹又楫翹(Rectrices)……常に左右對をなして生ずるものにして、その數は八枚乃至三十二枚なれども、最も普通なるは十二枚である。

(一一)囊毛……腰、肩、臂、胸に生じ、羽軸の質甚だ硬く、羽枝の質は、綿羽の如く柔軟ならざるのみならず、翹を成せる羽枝よりも、稍硬く、且つ密接することなく、一枝毎に相分離するものである。これには白鷺の如く、先端が少しく彎曲するものあれども、又中には、直なるものもある。

鳥の尾は、琴鳥、雉、家鷄、蜂鳥に於けるが如く、雄にのみ大に發達して、裝飾美態を呈するものがあるが、その主要なる作用は、飛翔の際に、舵の作用をなし、又靜止する時に、體の平均を取る作用がある。されば尾の形狀は、鳥の飛力に、影響を與ふるものにして、概して短尾を有する鳥では、眞直なる進路を取りて飛び、且つ勢よく方向を變換することが出來ない。然しながら、長尾を有する鳥にては、極めて容易に、優美なる態度を取りて、空中を進行することが出來るし、又極めて急な角度を取りて、左右に回轉し得るものがある。而して尾の作用は、獨り飛翔の際、楫の用をなすのみならず、啄木鳥にては、之を支柱として、樹幹に攀縁するのである。

鳥類の口腔には、齒及び唇なきを以て、嘴は單に、食物を把握するの用をなすのみに

して、食物を咀嚼することが出来ない。唾腺は哺乳類の如く、舌下腺、顎下腺、耳下腺の三種を有する。舌下腺は、啄木鳥にては大に發育し、且つ舌骨も頗るよく伸長し、舌をば広い版圍に伸縮することが出来る。嚥下したる食物は、食道を下りて、嚥嚥に入り、次に前胃に移りて胃液を受け、次に砂嚥に入りて磨碎せらるゝのである。砂嚥の壁は穀粒を食する鳥にては、頗る厚く強壯なれども、肉食鳥にてはその壁は薄弱である。食物は砂嚥より十二指腸に入りて、胆汁と膽汁とを受け、小腸内を通過したる後、大腸に入る。大腸の初部には、二個の盲腸を有し、腸の末端は潤大にして、こゝに輸尿管と、生殖管とを開き、排泄腔となつて居る。鳥はその飛翔を容易ならしむる爲めには、成る丈け體重を減少する必要あるを以つて、大腸は短小にして、且つ糞塊を停滯せしむることなく、直ちに排泄するのである。

肺臓は、鮮紅色の海綿狀體にして、脊骨の左右に沿ふて、肋骨間に密着し、その表面には、多くは九個の小孔を有し、これより管を出して、胸部、腹腔等に擴り行き、この管内に、肺より空氣を送入する。而してこれをば氣嚥と稱するのである。氣嚥が普く體中に通する爲めに、體重を輕減するのみならず、爲めに酸化作用盛んとなるを以つて、鳥の體温は、常に四十度以上に上つて居る。

鳥類の喉頭は、甲狀環狀、杯狀軟骨より成る。また會厭軟骨を有するものあれども、多くは不完全にして、喉頭は發音作用を營まないものである。多くの鳥類にては、氣管の末端は膨張して、下喉頭又鳴管をなし、こゝにて發音を營むのである。而して氣管の末端及び氣管支の始端は、壓縮せらるゝか、或は胞狀に擴張して鼓室を形成する。この室の中央には、一骨質帶が突出横行して、左右兩氣管枝の相會する所に、一個垂直の中隔を形成する。この中隔の前端、即ち腹面と、後端、即ち背面とに於て、兩側に二個の弓狀突起を出だす。この突起は、各夫々の側にある氣管支の内壁の背側及び腹側に沿ふて、下方に伸長する。而して是等突起の間に位する氣管支の内壁は、膜質にして、弾力性に富んで居る。之を内鼓膜といふ。鳴禽類にては、この膜の外に、中隔の前縁には、薄き半月狀の褶襞がある。之を半月膜といひ、實は内鼓膜の伸長せるものである。多くの場合に於て、外鼓膜と稱する膜が、鼓室の外側に發育し、内鼓膜、即ち半月膜の游離縁と共に、兩側に於て、一個の聲門を形成する。以上述べたる膜の緊張は、哺乳類の聲帶と同一の作用をなし、聲門内を通過する空氣の通路が狭くなれば、爲めに空氣の振動を起すのである。而して膜を緊張せしむる原動力は、氣管と鼓室の側方、又は更らにそれより、前方の氣管支の端とを連結する所の筋肉の收縮に因るものにして、鳴禽類の多數にありては、

この筋肉は、下喉頭の内部に五六對を有する程發達して居る。

心臟は、肝臟の上前面の中央線に位し、薄けれども強靱なる心嚢に因りて圍繞せられ、左右の心耳と、左右の心室との四房より成る。而して血液循環の徑路には、全身循環と、肺循環との二つがあつて、左心室より出づる大動脈弓は、哺乳類にては、左方に屈曲すれども、鳥類にては、右方に曲つて居る。また赤血球は卵形をなし、且つ核を有する。

腎臟は、骨盤の凹處に密着せる暗赤色體にして、左右一對より成り、各々不等の三葉に分かれる。これより輸尿管を出し、尿を輸送すれども、膀胱なきを以つて、尿は體内に蓄積することはない。これも飛翔の時、體重を輕減する利益がある。

雄の生殖器は、一對の睪丸より成り、それは白色の橢圓體にして、腎臟の上部に位し、蕃殖時季に於ては、著るしく大きさを増すのである。これより一對の輸精管を出し、排泄腔に開いて居る。雌にては、左側の卵巢のみよく發達し、従つて輸卵管も、左側のもののみ發育して、排泄腔の左側に開いて居る。

鳥が巢を造る時季は、年々周期的に行はれて居る。先づ敵の侵入を受けざる、極めて安全なる地點を選択し、巢を隱匿する方法を講ずるのである。また巢を造るに必要な藁、樹皮、羽毛、茸毛、蘚苔、粘土、泥土、綿草、小枝等の如き各種の材料を蒐集し、嘴と脚とを

用ひ、唾液にて是等を膠結せしむるのである。嘴及び脚は、恰も巢を造る爲めの鋸、鑿等の如き道具に相當するを以つて、是等の形狀及び構造の相違は、自然に巢の構造に影響を與ふるのである。

雌が産卵に要する時間は、割合に短いのである。卵巢内にある卵粒(即ち黃味のみを有するもの)全部が、悉く産下せらるゝものでない。唯その中の若干が、卵殻を受けて、完全なる卵となりて、産まるゝのである。然し産卵期の間、巢が奪はれ、或は卵が掠めらるゝ場合には、之を補ふ爲めに、また産卵するのである。

卵殻の大部分は、炭酸石灰より成る。而して卵殻に種々の着色を有するは、輸尿管に堆積したる、膽汁色素に似たる色素の爲めに、生ずるものである。同種の鳥卵でも、幾分か、卵殻の色彩には、相違を見るのである。卵より孵化せる雛が、綿毛を被り、且つ生まるゝや、否や直ちに駆け出したり、又は游泳し得るものゝ卵は、綿毛を有せず、生れ出づる鳥の卵よりは大きい。而して卵が孵化するに要する日數は、卵の大きさと親密なる關係を有するのである。例へば蜂鳥の類にては、卵の孵化期は、僅に十日位であるが、駝鳥にては、六週間も要するが如しである。鳩類、蜂鳥及び啄木鳥科の「ハイホール」(Highhole)にては、親鳥はその喙囊より柔軟なる食塊を吐出して、その雛を養ふのである。

鳥類の中に、常に同一處に棲めるものを留鳥 (Stationary Bird) といひ、諸處を徘徊漂遊して、居所一定せざるものを漂鳥 (Wandering Bird) といひ、氣候の寒暖に應じ、年々季節を定めて、遠くその住所を變換するものを、候鳥又渡り鳥又移住鳥 (Migratory Bird) といふ。候鳥の中に、燕の如く、春來り秋去るものを、夏住鳥といひ、雁の如く、秋來り春去るものを、冬住鳥といひ、鶺鴒の如く、移住の際に通過する沿道の地方に、短時日の間、滯留するものを、一時的住鳥といふ。

本書には、鳥の體長、翼長等の記事あるを以つて、今少しく之を説明せんと思ふ。先づ鳥の體長を測るには、鳥を仰向けにして、嘴と尾羽を持ち、之を引き伸ばし、嘴の先端より、尾羽の先端までの長さを取るのである。また兩翼の長さは、鳥を仰向けにし、左右兩翼を充分に伸張し、右翼の最長羽の先端より左翼の最長羽の先端に至るまでの距離である。また翼の長さは、腕關節の角より、最長の風切、即ち初列風切の先端に至るまでの、長さをいふのである。

現行の保護鳥規則は、明治四十一年九月、農務省令第十八號を以つて公布せられたものである。而してその第二十七條には、捕獲することを禁ずる鳥の五十九(種からいふべからず)を擧げて居る。而して明治四十五年五月四日の農商務省令第十四號を以つて、この狩

獵法施行規則中に、改正を加へられ、新たに水風鳥(水鳥)を加へられたるを以つて、合計六十となつたのである。斯く捕獲を禁せられたるものは、無期保護鳥である。また第二十九條に於ては、四月十六日より十月十四日まで(北海道に於ては、九月十四日まで)捕獲することを禁せられた鳥を擧げ、その十四を示されて居る。尤も、この中放鷹を以て、狸(しんじゆ)、鷺、小鷺、中鷺、大鷺、鳧、鶺鴒、秧雞を捕獲するは、此限に在らずといふことになつて居る。斯く獵期外に、期限を定めて保護せられて居るから、有期保護鳥である。而して、是等の七十四の鳥は、嚴格に種の數をいふときは、約二百六十種足らずとなるのである。今一々茲にこの種類を掲げずして、鳥類各目の總論の終に於て、之を示すことにする。また臺灣に施行せらるゝ保護鳥規則は、明治三十八年八月、臺灣總督府告示第一百一號に因りて、狩獵取締規則第二十條による保護鳥の種類を定められてある。また朝鮮に於ける保護鳥規則は、明治四十四年四月の朝鮮總督府令第四十六號を以て、發布せられて居る。鳥類は、その種類頗る多くして、約一萬八千九百三十九種あつて、その中變種を去れば、先づ一萬三千位なるべしといふ(理學號第八卷第二號に據る)。其の習性に應じて、嘴脚の形狀、翼及び尾の長短形狀等に、多少の差異あるを以つて、通常これ等を以つて、分類の標準として居る。今之を八目に分ちて説述する。

- 第一目 猛禽類 (Raptatores)
 - 第二目 攀禽類 (Scansores)
 - 第三目 鳴禽類 (Passeres)
 - 第四目 鳩類 (Columbinae)
 - 第五目 鶉鷄類 (Gallinaei)
 - 第六目 涉禽類 (Grallatores)
 - 第七目 水禽類 (Natafores)
 - 第八目 走禽類 (Cursores)
- 以上

第一目 猛禽類 (Raptatores)

この類は、鳥類中の獅子、虎、狼、狗とも云ふべきものにして、嘴は寧ろ短けれども、強大尖銳にして、上嘴は下嘴よりも長く、その先端は鉤曲して、肉を裂くに適する。また嘴の

基部は、蠟膜を以つて被はれ、この部に鼻孔を開いて居る。翼は體の割合に強大にして、胸骨の龍骨突起は、大に發育し、翼を動かす筋肉の附着に適するのである。脚は短く強健にして、四趾も亦頗る強壯である。而して外趾は、之を後方若くは前方に回轉することが出来る。趾には常に有力なる鉤爪を具へ、以つて食餌を握り、之を支ふるに適する。猛禽類の中には、死屍腐肉を食するものあれども、多くは生動物を捕獲し、之を食ふを以つて、感覺器は大に發達し、視力は殊に鋭敏である。食物は、一旦嚙囊にて柔軟となり、これより羽毛、茸毛、骨等の如き不消化分は、球狀となりて、口外へ吐出せらるゝのである。

この類は、地球上到る處に分布すれども、島嶼よりは大陸の方に夥しく産し、多くは雌雄雙棲し、卵は四個を超ゆること稀れにして、雌のみ之を温め、雄は雛に食物を供給するを助くるのである。

猛禽類中の保護鳥は、皆禁獵鳥類、即ち無期保護鳥にして、左の種類がある。

- (1) 鴉カラス
- (2) 鵂フクロウ
- (3) 鳶トビ
- (4) ノスリ

猛禽類は、五百五十種以上ありて、之を次の二亞目に分つことが出来る。

第一亞目 晝禽類又鷹類 (Accipitres)

晝間飛翔する種類にして、眼は顔面の側方に着く。羽毛は夜禽類の如く柔軟ならずして、しつかりして居る。翼は長く尖り、嘴は長く、且つ強壯である。跗蹠骨と足の先端とは裸出し、鱗片を以つて被はるれども、稀には羽毛を生ずるものがある。三趾は前向し、一趾は後向する。嚙嚢は廣濶なれども、砂嚢は薄く、且つ腸は一般に短濶である。

第二亞目 夜禽類又鴞類 (Striges)

この類は、鴞及び鴞の類を含んで居る。眼は顔の前面につき、圓形にして大きく、その周圍には剛毛を射出し、圓盤状を呈する。頭は大なれども、嘴は短い。手翼及び腕翼に生ずる羽を除き、體軀を被へる羽毛は、總べて柔軟にして、飛翔の際、羽音を生ずることはない。晝間は隠伏し、夜間出で、食餌を探るを以つて、羽毛は暗褐色を呈し、よく夜陰の暗さと一致し、所謂保護色をなすのである。眼の瞳孔は、夜間大に擴張し、よく光線を集中し、物を視るに適する。顔の圓盤の一部は、耳の周圍に於て前向し、以つて、耳孔を露出するを以つて、聴覺も、亦大に鋭敏である。脚の前後には、二趾を



脚ノ種一ロクフ 圖四十九百第 (Snowy Owl)

具へ、外趾は後方に向けることが出来る。趾には甚だ鋭るごき、且つ牽縮し得べき爪を有するを以つて、食餌を捕獲するに便利である。この類には、凡そ二百種を有し、北極地方より濠太利亞に到る迄、世界到る處に産するのである。

第一亞目 晝禽類又鷹類 (Accipitres)

〔一〕 鶚科 (Pandionidae)

この科のものは、鷹科と大體よく似て居る。然しながら、第四趾は鷹科のものとは異りて、後方に轉することが出来る。翼は長くして、尾の先端を超へて伸出する而して、兩翼を擴げるときは、四尺五寸有餘に達する位である。この科のものは、殆んど世界到る處に産するのである。

〔一〕 鶚 (Pandion haliaetus (Linn))

英名を「オスブレイン」(Osprey)又「フィッシュホーク」(Fish-Hawk)又「フィッシングホーク」(Fishing Hawk)といふ。嘴は短く、褐色にして、その基部と縁邊とは、藍色を呈する。蠟膜は淡藍色にして、その中央には、斜に卵狀の鼻孔を開いて居る。頭頂の中央部は、暗褐色

なれども、その他の部分は、頸の上部と、同じく白く、嘴より頸の兩側に沿ふて、暗褐色の廣帯を有し、頸下は暗白色にして、暗褐色の條斑を有する。體の上部は、暗色にして、腹部は白く、尾には交互に淡褐色及び暗褐色の條紋を排列する。脚は寧ろ長く、淡灰藍色に褐色を混する。跗蹠部は甚だ短く、且つ著るしく太く、その周圍には、六角形の鱗を有する。爪は長く、且つ屈曲し、その色は黒くある。體長は二尺二寸ありて、翼長は一尺三寸四分乃至一尺六寸六分である。

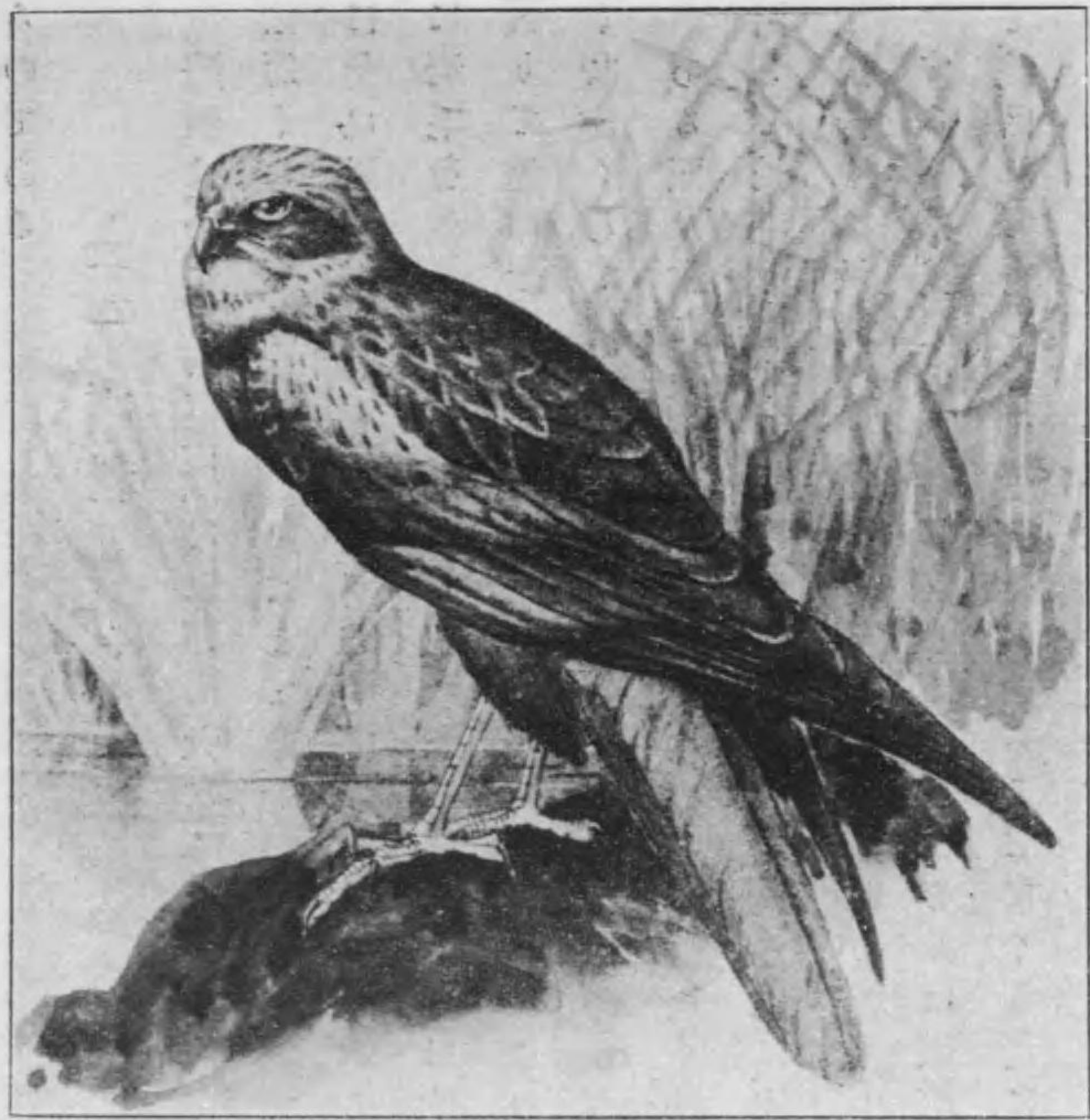


第百九十九圖 鳥

るのである。

(二) 鷹科 Falconidae

體軀は、小なるは雀位なれども、大なるは鷲鳥位である。嘴は中庸の長さあるか、若くは短くして、強く鈎曲し、時としては、その先端に於て、缺刻を有するものもある。而して口角は眼下に位する。脚の跗蹠部は、中庸の長さあるか、若くは短くして、時にはこの部に羽毛を生ずるものがある。三趾は前向し、外方に位する。二趾は、その基部に於て、膜に因りて連結せられて居る。一趾は後向し、趾には、長き銳爪を具へて居る。尾は短きか、若くは長くして、常に略方形をなせども、時には圓きもの、楔状のもの、若くは叉状のものがある。頭は常に大きく、且つ幅廣くある。頸は短く、體は輕快にして、脛部と腿部とは、突出して長毛を有する。常に樹上、岩上、若くは地上に、樹枝を用ひて巢を造り、一産に一個、二個、若くは數個の卵を産む。卵は白色なるか、若くは赤斑を有し、凡そ三四週にして孵化する。雛は、鵝科のものと同じく、生れたる際は、斑紋なき白色の柔軟なる綿毛を以つて、被はれて居つて、自ら餌を索むることなく、親鳥に因つて養はるのである。この科のものは、哺乳類の獅子、虎、豹に匹敵するものにして、他の生動物を捕へて食ふのである。多くは雌の方が、雄よりも大きく、且つ性質も強暴である。



第百九十六圖 ちゆうひ

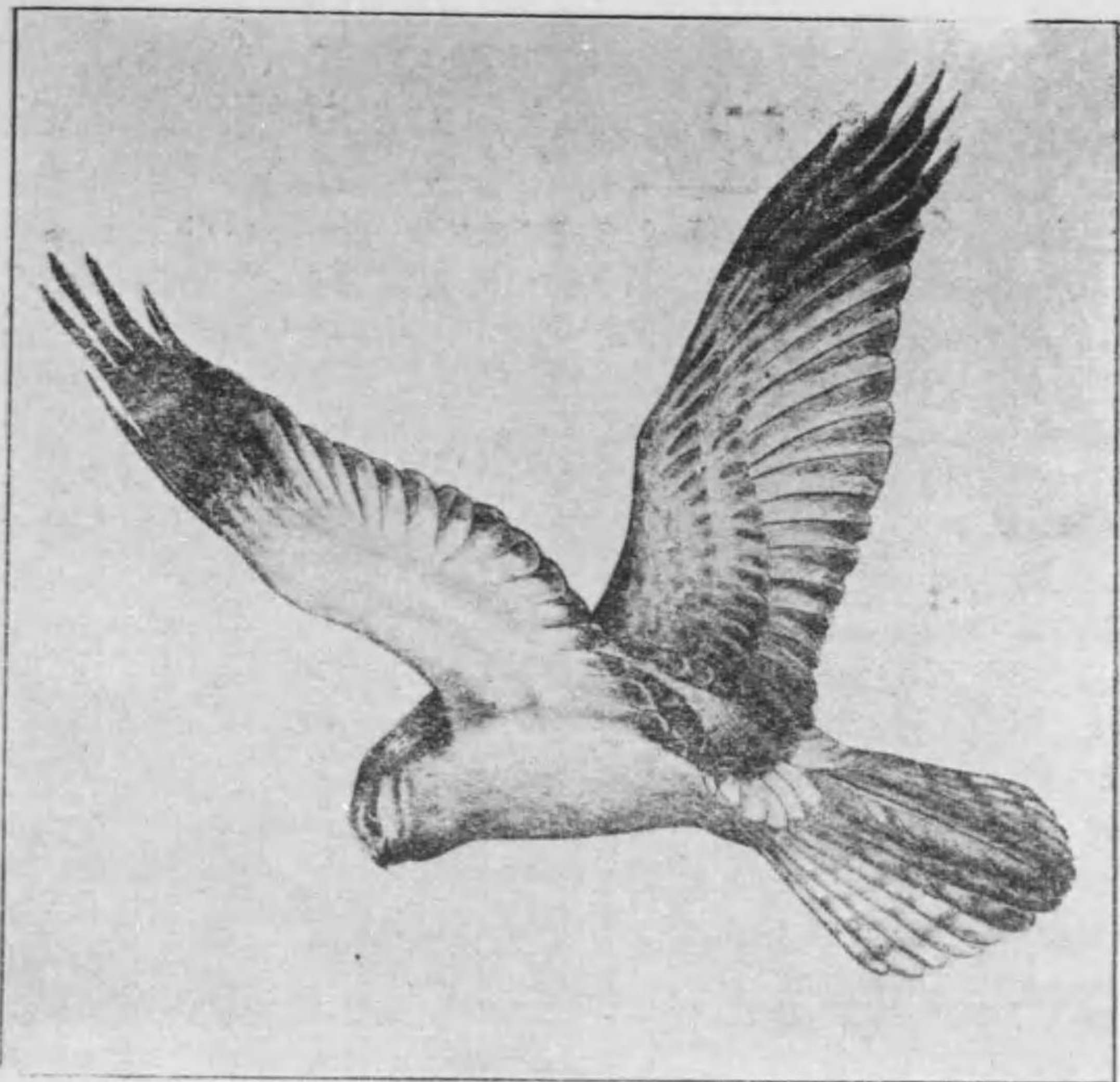
英名を「マーシユ・ハリヤー」(Marsh-Harrier)といふ。この種は、ノスリよりは小さく、且つ著しく瘦せて居るが、灰色チユウヒよりは稍大きい。雌の翼長は、一尺四寸二分位あつて、頭は淡色で、これには黄色味を帯びて居るが、雄にては白味を帯びて居る。顔面には盤状をなせる羽毛を生じ、眼は側向すれども、その前面にも、強き光澤を放てるを以つて、何んぞなく、鶺鴒チウロウの顔に髣髴たる所がある。羽毛は褐色に

して、體の處々には、濃い暗色の部分がある。而して尾は長い。脚も亦長く、瘦せて居つて、裸出し、跗蹠部の背面と前面とには、楯状鱗を有し、その兩側には網状鱗を有する。

この種は、恐らく夏季に、本邦の各地を歴游するものと思はれる。その蕃殖區域は、本邦より南部西比利亞、歐羅巴大陸及び英國に迄擴がつて居る。この鳥は、食肉鳥中で、怯懦且つ最も狡猾なるものゝ一つにして、朝夕、沼澤地、又は蘆葦の繁茂せる處若くは小灌木の生ずる地を飛翔し、小形の動物を殺して食ふのである。殊に蘆葦中に造巢する鳴禽類を掠奪するに多く、卵殻を破りて、内容物を啄むことが巧者である。又鴨の如き水禽を襲ひ、その雛を奪ひ、卵も食ふのである。また小哺乳類、蛙、及び爬蟲類も食ふのである。常に巢をばキやホタルキ等に似た草の生せる處へ構へ、一産に五若くは六卵を産み、卵殻は帯緑白色である。

(二) 灰色ちゆうひ Circus cyaneus (Linn)

英名を「ヘン・ハリヤー」(Hen-Harrier)といふ。前種よりは小さく、體長は一尺七寸六分許、翼長は、一尺一寸三分乃至一尺三寸位である。成長せる雄にては、體の上部は石板灰色で、尾筒部は白く、咽喉と胸とは、帯藍灰色にして、體の下部は白い。雌にては、體の上部は褐色にして、頸は赤褐色を帯びたる褐色にして、これには白條を有する。而して顔面



ひうゆちるいいは 圖七十九百第
(After Herman and Owen)

五〇〇

は、よく鴉と似て居る。尾は褐色にして、五個の暗色横帯を有し、體の下部は淺黄色を帯びたる褐色である。また幼鳥の羽毛は、雌の羽毛とよく似て居る。

この種は、夏季に於て、千島及び北海道に來遊すれども、本邦の南部に於ては、冬季渡來するのみである。その蕃殖區域は、本邦より西比利亞、歐州の北部、及び英國にまで擴がつて居る。常に地上より食を索め、野鼠を捕へ、又小なる野兔を

食ふことがある。また地上にある鳥の巢を奪ひ、雛を殺し、卵を破壊するのである。巢の材料は、植物の根、莖より成り、その内部は柔軟である。屢々地上に巢を構ふことがある。卵の数は四乃至六個にして、卵殻は帶藍白色なれども、時には帶黃褐色、若くは赤褐色の斑紋を有することがある。

〔三〕 蒼鷹 *Astur palumbarius* (Linn)

英名を「ゴスホーク」(Goshawk)といふ。體長は、雄にては一尺六寸七八分、雌にては一尺九寸二三分あつて、翼長は一尺一分乃至一尺一寸七分である。成長せる鳥にては、耳覆に、一本の狭き白條を有し、亦眉も同様である。體の上部は、灰褐色にして、尾には幅廣き暗色横帯を有し、體下は白く、この部には、灰褐色の横帯を有する。蠟膜、虹彩、脚は何れも黄色であつて、跗蹠部の鱗片の排列は、チュウヒ屬のものと同様である。

この種は、獨り本邦の各地に産するのみならず、また西比利亞、歐羅巴大陸、英國にも産する。容貌は如何にも、狡猾且つ殘忍の相を呈すれども、割合によく馴れ、昔から放鷹術に用ひられて、雌で鶴、雁、鴨等を捕ふるのである。彼れが好んで飛翔する處は、森林と曠原とが交互に參差する地方であるが、また村里にも徘徊し、家禽、鴿をば掠奪して、大害を與ふるのである。またカケス、ツグミ等の小形の鳴禽類を食ひ、鼯鼠、栗鼠、野鼠をも

食ひ時には老兎をも攫み去るのである。巢は堅硬なる小枝を以つて造られ高木上に

五〇二



鷹 蒼 圖八十九百第

置かる。一産に四卵を産むのである。

〔四〕 兄鷯(雄)又鷯(雌) Accipiter nisus

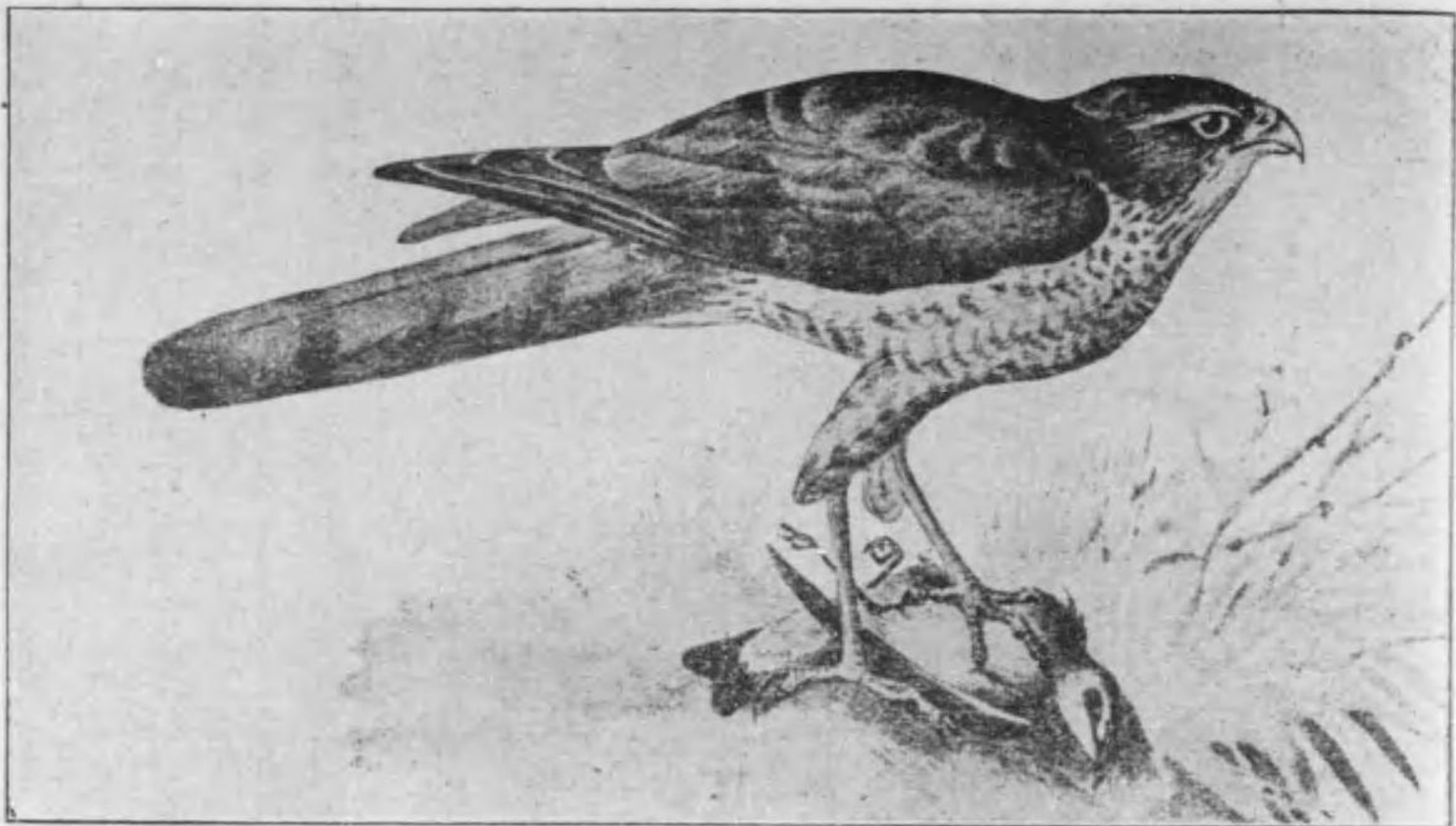
(Linn)

英名を「スバロー・ホウク」(Sparrow Hawk)といふ。雄は體長一尺位であるが、雌では一尺二寸六分位に達するものがある。翼長は六寸三分乃至八寸である。頭より背は、全く暗灰色にして、後頭部に、少しく白色部がある。喉より腹にかけては白色にして、暗褐色の横條が多い。尾は長く、脚は細長にして羽毛がない。

この種は、本邦各地に産する外に、西比利亞、歐羅巴大陸及び英國に産する。常に森林及び曠野に棲息し、鷯大の鳥より、鷯大の小鳥を攫み、その頸をば鋭爪にて締め殺すのである。その巢は、樹枝を集めて造る。ヘル

五〇三

内外普通動物誌



この 圖九十九百第 (After Herman and Owen)

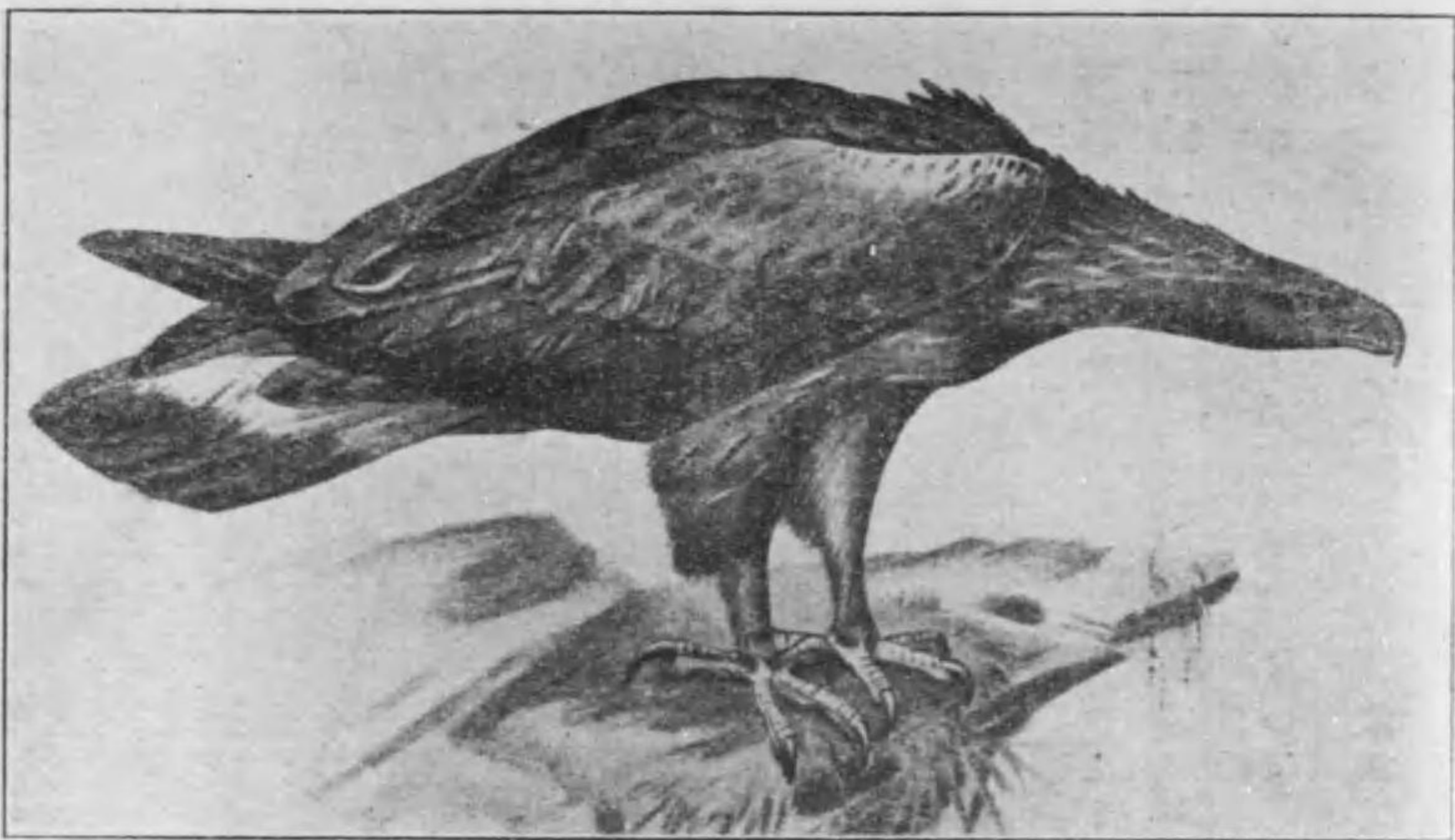
マン氏に據れば、好んでハリモミ属の樹木を選びて、地上一丈二尺乃至一丈五尺位の
高處に置く。然しまた鳥の廢棄せる巢を利用して、己れが巢となすことがある。産卵數
は四五個、時には六個、稀に七個である。雌は放鷹術に用ひられ、小鴨等を捕獲するに、用
ゆるのである。

〔五〕 悅哉(雄)又雀駝(雄)つみ(雌)雀鶴 *Accipiter gularis* (Temm. & Schl.)

英名を「チャイニーズスバロー・ホウク」(Chinese Sparrow-Hawk)といふ。大きさは鶺鴒位にし
て、翼長は五寸五分乃至七寸一分である。頭より背部は、焦茶色にして、白斑を交へて居
る。喉は白色にして、その中央部には、縦に黒き一條斑がある。また腹部には、焦茶色の太
き横條がある。脚の基部には、扇狀の羽毛を生ずる。雌の腹部の斑紋は、雄のよりは、太く
して短い。この種は夏季本邦及び支那に渡來し、冬季は遠くマレイ群島及びバルマに
渡るのである。常に小鳥を捕へて食ふのである。

〔六〕 狗鷲 *Aquila chrysaetus* (Linn)

英名を「ゴールデンイーグル」(Golden Eagle)といひ、スコットランドにては「ブラック
イーグル」(Black Eagle)といふ。體軀は大きく、二尺七寸乃至三尺許である。雌は雄よりも
大きい。充分に成長した鳥でも、約十六封度、即ち一貫九百三十五匁餘位であるが、翼を



第 二 百 二 十 二 圖 狗 鷲
(From Birds Useful and Harmful)

擴張すれば、九尺位となり、且つ尾が幅廣い
爲めに、實際の大きさよりは、遙かに大きく見
ゆるのである。また翼長は、一尺八寸乃至二
尺三寸位である。

羽毛は暗褐色にして、頭と頸背とは帶褐
黄色である。これ英に「ゴールデンイーグル」
と稱へらるゝ所以である。而して頸背には、
一番長い羽毛が生へて居る。尾は濃灰色に
して、帶黒褐色の横條を有し、その先端も、帶
黒褐色である。脚は趾の前面に到るまで、羽
毛を生ずる。腿部は暗褐色にして、この部と
體の下部とは、横線を有することはない。
この種は、本邦の南部には、四時棲息すれ
ども、未だ北海道には産しないのである。其
分布は、西比利亞、支那、印度亞刺比亞、埃及、ア

ルジエリア、歐羅巴大陸、大英國に亘つて居る。英國に於ては、この種は野兎、幼き鹿、雉、雷鳥等の類を食すれども、人家に近く棲息するときは、小羊、幼豚、家禽を掠めるのである。ホンガリアに於ては、秋季山地より平原に渡り來りて、小獸殊に野兎を多く食ふ。實際この鷲が子供を掠つた例はある。嘗つて七歳の子供が、耕地にて、危うく攫み去られんとしたこともある。而してノルウェーのノルダーハウス (Kordarhouse) に於ては、二歳の子供が、親の目前で、奪ひ去られたことがある。

この種は、山地の絶壁に於て巢を造るが、折々は高木上に營巢することがある。巢は唯樹枝を組み合はせた臺状のものであるが、内部の凹處には、根、草、蘚苔、海藻等を以つて縁付けてある。年々舊巢を修覆して使用するを以つて、巢は非常に大きな者となる。一産に二三卵を産み、卵は汚れたる白色にして、鋪褐色の斑點を有する。

〔七〕 毛脚のすり *Aquila lagopus* (Gmel)

英名を「ラツフレツグドブツザードイーグル」(Rough-legged Buzzard-Eagle) といふ。體軀は頗る小さく、翼長は一尺四寸乃至一尺六寸位である。脚の背面には、一本の狭き線條を有し、その部には羽毛がない。また趾の先端に至るまで、羽毛が生へて居る。

この種は、冬季に於て、稀に本邦に渡來するが、本邦の南部には、未だ發見せられて居

ないのである。その蕃殖區域は、極地より太平洋に擴り、またベーリング海峡を横りて、アラスカに及んで居る。

〔八〕 尾白鷲 *Haliaeetus albicollis* (Tinn)

英名を「ホワイトテイルドシーイーグル」(White-tailed Sea-Eagle) といふ。頭は蒼白色に

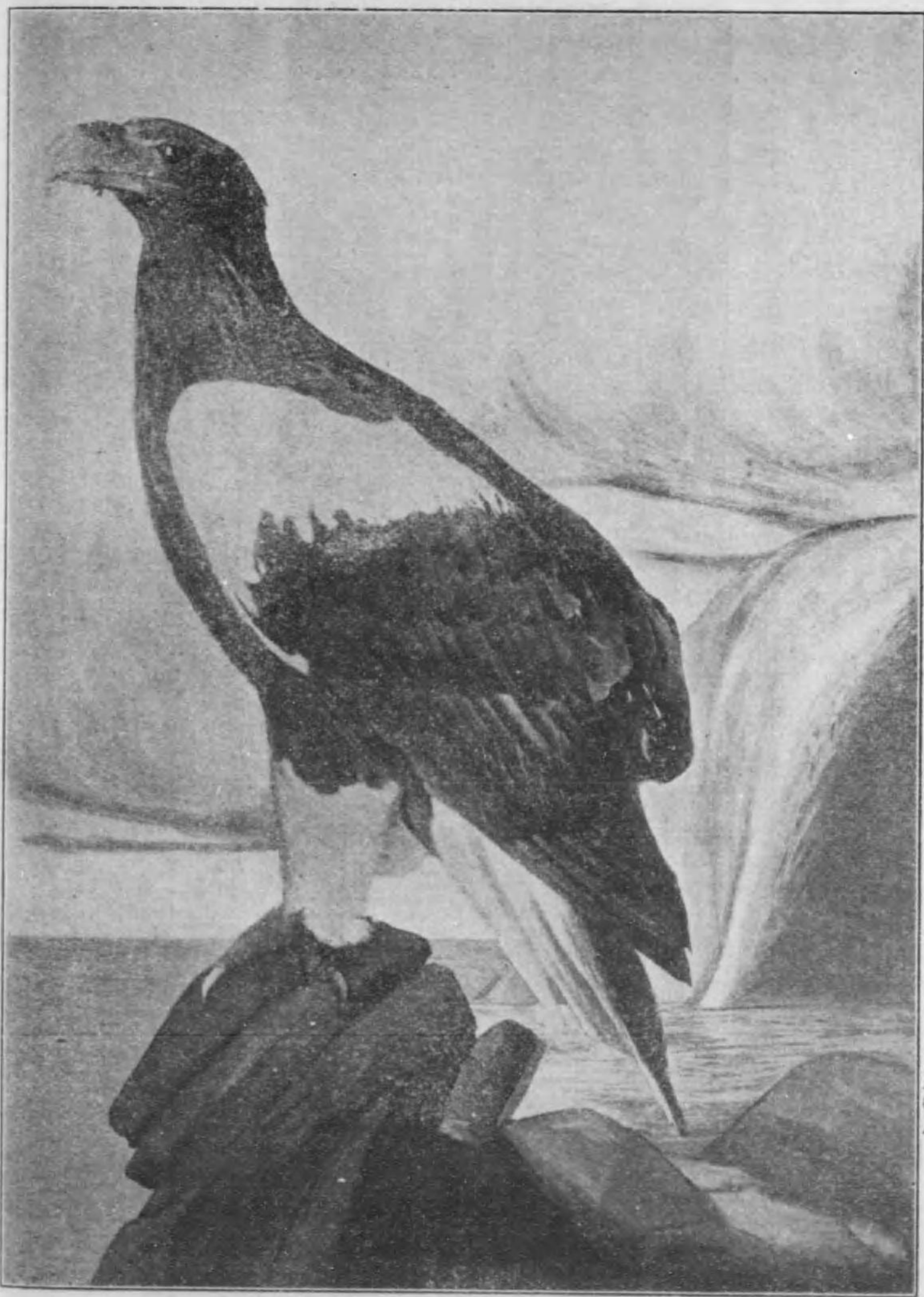
して、嘴は黄く、體は灰褐色で、尾は白。跗蹠部の下半部には、羽毛が生へて居ない。體は大きく、雄にては、體長は二尺三寸五分、雌にては、二尺八寸五分あつて、翼長は二尺一二寸乃至二尺四寸位である。

この種は、本邦到る處の海岸に棲息し、また亞細亞及び歐羅巴の



鷲白尾 圖一〇百二第 (After Protheroe)

北部に産する。常に海岸若くは大湖畔に往來し、主として魚類及び水禽類を食ひ、又屍肉を食ふ。時には鶉の捕へたる餌をば、掠奪するのである。巢は頗る大きく、海岸若くは大湖畔の森林に營むのである。



鷹 鶻 圖二〇百二第
(From Marvels of the Universe)

[九] 鶻鷹 *Haliaeetus pelagicus* (Pall.)

英名を「ステラース・シー・イーグル」(Steller's Sea-Eagle)といふ。十八世紀に、露西亞の博物學者ステラー氏の發見したものである。體長は約四尺餘で、兩翼を擴ぐるときは、六尺以上にも達する。嘴は大きく、橙黄色にして、羽毛は暗灰褐色を呈する部分と、純白雪の如き部分とが交つて居る。尾は楔形をなし、且つ十四枚の本羽を有する。

この種は、北米大陸、アラスカ、カムチャツカ及び我が北海道の如き、北太平洋の沿海に産するものにして、冬季本邦に渡來し、殊に北海道に多いのである。常に海岸を往來し、魚類、水禽類、海豹の幼者、狐、雷鳥の類を捕へて食ふのである。

[一〇] 角鷹 *Spizaetus nipalensis* (Hodgson)

英名を「インディア・アングレステッド・イーグル」(Indian Crested Eagle)といふ。體軀は大きく、翼長は一尺五寸乃至一尺六寸八分に達する。後頭には冠狀の羽毛を有し、腹面と腿とには横線がある。また趾には、その先端に至るまで羽毛を生ずる。

この種は、四時本邦に棲息し、冬季には北海道にも渡來するのである。その蕃殖區域はヒマラヤ山、南印度の諸山、セイロン島より、支那の南部を経て、臺灣及び我が本州に擴がつて居る。常に山地の喬木に、巢を構へるのである。而して北部支那及び西比利亞

に發見せられざる所から考へて見ると、南方の暖地より、本邦に渡來する熱帯産の鳥と考へなければなるまいとは、シーボーム氏の説である。常に小獸、鳥類、魚類を食ふのである。

【一一】のすり又あかのすり *Buteo vulgaris*, Leach.

英名を「コンモン・バザード」(Common Buzzard)といふ。この種は、大きワタリガラスよりも大きく、體軀は短大であつて、翼長は一尺一寸三分乃至一尺三寸八分である。羽色は個體に因つて大に相違し、或者は白味を帯び、又中には褐色若くは黒味を帯んで居るものがある。蠟膜と脚は黄く、脚には、上半部にのみ羽毛を有する。鼻孔は卵狀にして、虹彩は灰色若くは褐色である。手蹼と腕蹼は白く、尾には十七個の暗色横帯があつて、これは斜面に傾いて居る。

この種は、本邦の南部には常に棲んで居るが、千島及び北海道には、恐らく夏季のみ渡るのであらう。その分布は、本邦より西比利亞の南部、中央亞細亞、歐羅巴大陸及び英國に亘つて居る。常に平原及び高原に棲息し、齋のやうに拭ふが如く飛翔し、且つ空中遙に高く冲り、突然高所より降下し來りて、地上近く徘徊して、蛙、蜥蜴、蛇類を食ひ、また鼯鼠、鼠、幼兔を食するが、野鼠を屠る分量は多量にして、ヘルマン氏に據れば、嘗つて斃

死せる一羽の胃を剖いて檢したるに、實に三十疋の野鼠の屍骸を發見したのである。常に乾草の堆積せる上や、杭木や柱木などの上に靜止し、穴より出で來る野鼠を窺



第百〇三圖 野鼠のすり又あかのすり
(After Herman and Owen)

ひ、その姿を見るや否や、直ちに翼を擴ろげ、地上に突進し來つて、之を攫み去るのである。されば耕野に、野鼠の多く繁殖せる年には、ノスリも亦夥しく群飛し來りて、頻りに之を屠るのである。如斯ノスリは、鼠を殺すが故に、有益鳥であるが、時には歐州に於て、雉類の如き、所謂獵鳥や、兎などを圍つて飼へる場所へ侵入し來つて、是等を掠め去ることがある。巢は常に喬木上にありて、一産に三乃至四卵を産むのである。

〔一二〕 大のすり *Buteo leucocephalus* (Hodgson)

英名を「シベリアン・バザード」(Siberian Buzzard)といふ。體軀は前種よりも大きく、翼長は一尺五寸一分乃至一尺六寸八分に達する。この種はバイカル湖の南東に位するダウリアにて蕃殖し、冬は蒙古及び北支那に渡るが、本邦に渡來するは稀れである。

〔一三〕 さこば *Buteo indicus* (Gmelin)

英名を「ジャバン・バザード」(Javan Buzzard)といふ。翼長は一尺乃至一尺一寸許である。體の上部は褐色で、翼及び尾には、數條の暗褐色の横帯がある。體下は白色にして、この部にも、亦褐色横條がある。

この種は、北海道にては、發見せられないが、長崎、沖繩島の如き、本邦の南部にては、捕獲せられて居る。その分布は、本邦よりフィリピン諸島、セレベス、支那、ボルネオ、ジャバ、

マレイ群島に擴がつて居る。

〔一四〕 鳶又んび *Milvus ater melanotis* (T. & S.)

英名を「ブラック・カイト」(Black Kite)といふ。全體褐色にして、眼は圓く、視力は鋭敏である。翼は甚だ長大にして、翼長は一尺五寸乃至一尺八寸位ある。尾は長く又狀をなし、跗蹠部の前面には、楯狀鱗を有する。

鳶は本邦に普通なる鳥にして、その分布は、本邦より東部西比利亞を経て、西部歐州に擴がつて居る。彼れが空中に飛ぶや、別段に翼をば下方に打たずに飄々乎として拭ふが如く、或は舞ふが如くに、頻りに昇降する。而して一たび地上に食餌を發見するや、突然天空より落下し來つて、鈎爪を以つて之を掠め去り、一旦附近の樹上に靜止して、之を食ふのである。

鳶は鼠、蛇、蜥蜴、魚類、鳥類を捕獲する。また市街海濱等にありて、僮肉を食ひ、掃除役を務め、吾人に有益である。六月乃至八月頃、森林中の喬木上に巢を造り、一産に二三個の大卵を産むのである。

〔一五〕 八角鷹 *Pernis apivorus* (Linn.)

英名を「ホネー・バザード」(Honey-Buzzard)といふ。翼長は一尺二寸六分乃至一尺四寸七

分位である。尾翹は、成鳥にては灰褐色で、先端が白色に縁取られ、數條の黒褐色の横斑がある。この横斑は、尾の一番先きにあるものが幅が最も廣い。それは内翹のものゝ、外翹のものゝが、同位置にありて、一直線になつて居るが、その他の數條は、幅が狭く、且つ内翹のものゝ、外翹のものゝが喰ひ違つて居る。眼前には、非常に細い羽毛が密接して、恰も魚鱗状をなして居る。また鼻孔の上部は、膜を以つて被はれ、爲めに鼻の開口は、線状をなして、斜に位するのである。

この種は甚だ稀れに本邦に渡來する。その分布は、本邦より南部西比利亞を経て、歐羅巴大陸及び英國にまで擴がつて居る。この鳥は蜂の巢を襲ひ、之を食ふのである。

〔一五〕 ちやうげんぼう又まくそだか又きんみだか(播磨方言)

Falco tinnunculus Japonicus T. & S.

英名を「ケストレル」(Kestrel)といふ。翼長は凡そ七寸八分乃至八寸八分位である。雄の尾羽は、青灰色にして、その末端に近き所に、一本の幅廣き黒色の横帯を有する。兩覆肩羽臂翹は、栗色にして、黒色條紋がある。雌及び未成熟の雄は、尾羽には、九個の暗色横帯がある。且つ外方の羽毛は、中央にある羽毛よりは、八分餘も短いのである。

この種は、本邦の南部には普通に見る鳥であるが、北海道には産しない。その分布は、



うぼんげうやち 圖四百二第
(After Herman and Owen)

本邦より西比利亞、歐州大陸、英國に擴がつて居る。彼れの飛翔せる姿は、如何にも優美である。彼れは、鳶の如くに殆んど翼を打つことなくして、よく空中に體軀を支へ、風に逆ひ、飄々として飛翔する習性があるから、歐州では俗に「ウインド・ホバー」(Wind-lover) (風に飄くもの) の名がある。常に牧場、耕地、荒蕪地にあつて、空高く飛翔し、その褐色鋭敏なる眼で、頻りに食物を探して居る。彼れの食物は、野に棲める鼠族であつて、食物が缺乏するにあらざれば、鳥類を襲はないといふ説がある。鼠に次いで食ふのは、昆蟲類にして、蜻蛉の類を多く食ふのであるが、西班牙にては、重に甲蟲類を食ふのである。又コホロギ、バッタも食ふのである。巢は廢址、塔

高い巖石上にあるが、樹木に置くことは甚だ稀れである。一回に四五卵を産み、稀に六個以上に達することがある。

〔一六〕 こちやうげんぼう *Falco aesalon*, Tunstall.

英名を「マーリン」(Merlin)又「ストーン・ホック」(Stone Hawk)といふ。翼長は六寸七分乃至七寸六分であつて、體長は稀れに一尺一寸位に達するものがある。成長せる雄は、尾は藍灰色にして、その末端に近く幅廣き黒色の一横帯を有する。また藍灰色を呈せる部は、雨覆肩羽臂翼にまで擴がつて居る。雌及び未成熟の雄は、前種の雌及び未成熟の雄と大に酷似するのであるが、この種にては、尾には九個の代りに、七個の暗色横帯を有すると、尾が少しく圓味があるので、區別することが出来る。

この種は、本邦到る處に、普通に見る鳥であるが、また西比利亞、歐州大陸、英國にも産する。英國にては、荒蕪地に於て蕃殖するが、アイルランドにては、山地に普通である。而して秋季には、入江の方に來遊して、鵝其他の渉水類を食ふのである。彼れは飢餓に迫るときは、雲雀を捕へ、チゴハヤブサと同じく雀科の鳥をば、好んで食ふのである。

〔一七〕 隼(はやぶさ) *Falco peregrinus*, Tunstall

英名を「ペレグリン・ファルコン」(Peregrine Falcon)といふ。雄の體長は、一尺三寸四分で

あつて、翼長は一尺乃至一尺二寸五分である。尾は寧ろ長く、殆んど平坦にして、先端に至るに従ひ暗色となる。背は蒼黒色で、胸腹部は灰白色にして、これには稍々赤色を帯びたる褐色の條斑がある。眼下には三角形の暗色斑紋を有する。羽毛にある暗色の斑點は、幼鳥にては縦條であるが、羽毛が脱け換りて後は、横條となるのである。

この種は、四時本邦の南部に棲息し、千鳥にては夏季普通に見るのであるが、その分布は、地球上に廣く亘つて居る。この鳥は放鷹術に使用せるものにして、雌は鴨、雁、鷺、鳩などを捕ふるに用ゆる。巢は通例絶壁の凹みにあるが、時には鳥の舊巢を用ゆることもある。この種が他の鳥を打つや、下方より打つこと能はずして、上方より捕へんとする鳥を眼懸けて、矢の如く、急に突進し來るのである。

〔一八〕 兒隼(こはやぶさ) *Falco subbuteo*, Tinn

英名を「ホッパイ」(Hobby)といふ。體軀は小さな鳩位の大きさであるが、それよりも稍瘦せて居る。然し翼は長く、凡そ八寸四分乃至九寸二分もある。翼の先端は、尾の末端に達するか、若くは之を超ゆることもある。脚と蠟膜とは黄色で、眼は暗褐色にして、鋭るごい。嘴には隼と同じく、截痕を有し、その基部は稍黄色であるが、嘴は著るしく鈎曲して、先端の色は黒いのである。頭と背とは黒褐色で、後頭部には、赤褐を混せる白色部が

ある。而して下尾筒部には、赤褐色の部分がない。

この種は北海道には多いが、本邦の南部には未だ発見せられないのである。その分



第 二 百 五 十 五 号 圖 ちごはやぶさ (After Herman and Owen)

や、蜻蛉の多数を捕へ、また時々蜜蜂を取るののである。歐洲にては、小森林にある高木の頂上に、巢を造るのであるが、英國にては、自身巢を

造ることなくして、烏鶻カササギの類、其他の鳥の巢を奪ひて、之を自分の巢とするのである。一回の産卵数は三四個である。

〔一九〕 しろはやぶさ *Falco gyrfalco*, Linn

英名を「ヂェルフアルコン」(*Jerfalcon, Gerfalcon, Gyrfalcon*)といふ。この種の羽毛は、殊によく隼に似て居るが、然し、翼は一般に、藍色が餘計に勝つて居る。體軀も、亦隼よりは遙に大きく、翼長は一尺一寸七分乃至一尺三寸八分もある。跗蹠部は、その前面全體に羽毛を生じ、且つ側面の上部三分の二には同じく羽毛が生へて居る。隼と異なる所は、外趾は内趾よりも長からざること、尾翹は、その先端に至りて、暗色をなさざることである。この種は兩半球の極地に産し、我邦にては北海道にて捕獲せられて居る。

〔三〕 兀鷹科 (*Vulturidae*)

此科の者は、英名を「バルチュア」(*Vulture*)といふ。獸でいへば、鬣狗の如き者にして、主として屍肉を食ふのである。爪は寧ろ短く、且つ鈍きを以つて、生動物を捕獲するに、充分な働きを營むことが出来ない。頭と頸とは、僅に綿毛を疎生する外、一體に裸出せる有様である。視力は鋭敏にして、食物を探るは、主として視力に因れども、又嗅覺も發達して居る。この科のものは、皆東半球に産するのである。

〔一〕 埃及兀鷹 (Egyptian Vulture) *Neophron percnopterus*, Sav.

英に又「フェーロース、ヘン」(Pharaoh's Hen)といふ。欧州の南部より埃及、波斯、印度等に産する鳥である。この科中では、最小なるものにして、體長は約二尺一寸に過ぎない。頭



鷹兀髭 圖六百二第
(Photo by Charles Knight)
(From Living Animals of the World)

喉、頸の前面は裸出し、檸檬のやうな黄色にして、翼には暗褐色の羽毛を有する。外體は白色である。而して脚は石竹色にして、眼は淡紅色である。屍肉を食ひて、市街を清潔にする効あるを以て、埃及其他の諸國に

ては、法律を以つてこれが捕獲を禁止し、之を保護して居る。尤も食物は、屍肉の外に、時には耕地に來りて、農夫が土壤を鋤き起した跡を追ひ、蠕蟲及び蟻蝻を食ふことがある。

〔二〕 髭兀鷹 (Bearded Vulture) *Gypaëtus barbatus*, Cuv.

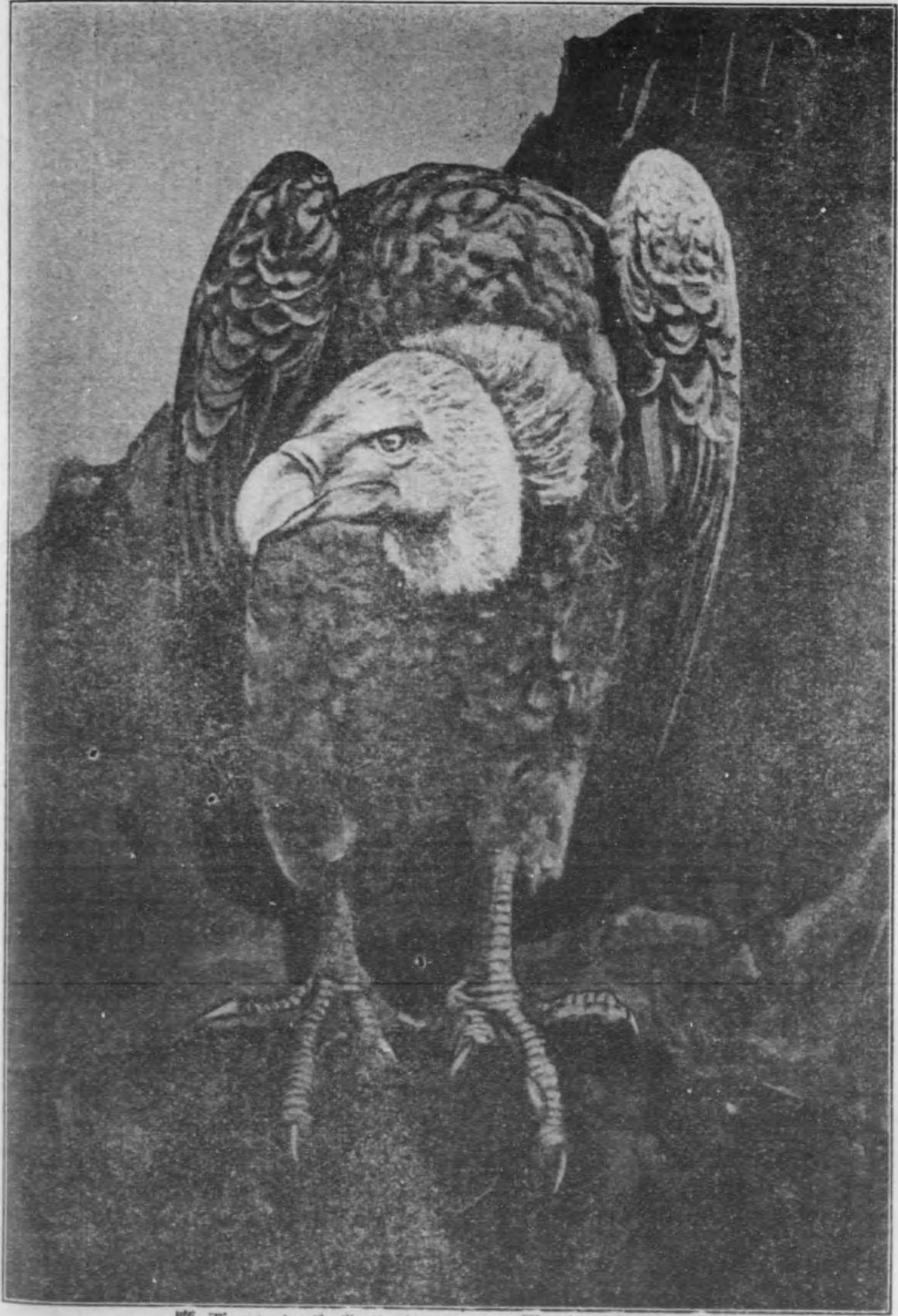
英に又「ランメルギイアール」(Lammergeier)といふ。體長は三尺五寸許である。頭と頸とには羽毛を有し、その形状は鷲に似て居る。鼻孔は長き剛毛を以つて被はれ、また嘴の下には剛毛が總狀に垂れて居る。飢餓に迫るときは、生動物を攻撃することあれども、常に屍肉を食する。彼れが餌物の骨を碎きて、その内部の骨髓を得んとするや、前種と同じく、之を携へて、高く空中に上り、之をば下なる岩上に墜落して、打ち破るのである。斯くの如き方法を取りて、陸棲の龜の骨骼を碎き破るのである。以前はスウイス、アルプ山に多かりしも、今は西班牙及び伊太利に見る位であるが、西亞弗利加には、尙ほ多く棲んで居る。

〔三〕 グリフォン 兀鷹 (Griffon Vulture) *Gyps fulvus*, Briss.

頭と頸とは綿毛を有する。西班牙、土耳其、波斯、亞弗利加の北東部、印度に産し、常に山地に棲息する。主として屍肉を食ふのである。

〔四〕 鷲鷹科 (Serpenariidae)

英に「セクレタリー、バールド」(Secretary-Bird)といふ。この科には唯一種を含み、大さは七面鳥の雌位にして、脚は非常に長い。頭は鷲に似て、且つ強き嘴を有する。而して眼には睫毛が生へて居る。翼は長く、跗蹠部も亦長くして、三趾は前向し、皆その基脚には短



鷹兀ンオフツリケ 圖七百二第

膜を連結し、一趾は後向する尾は長くして、殊に中央の尾翹は非常に長いのである。頸は長く、體は輕快にして、脚は踝關節に至るまで、毛を生ずる。常にサハラ以南の亞弗利

加の廣濶なる乾燥地に産し、樹上に、枝より成れる大なる巢を造り、二三卵を産む。卵は白くして赤味を帯び、六週間にして孵化するのである。

〔一〕 鷲鷹（丘博士命名）

Serpentarius secre-

tarius

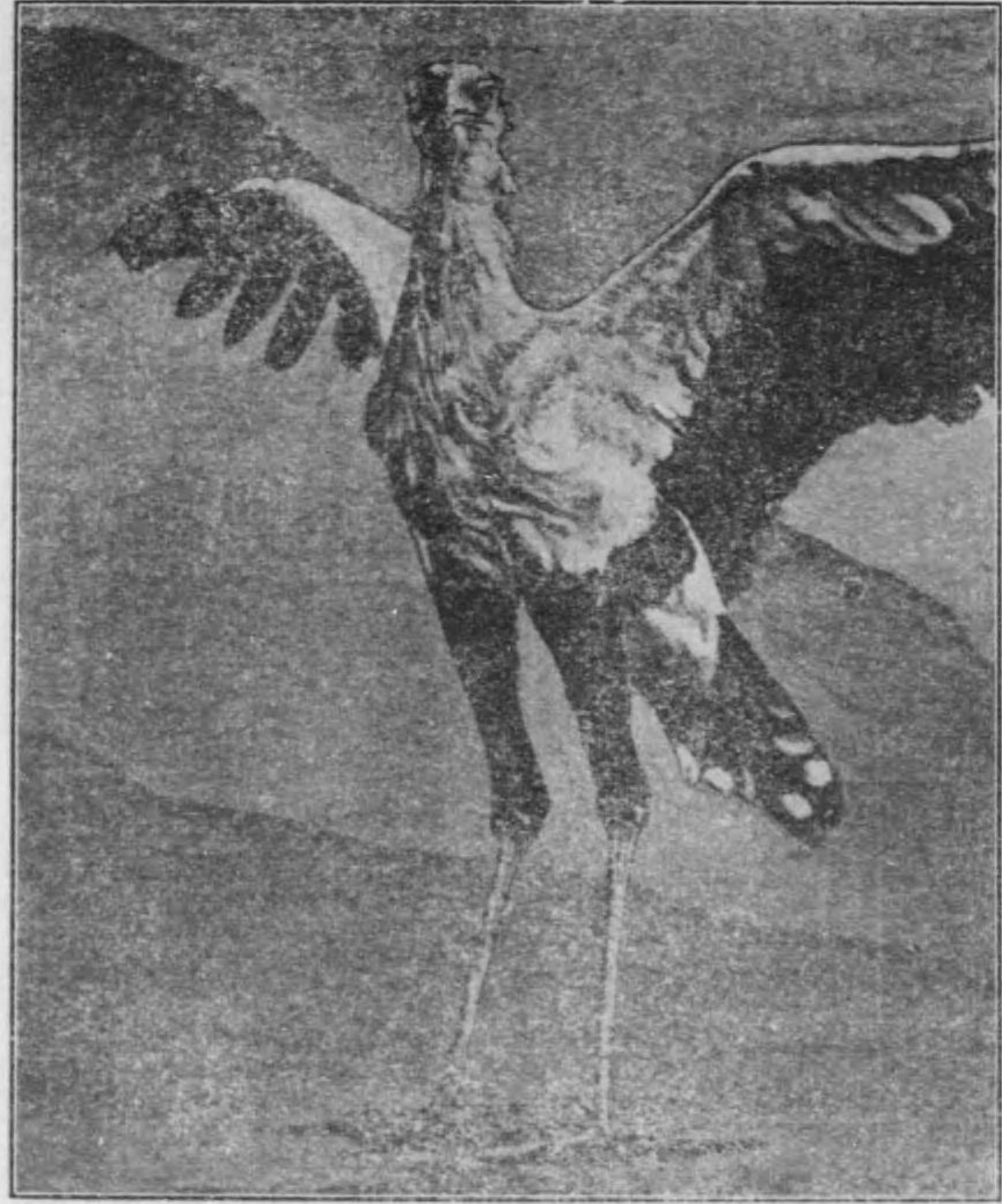
英名を「セクレタリー・バー

ルド」(Secretary Bird) といふ。ア

ビシニアより亞弗利加の南

部に産し、西方はセネガンビ

部に達する。頭の背部



アにも發見せられて居る脚は長きを以つて、體の高さは四尺以上に達する。頭の背部

五二四

には、總狀の羽毛を有し、恰も人が耳に、ペン軸を挿み居るやうに見ゆる。そこで更に「セクレタリー・バード」即ち秘書官鳥といふ名があるのである。羽毛は、重に眞珠の如き灰色と黒色とを混する。この鳥は兀鷹のやうに、空中を高く飛ぶことを得れども、多くは地上に棲息する。常に有毒蛇、其他の蛇類の如き爬蟲類を食ひて、有益なるを以て、その原産地の多くの地方にては、法令を以つて、この鳥の捕獲を禁止して居る。その蛇を殺すに當りてや、有力なる脚で、之を蹴り殺すのである。

〔五〕 大兀鷹科 (Cathartidae)

これは、亞米利加に産する兀鷹である。大きさは家鶏位より鶴位ハクセイもある。嘴は中庸の長さであるか、或は短く、著るしく鉤狀に曲つて居る。左右の鼻孔は、中央の隔壁によりて、分離することはない。口角は高く位し、且つ眼下に達する。後趾は非常に短く、前向せる三趾は、その基部に於て膜に因つて連結して居る。翼は大きく、且つ尖らない。尾は常に短く、眉毛は他の猛禽類に見るが如く、顯著ではない。腿には羽毛を密生すれども、長い羽毛を生ずることはない。頭と頸とは、兀鷹科に見るが如く、多少裸出すれども、時には非常に輝ける色彩を呈することがある。常に兀鷹科の如く群居し、主として屍肉を食ふのである。この科には七種がある。



兀鷹 圖十百二第

〔一〕 王兀鷹 (King Vulture) *Cypagrus papa*

頭の裸出部は橙黄色と紫色と、深紅色とを混じて、美麗である。頸の襟毛は石板色にして、體の羽毛は乳白色なれども、大雨覆と尾は黒い。この種は、南米のブラジルより

メキシコ、テキサス、フロリダに亘れる地方の平原、及び山林の丘陵地に棲んで居る。

〔二〕 大兀鷹 (巨博七命名)

Sarorhamphus eryphus, Geoffr.

英名を「コンドル」(Condor)といふ。エクアドル、ペルー、チレ



第二百九十九圖 大兀鷹 (Photo by W. P. Dando) (From Living Animals of the World)

のアンデス山より、南はバタゴニアの東海岸なるリオ、ネグロに至る地方に分布する。飛翔する鳥の中では、最大なるものにして、體長は四尺許で、兩翼を擴げるときは、九尺乃至十尺に達する。頭は小さく、嘴の頂上には肉冠を有し、暗紫色である。また肉冠の縁邊は、斜に切斷せられたる狀をなし、二條の肉絲となりて、頸側を擴り下つて居る。頸背

及び兩側には、閃々たる白色の綿毛より成れる襟毛を有し、體と翼の毛は、光澤ある黒色である。肩は、僂佻狀をなし、歩行する時や休息する時も、體を水平に支持し、以つて翼の地上に觸るゝを防ぎ、行歩は極めて遲緩である。

大兀鷹は、アンデス山の雪線上の高所に棲息し、「ビユーマ」に因りて殺されたり、又は病死せる「グアナコス」の屍肉をば、鋭るごき眼で發見して食ふのである。而して、嗅覺は餌を探るに効力はないのである。然しながら、屢々牧場に來りて、山羊の幼獸及び仔羊を掠奪することがある。雌は、絶壁から突出する岩石の下に、二個の大なる白卵を産み、卵は約八週間に於て孵化する。而して、雛は一年を経ざれば、自ら飛翔することが出來ないのである。

第二亞目 夜禽類 又 鴞類 (*Striges*)
〔一〕 鴞科 (*Strigidae*)

嘴は短く、甚しく鈎曲し、その基部には蠟膜を有し、口角は眼下に擴がる。顔は幅廣く、剛毛を有し、常に嘴の基部を隠くして居る。脚は強壯にして、跗蹠部は、中庸の長さであるか、若くは短く、常に羽毛を生ずる。四趾には、有力なる爪を具へ、後趾は最小にして、外趾は寧ろ後方に向ひ、殊に樹木に留る時に於て、然りである。翼は短きものと、甚だ長き

内外普通動物誌

ものごあるが、皆圓味を帯びて居る。尾は中庸の長さであるか、或は短い。頭は大きくある。而して鴟鵂カケと稱するものは、頭の兩側に、耳狀の羽毛總を有するものである。雌雄に因りて羽毛の色彩を異にするこごなければ、稀に雌の羽毛が、親と著るしく異なるものがある。雌は通例雄よりも大きいのである。常に樹木の空洞、岩石の罅隙、建物の隙間、地上若くは他鳥の巢中に産卵する。卵数は數個にして、卵殻は斑紋なき光澤ある白色にして、凡そ、一ヶ月位にして孵化する。この科のもの、食物は、主に鼠にして、農業上有益である。また、時には昆蟲を食ひ、稀に魚類を食ふものがある。斯かる食物の中で、毛髮、羽毛、及び骨の如き不消化分は、嚙囊にて彈丸狀に塊まり之をば口より吐出する。かゝる團塊状のものは、巢下に落下し、其處に堆積するを以て、容易に鴟類の棲家たるを知り得べきである。この科には約二百種を含み、世界到る處に産するのである。

〔一〕 鴟カケ (武洲、濠洲、東方) *Strix uralensis, Pallas.*

英名を「ウラル、オウル」(Ural Owl) といふ。體軀は大にして、翼長は凡そ一尺五分乃至一尺三寸に達する。羽色は暗褐色にして、脚は趾に至るまで、淡褐色の羽色にて被はれて居る。翼は甚だ圓く、第一と第十の手翹テグは、殆んど同長である。而して耳には、壓オサを具へて居る。



第二一〇圖 第三種 (有益有害鳥類)

この種は我邦に普通なる鳥にして、西方は西比利亞よりスカンジナビアにまで、擴がつて居る。

〔一〕 カケ

Strix uralensis, Linn.

英名を「ロング、イヤド、オウル」

(Long-eared Owl) といふ。

體長は一尺

二寸五分で、翼長は九寸二分乃至一尺である。嘴は黒く、眼の環毛は、半部は淡赤褐色に

して、圓盤の縁邊は、帯灰黑色にして、その他は淺黄色である。耳は^た壓を有し、耳狀羽毛は著明にして、暗褐色の條斑を有する。體の上部は濃き淺黄色にして、褐色と灰色の斑紋と、暗褐色の條紋を有し、胸腹の羽毛には、黒褐色の稍や太き縱條を有する。脚には趾に至るまで、羽毛を生じ、第一手蹼は、第四手蹼と殆んど同長である。

この種は、本邦到る處に棲息すれども、北海道には、あまり多くを見ないのである。その蕃殖區域は、本邦より南西比利亞及び歐羅巴を経て、英國に迄及んで居る。常に小禽、齧齒類、蝙蝠、爬蟲類、魚類及び大なる昆蟲を食する。この鳥は屢々日中飛び出すといふことである。卵は一産に四乃至六個にして、栗鼠、鳩の類、及びカササギ類、鳶の類の舊巢に、産卵することがある。巢は數個の細枝に、兎の毛を結び付けて造るのである。

〔11〕 ひみ、ぐく Strix brachyotus, Forster.

英名を「ショート、イーアド、オウル」(Short-eared Owl)といふ。體長は凡そ一尺一寸七分乃至一尺二寸六分であつて、翼長は一尺乃至一尺一寸三分許である。耳狀羽毛は短小にして、鳥が之を高擧するにあらざれば、見へない位である。また耳には^た壓を有する。虹彩は廣く、嘴は黒く、眼の周圍も黒く、顔面の圓盤は、前種よりは一層褐色である。體の斑紋は、前種に類すれども、背部には、多く赤褐色を交へて居る。また體の下部は、黒褐色の

縱條あれども、横條はない。

この種は、本邦到る處に普通なれども、北海道には、唯夏季のみ現出するのである。その蕃殖區域は、地球上の温帶地方の大部分を占め、英國にも蕃殖する。ヘルマン氏に據



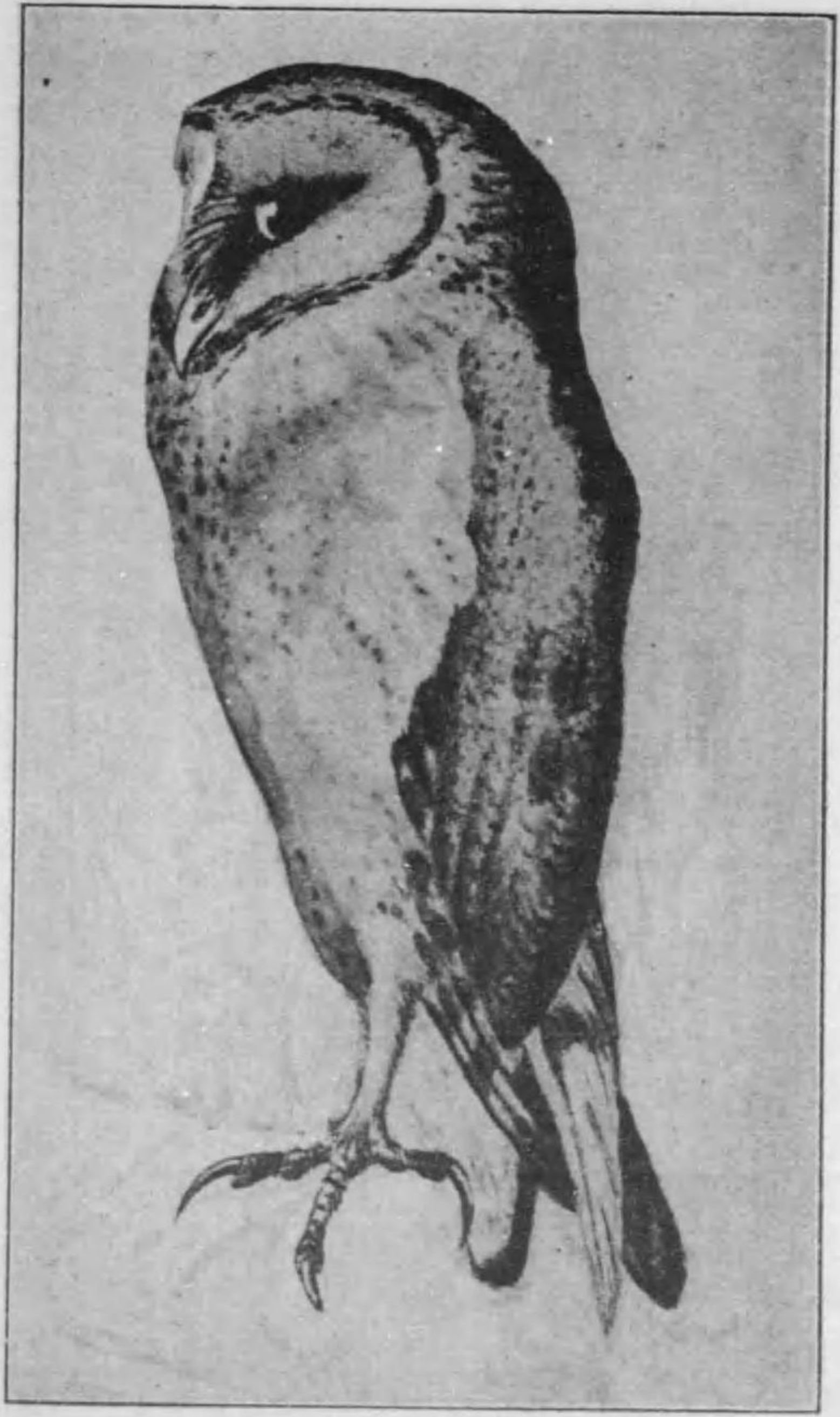
くづ、みこ 圖二百二第 (From Birds Useful and Harmful)

れば、ホンガリアにては、野鼠の蕃殖せる地方には、この種がノスリと共に群をなして徘徊し、頻りに之を食ふのを見るときいふことである。又ヘ氏に據れば、この鳥は、危険に遭遇するときは、鶏の如く、地上に蹲踞する特性ありといふ。その飛ぶや、體を捻つて行くのである。産卵數は通例四個なれども、旅鼠の移住する時は、彼れに取つて、頗る豊富なる食餌を得る折なるを以つて、この際は多産にして、一巢に七八卵を見ることがある。昔つて、スコットランドに於て、ムグラネズミ一種が、大に繁殖して、田園に大損害を與へし時に、彼れは、その豊富なる食料を得たりし結果か、一巢にありし卵の最多數は、實に十三個に上りし程なりきといふのである。

親鳥はよく雛を撫育し、その危険に臨むや、勇悍に敵を防ぎ、已れよりも大なる動物をも恐るゝことなく、之を攻撃するのである。

〔四〕 木小舎鴞(假稱) *Aluco Hammeus* (Linn.)

英名を「バーン・オウル」(Barn Owl) 又「ホワイト・オウル」(White Owl) 又「スクリーチ・オウル」(Screach Owl)



第百三十三圖 木小舎鴞 (有益有害鳥類) (略寫)

又「チャーチ・オウル」(Church Owl) 又「マツヂ・オウル」(Mudge Owl) 又「イエロー・オウル」(Yellow Owl) といふ。歐羅巴、亞細亞、亞米利加に廣く産する鴞にし

て、故醫學士、小川三紀氏の本邦産鳥目録にも、本邦に産する旨記載してある。體長は一尺一寸七分で、體には羽毛を密生する。眼は暗色にして、殆んど黒色に近いのである。顔の圓盤は甚だ突出し、鳥が休息する時は、心臟形を呈するのである。而してその縁邊は、白と錆色とを帯びて居る。嘴は稍黄色にして、少しく曲つて居る。體の上部は黄褐色にして、灰色と褐色の條斑を有し、また小白斑を散布する。而して顔面と體の下面とは、白色である。脚は趾に至るまで、薄く毛を生ずる。

この種は破壊せる城壁、塔の内部の基礎上、木小舎の椽の内部、農舎、教會堂、鐘樓、穀倉の隅、樹木の洞穴、斷岸の罅隙中に巢を構ふるが、巢は極めて粗末にして、唯内部に、吐出せる骨片や毛などを散けるに過ぎないのである。卵は、不規則に若干の時日を置いて、産み付けらるゝを以つて、同一の巢内に、雛と卵とを見ることがある。その数は五個、時には七個であつて、雌雄共に之を温め、時には雌雄が並んで、卵の上に坐せるものがある。この種の食物は、蹊鼠にして、ウヲタートン氏に據れば、雛を育てる時季には、親鳥は二十分若くは十五分間毎に、一疋の蹊鼠を捕へて運び來り、また家鼠も捕へ來るのである。嘗つて博士アルナム氏が、この種の抛出せる彈團狀の塊二百一十一個を検査せしに、此内には六疋の鼠、四十二疋の蹊鼠、二百九十六疋のムグラネズミの類、三十三疋の

チネズミ、三十八疋のムグラモチ、十八羽の鳥、四十八疋の甲蟲を發見し、この外にコフキコガ子屬一種 (*Melolontha vulgaris*) の多數を發見したのである。

[五] しまふくろ又大み、づく *Bubo blakistoni*, Seeböhm.

英名を「ブラキストンズ、イーグル、オウル」(*Blakiston's Eagle Owl*) といふ。我邦最大の鵂にして、翼長は一尺八寸四分もある。次列風切は幅廣くして長い。腹部の羽毛は密生し、黒褐色の縦斑を有し、趾は裸出すれども、跗蹠部には羽毛を有する。また耳狀羽毛は、甚だ著明である。この種は北海道に産するのである。

[六] わしみみづく *Bubo maximus*, Gerni.

英名を「イーグル、オウル」(*Eagle Owl*) といふ。翼長は實に一尺五寸一分乃至一尺六寸八分に達する。耳狀羽毛は甚だ顯著にして、脚には爪に至るまで、羽毛を密生する。本邦にては、五島及び長崎にて捕獲せられたのみである。而してその分布は、本邦より、亞細亞大陸、歐羅巴大陸及び英國にまで擴がつて居る。

[七] あをばづく又ぼんぼんごり(上總長生郡方言)又ひきやくごり(播磨方言) *Ninox scutulata* (Raffles.)

英名を「ブラウン、オウレット」(*Brown Owllet*) といふ。體軀は小さく、翼長は六寸七分乃至七寸五分である。蠟膜は脹れ出で、この部に鼻孔を開く。頭より背は黒褐色にして、翼と尾とには横條がある。胸と腹とは暗褐色に、白斑を支へ、下尾筒は殆んど白色である。また跗蹠部には、暗褐色の短毛を生じ、趾には刺狀の羽毛を生ずる。この種は本邦に普通にして、東洋區を通して廣く擴がつて居る。

[八] このはづく又かきづく *Scops Japonicus*, Temm. and Schl.

英名を「スコップス、オウル」(*Scops Owl*) といふ。體軀は小さく、翼長は凡そ四寸四分乃至四寸八分である。耳狀羽毛はよく發達し、全體には、茶、白及び黒褐色の細き斑紋を有する。跗蹠部には、羽毛を生ずれども、脚は裸出する。この種は、本邦には稀に見る所のものである。

[九] おほこのはづく又みみづく又づく

Scops semitorques (Temm. and Schl.)

英名を「フェザード、トード、スコップス、オウル」(*Feathered-toed Scops Owl*) といふ。翼長は凡そ五寸乃至五寸九分である。背は茶褐色と黒色の細き斑紋を交へ、頸部の後方には、幅廣き赤褐色の斑紋がある。跗蹠部は、淡褐色に黒斑を有する羽毛にて、被はれて居る。この種は本邦到る處に産するのである。

第二目 攀禽類又攀木類 (Scansores)

この類の嘴は、常に強壯である。而して喙木鳥の嘴の如く、伸長して尖り、以つて樹幹を叩き、その中に潜居する木蠹蟲を引き出すに適するものがあるし、或は鸚鵡の嘴の如く、短大にして、上嘴は著るしく彎曲して鉤状をなし、以つて攀縁を助くるものもある。脚には四趾を有し、二趾は前向し、二趾は後向し、樹木に攀縁するに巧みである。翼は概して十枚の手翹を有するのである。

この類は、常に森林に棲息し、樹木の洞穴内に巢を營むものが多い。食物は昆蟲を食ふものあり、又果實及び植物を食ふものがある。杜鵑類の外は、一夫多妻である。

攀禽類の保護鳥は、皆禁獵鳥類、即ち無期保護鳥にして、これには左の種類がある。

- (1) 喙木鳥
- (2) 杜鵑
- (3) 郭公
- (4) 筒鳥

〔一〕 大嘴鳥科 (Rhamphastidae)

英名を「タウカン」(Toucans)といふ「タウカン」はブラジル語にて「羽毛」といふ義である。これこの類のものは、嘴の兩側に密集せる鬚があり、羽毛と同様なるを以つて、この名が起つたのである。體軀の大きさは、通例は中庸大にして、鵜大より雉鳩位であるが、



大 嘴 鳥 の 圖